

彼はさう言はないで居られなかつた。と、これも一瞬間であつたが、彼女はまた彼を振り返つて笑つた。クライドは、我にもなく身體が震へるのを感じた。彼は、その瞬間、彼女を好きになつてゐたのだつたが、彼の地位やギルバートへの約束の爲めに、注意しなければならぬと思つた。無論彼は、此の娘に他の女工達以上の事をしてはならないと思つたが、かうして側に立つて居ると、多少變な氣がしないでもなかつた。それ程彼女は可愛らしかつたし、彼女に引つけられて居たのだ。彼は、彼女が一介の女工である事、彼の部下である事を、改めて思つて見たが、しかも、彼女が可愛らしいと言ふ事實は、どうする事も出来なかつた。

間もなく彼は、此の日に這入つて來た他の娘達の處に行つたが、またトッド嬢の處に行つて、アルデン嬢の成績を成可く早く知らせ呉れる様にと頼んだ。——彼はそれが知つたのであつた。しかし、クライドがロバアタの名前を挙げ、彼女がクライドに笑ひ掛けると同時に、そこから二テ一ブルばかり離れて働いてゐたルザ・ニコフオリツチが、隣の娘を突つて、先づ眼配ばせをしてから、クライドとロバアタの二人の方に首肯して見せた。隣の娘も、彼等に眼をつけて居たが、クライドが去つて、ロバアタが獨りで働き出すと、彼女は隣の娘に倚りかゝる様にして囁いた。

「もう仕事が出来るやうになつたつてさ」

彼女が眉を擧げ、唇を曲げて見せると、隣の娘も小さい聲で囁いた。

「随分早いわね。それにあの人ツたら、私達には眼も呉れないぢやないの」

二人は狡るさうに笑ひ合つた。リザ・ニコフオリツチは嫉妬して居るのだつた。

十三

ロバアタの様な娘が、どうして此の時、グリフィス會社に仕事の口を求めるやうになつたかについては、多少注目すべき點がある。クライドが自分の家庭や自分の生活に對して感じたと同じ様に、彼女も亦、自分の生活に非常な失望を感じて居たからである。彼女は、此の町から北に五十哩ばかりのビルツ附近の百姓タイタス・アルデンの娘であつて、子供の時から貧乏に見馴れて來たのであつた。彼女の父は、昔からの此の地方の百姓エフレム・アルデンの三人息子の末子であるが、四十八歳の今は、殆んど倒れかけた家に住まねばならない程落ぶれてゐた。それは、彼が父親から譲り受けた家であつて、その昔、未だ荒廢しない頃には、ニューイングランド風の代表的な破風造りの家として、認められて居たものであつた。

ロバアタの両親に至つては、純粹なアメリカ主義の標本であつて、現實を拒んで幻を尊ぶ様な

人達であつた。彼等はたゞ生れ、たゞ生き、たゞ死んで行く平凡な個人の集合の一分子であつて、その爲めに世界は一點一劃の増減も受けない。——さうした凡人の一人である。彼は、その二人の兄と同様に、父親が百姓であつたと言ふ理由だけで、自分も百姓をして居る。彼がその村で百姓をして居るのは、たゞその土地を父親が残して置いて呉れたからであり、その土地で働く方が、他の土地で働くよりも樂だからである。彼が共和黨員であるのは、彼の父が共和黨員であつたからであり、此の郡が共和黨の郡だつたからである。それ以外の事は、彼には起り得ないのであつた。政治に於ても宗教に於ても、彼は只、彼の周囲の人が善いとし惡いとして居るものを、そのまゝ受け容れて居るに過ぎない。どんな眞面目な、どんな評判の高い本でも、此の家族の誰も、未だ曾つて讀んだ事がない。だが、因襲と宗教と道徳とに關する限り、彼等は素晴らしく正直で公正で敬虔であるのだ。従つて、彼等の間に生れた娘も、かうした世界には惜しい素質を持つてゐたとは言へ、その宗教、道徳の觀念は、その地方の僧侶と俗人とで作りに上げたものと、餘り變らなかつた。しかし、同時に、暖かい空想的な官能的な性質を持つてゐる彼女は、十五六歳になると、開闢以來凡ての女に共通したあの夢想——彼女の美と魅力とが、何時の日にかよき男の魂を捕へるであらうと言ふ夢想に、充たれざるを得なかつた。

實際彼女は、その子供時代を苦しい貧乏の中に過し乍ら、尙、その生來の空想力に依つて、絶えずもつと好い月の來る事を考へてゐた。何時かアルバニーやユチカの様な大きな町に行ける日があるかも知れない。もつと新しい、もつと大きな生活が展げるかも知れない。それは、何と言ふ夢だつたらう？ 十四歳から十八歳になるまでの年月、彼女はよく一人で、晩春の果樹園の中に立つてゐることがあつた。あらゆる樹が紅色に染められ、滿地に香しい花が散り敷いた五月の太陽の下で、彼女は幾度空を仰ぎ、笑ひ、吐息して、その兩手を廣く生に向けて擴げた事だらう？ 生きんが爲めに！ 眼前の若さと世界とを得んが爲めに！ 彼女は、通りがかりの若者が、彼女に送る微笑を空想した。彼等は彼女を見返へるであらう。彼等は彼女の若い魂を、夢にまで誘ふであらう。

だが、それにも拘らず、彼女ははにかみやで、従つて引込み思案であつた。彼女は男を怖れた。殊に、此の地方の普通の型の男を怖れた。當然に、男達の方でも、彼女のはにかみとお上品とに怖れをなして、その容貌の美しさに拘らず、彼女に寄りつかなくなつてゐた。十六歳になつた時、ビルツに行つて、アツブルマンの呉服屋で、五弗の週給で働く事になつた時には、彼女を惹きつける様な澤山の若い男を見た。しかし、其處でも、自分の家族の低い地位を氣にして居たし、彼女の世間馴れない

眼には、男達の總てが上手に見えたので、彼等は彼女には眼も呉れないのだと思ひ込んで了つた。彼女を男から遠ざけたものは、此の時も矢張り彼女自身の氣持ちであつた。彼女は其處で十八九歳まで働いたが、自分自身の爲めには、たゞ、無駄に働いてるやうな氣ばかりしてゐた。自分の家との關係が、餘りに密接だつたからであつた。

丁度、その頃に、此の地方にとつて殆んど革命に等しい様な出来事が起つた。此の地方の勞銀が廉いと言ふので、一つの小さい靴下工場が、トリツベットミルに建てられたからである。ロバアタは、附近の人達の普通の考へ方に従つて、かうした種類の仕事は多少下等なもの、様に思つてゐたのだが、此の工場で拂ふ高い勞銀の事を聞くと、そのまゝにはして居られなかつた。彼女は直ぐトリツベットミルに行つた。そこには、以前ビルツに住んでゐた知り合ひがあつたので、その家に下宿して、日曜毎に家に歸つて来たが、この間に彼女は多少の貯金をして、將來の學資に當てようと思つてゐた。その時の彼女の計畫は、ホーマーカライカーガスの實科學校に行つて、簿記か速記を習はふと言ふのであつた。

此の夢想とこの貯蓄心との爲めに、彼女はそこで二年ばかりを過した。週給十二弗を得てゐた彼女は、その計畫に足るだけの金を儲けたのであつたが、その家庭に色々の入用があつたし、彼女も彼等

の貧乏を幾らかゆるめたいと思つた爲めに、その収入も、殆んど全部が家族のものになつて了つた。しかもこのビルツでも、彼女に釣り合ふやうな澤山の若者が居乍ら、單に女工であるが爲に、見下けられるのが常であつた。ロバアタ自身も、さうした女工とは遙かに違つた娘であり乍ら、彼等と附合つてゐる爲めに、自然に同じ様な心理になり勝であつた。實際彼女は、此の町でも、彼女に興味を持てるやうな男は、男の方で彼女に興味を持つて呉れない。少くとも——合法的には附合ふ意志がないのだと言ふ事に、自らあきらめなければならなかつた。

丁度その頃に、二つの事件が起つて、彼女の將來、殊に結婚問題について、眞面目に考へなければならなくさせた。一つは、彼女の三つ年下で、その時二十歳であつたアグネスの結婚問題であつて、これ迄、彼女達の村で小學校長をしてゐた青年が、在學時代とは見違へるやうになつた彼女と、結婚したいと言つて来たのだつた。それを聞いたロバアタは、自分も今結婚しなければ、老嬢にならねばならないと思はないで居られなかつた。しかも、どうしていゝか解らない中に、突然トリツベットミルの靴下工場が閉鎖して了つたのである。彼女は、母親を助けると共に、妹の結婚を手傳ふ爲めに、ビルツへ歸つて行つた。

しかし、それから間もなく、また別の事件が起つて来た。彼女がトリツベットミルの工場に居た頃、

そこで知合ひになつたグレース・マアルと言ふ娘があつたが、その娘がライカーガスの町に行つた二三週間の後に、フィンチユレー會社に雇はれて、十五弗の週給を得る事になつたのだつた。或る日、彼女がグリフィス會社の前を通りかゝると、雇人入口の前に「女工入用」の札が出てゐた。聞いて見ると、此の會社では最初九弗か十弗の週給しか出さないが、仕事の手に入つて來ると、その熱練に應じて十四弗から十六弗の給金が得られると言ふ事だつた。部屋代や賄代に七弗は要るが、兎に角相當な収入にはなるので、彼女は早速ロバアタに、此の町に來て一緒に住まないかと言つてやつた。ロバアタも最早、百姓生活に堪へられない事を感じて、もう一度働きたいと思つてゐた處だつたので、母親と相談の結果、村を去る事にした。

しかし、ライカーガスに行つて、クライドの下で働くやうになつても、彼女の生活は、社會的にも物質的にも、トリツベツトミルに居た時と、大した變りはなかつた。ロバアタの可愛らしさや快活さに惹きつけられて居るグレース・マアルは、色々彼女に親切にして呉れたが、彼女の入つて來た世界は、彼女が生れた世界と同様に、退屈な不自由なものであつた。

その頃彼等は、グレース・マールの姉婿に當るニュートンの家に下宿してゐたが、みんな不親切な人達ではなかつたが、ごく普通の職工で、宗教的ではあつたが、遍狭な人達であつた。ジョージ・ニ

ユートンは、相當に面白い男ではあつたが、こせくと、色々な計畫を立て、後生大事に僅かな貯蓄をして居るやうな男だつた。彼等は、克蘭ストン會社の給金をこつくと貯めて、その貯金でテラー街に一軒の古家を貸りて、素人下宿を營んで居たが、五人の下宿人からの収入で、家賃を拂つた上に、彼等自身の生活費も充分に出るのだつた。一方グレース・マアルも、ニュートンの妻君と同様に、さゝやかな家庭を支へる事に無上の満足を感じて居るやうな人達であつて、因襲や宗教的感情に凝り固つて居た。

従つて、かうした特殊な家庭に入つて來たロバアタは、間もなく、この家庭が、ビルツの町のさうした家庭と同様に、遍狭で束縛が多い事を感じないで居られなかつた。實際彼等は、嚴格にその因襲に従つてゐた。その因襲を破つて何の利益があるのだ？ 職工は職工らしくその社會に順應して、立派な基督教徒の職工たちに見習ふが好い。そこで、彼女は、毎朝、他の下宿人達と一緒に、まづい朝飯を食堂で食べねばならなかつた。食堂にはグレースの他に、克蘭ストン會社に勤めて居るオーバル・フェリスや、オリブ・ボープも居たし、電氣會社に勤めてゐるフレッド・シャールックも居た。食事が済むと、彼女は直ぐ、川を渡つて工場地に向つて行く職工の流れの中に入つた。そこには、あらゆる小路、あらゆる家から、無数の女工や男工が流れ込んで來てゐた。中には、人間と云ふよりも寧

ろ亡霊と言ひたい様な、よほくの老人達も混つてゐた。町の大通りに出ると、さうした群集はいよいよ増して来て、少し小綺麗な娘だと見ると、誰彼の差別なく色眼を使ふ男工が眼に立つて来る。と、娘達の方でも、盛んに作り笑ひをしたりして、男達の氣を惹かうとする。それは、彼女にとつて、何處の町でも見なかつた、厭らしい光景であつた。

夕方になると、同じ群集がまた橋を渡つて歸つて来る。これだけの器量と、これだけ強い欲望を持つて居るロバアタではあるが、社會的にも道德的にも違つた教育を受けて居る彼女は、自分獨りが別物の氣がして、淋しくなつて来る。賑やかな世間に、孤獨な自分を引較べる彼女は悲しかつた。彼女が家に歸るのは、何時でも六時であつた。食後にはもう何もする事がないので、グレースと二人で活動小屋に行つたり、時にはメソヂスト教會の集會にも出席した。

だが、かうした家庭に居て、クライドの下で働く事は、彼女にとつても嬉しかつた。此の大きな町、此の立派な大通り、かうした大きな工場、その上に、此の若い面白さうな、笑ひ掛けて呉れるグリフ・イスさん。

十四

彼女に會つたクライドも、同様にひどく心を掻き割られてゐた。デイラードやリタやゼラとの交渉は流産に終つて了つたし、グリフイス家に呼ばれて、ベラやソンドラやベルチンを瞥見はしたが、別に何の意味もなかつた事を考へると、彼は、心の底から淋しかつた。あの高い世界！しかし、彼はどうにもならないのだ。しかも、その空しい望みの爲めに、彼はかうして自分を孤獨にして居るのではないか？だが、それは何の爲めなのだ？彼は何時になく淋しいではないか？それにピートン夫人の此の貸間！彼の工場への行き歸りに、お辭儀をしたり言葉を掛けたりする人はある。大通りの番頭にも、彼に挨拶をするやうな連中もある。女工の中にさへ、彼に近付いて来る者があるが、彼は興味も持たないし、友達にならうとも思はない。だが、それがどうしたのだ？何にも無いではないか。而かも、彼は、グリフイス家の人間とした、彼等の尊敬を受けて居るではないか？何と言ふ變な立場だらう。一體どうしたらいいのだ？

一方、ロバアタ・アルデンも、此の町の様子が次第に解つて來、クライドの立場や、その魅力や、彼女に興味を持つてゐるらしい様子が解るにつれて、色々と思ひ煩ふやうになつて來た。此の家の一員となつて、此の町の氣風を呑み込んで來た彼女には、クライドの様な眼上の人に、自分の氣持を知らせる事が不可能である事を感じて來た。女工が、自分の目上に對して野心を持つ等と言ふ事は、此

の町では大變な事にされてゐた。信仰があり、品行の正しい女は、さうした事はしない。しかも、金持と貧乏人の區別が、此の街では、鋭いナイフで切り立てたやうに、はつきりと立てられてゐた。同時に、外國出の家族に對しては、凡て、無智で下等で不道德で、非アメリカ的であるとして、交際禁止令が布かれてゐた。彼等と交渉を持つ事は、何にも増して悪い事であつた。

のみならず、此の町の中の下階級——その階級に、彼女や彼女の知人達が屬して居るわけだが——に於ては、ダンスは勿論、男と一緒に散歩をしたり、活動に行つたりする事さへ、悪い事だと思はれてゐた。しかも當時、彼女はダンスに興味を持ち始めてゐたのだつた。だが、それよりもつと悪い事には、彼女とグレース・マアルドで行き始めた教會の人達が、彼女達を自分達と同等な人間として扱つて呉れない事だつた。彼等の大多數は、此の町の相當に成功した人達だつたからである。従つて彼等は、最初の一二週間教會に出た後は、再び昔の因襲的な生活に歸つて、慰みのない生活を送らなくてはならなかつた。

かうした結果は、いよく、ロバアタをして、クライドに心を寄せさせるやうになつた。彼女は、クライドが生活してゐるらしい高い世界を想像し、その個人的な魅力に惹つけられて、或る野心と共に或る不安を感じ始めた。彼女は毎日、クライドの眼が自分に向けられて居るのを、感じないで居られなかつ

た。だが、クライドの曖昧な様子を見ると、いつか言ひ出して、彼女から誤解されはしないかと思つてゐるらしくも思へた。だが、それから二週間も経つと、彼女は、クライドから早く言ひ出して呉れ、ば好い——早く何かの緒が開ければ好い、と思ふ様になつたが、同時にまた、さうして呉れない方が好い——それは恐ろしい事でもあり、不可能な事でもあると思ふやうになつた。さうした事をすれば、他の女工達が直ぐ氣付くだらう。他の連中はみんな、クライドを自分達の手に及ばない人だと思つて居るから、二人の間に何かあれば、屹度、クライドが特別扱ひをしてゐると感ずるであらう。しかも、それら總ての結果は、彼女がだらしなと言ふ評判に終るであらう。

無論、クライドは、ギルバートから言はれたあの教訓を忘れては居なかつた。それだからこそ、今日までの彼は、どの女工にも特別な注意を拂ふやうな事がなくて来たのだが、今ロバアタが来て見ると、彼は殆んど無意識に、彼女のテーブルに寄つて行つて、彼女の仕事振りを見て居ないで居られなかつた。見て見ると、彼女は、最初に彼が豫想した通りに、利巧な手早い工女であつた。彼女は殆んど誰の指圖も受けないで、直ぐ仕事を覚え込んで、容易に他の女工と同じ様な給金——週給十五弗を得るやうになつた。しかも彼女は、此の工場で働く事に幸福を感じて居るやうに、何時も嬉しさを以てゐた。クライドが多少の注意を拂つて呉れる事も、彼女には嬉しいらしかつた。

のみならず、クライドが驚いた事には、これ程上品な勝れた娘であり乍ら、彼女はまた相當な快活さと自由さを持つてゐて、單に感情的であるばかりでなく、何處となく詩的な官能的な處を持つて居るのだつた。彼女は誰とでも友達になる上に、本質的に別人である筈の多數の外國系の娘達の考へ方をも、理解し得るのであつた。彼女がさうした娘達と話して居る言葉を聞くと、彼女は決して他のアメリカ娘のやうに、因襲的であつたり威張つたりはしてゐないのである。しかもそれでゐて、彼女は彼等から尊敬されてゐた。

その頃の或る晝休みの事だつた。晝飯を食べに食堂に行つたクライドは、何時もよりも少し早く自分の部屋に歸つて來たが、歸つて見ると、數人の外國系の娘達が、四人のアメリカ娘と一緒に、ポランド人のメリーを取圍んでゐた。メリーは、外國系の娘達の中でも、とりわけ亂暴なお轉婆娘であつたが、昨夜ある男から送られたビードの手提鞆の事を、しきりに話してゐた。

「そいつね、私に情人になれつて言ふのよ」彼女は賑やかな聲でさう言つて、皆の前に手提鞆を振つて見せた。「私は考へて置かうつて言つただけど、でも好い手提鞆でせう？　ねエ」と、彼女は冗談のやうに、ロバアタにその鞆を突出した。「私、一體、其奴をどう扱つたらいいのよ？　一緒に持つて情人になるの？　それとも、この鞆を返しちまふの？　でも、私、その男をちよいと好きなのよ」

ロバアタの育ちを知つて居るクライドは、彼女が嫌な顔をするだらうと思つて見てゐたが、彼女には一向そんな様子はなかつた。その様子だけで察すれば、彼女は酷く愉快がつてゐるやうに見えた。直ぐに、彼女は、賑やかな微笑を浮べて答へた。

「それはメリー、その人が綺麗かどうかによるわよ。好い人だつたら、暫くその人を擔いでゐて、鞆も使つてれば好いぢやないの」

「ところが、そいつ、待てないと言ふのよ」メリーは、近付いて來たクライドに色眼を送り乍ら、その場の猥褻さを想像させる様に、あけすけに言つた。「今晚、情人になるか、それとも鞆を返すか、どつちかだつて言ふんぢやないの。而かもそれが、私ではとても買へない様な好い鞆なのだもの。一體どうしたらいいのよ？」

「ふん、こいつは大問題だ。アルデンの様な田舎の小娘には、少し荷が勝ち過ぎるな」とクライドは自分一人で思つてゐた。

しかしロバアタは、困つたと言ふ顔はしたが、一向、困つて居ない事がクライドにも解つた。

「まあ、では、あんた、板挟みになつてゐるんぢやないの。どうしたらいいのよ。一體」

彼女は眼を大きく開いて、すつかり驚いた様な顔をしたが、それは只狂言だと言ふ事が、クライド

にも解つた。

だが、デンマーク人のレナは、直ぐ言ひ出した。「私だつたら、その男と靴と兩方を貰つとくね。その人、何處に住んでるのよ。私には今、誰もいないだから、あんたに要らなければ私が貰つとくわよ」。彼女が手を延して、メリーからその靴を取らうとすると、メリーも素早くそれを引込めた。部屋中の娘達が、此の奇抜な荒事に興を催して、歡聲を擧げて笑ひ出した。無論ロバアタも大聲を擧げて笑つたが、クライドは、その様子を見て、嬉しかつた。彼も、かうした亂暴な滑稽を、無邪氣な遊戯として好いてゐたからである。

「さうよ。それが好いわよ。レナ」丁度その時、汽笛が鳴つて、隣の部屋のマシンが動き出して居たが、クライドはロバアタがさう言つてゐるのを聞いた。「好い男は、さう毎日見つかるつて譯ではな

いんだもの」その時、彼女の眼は輝いてゐたし、可愛らしい唇は、笑ひの爲めに歪んでゐた。無論それは出鱈目の冗談に過ぎなかつたが、しかし彼女が、クライドが怖れてゐた程遍狭な娘でない事は明らかだと思つた。彼女は、快活で寛大で善良で、人間らしいのだ。そこには素晴らしい自由さがある。彼女の着物は貧弱であつたし、帽子も古びて居たが、他の誰よりも美しく見えたし、他の娘達のように、唇や頬を塗り立てねばならない程貧しい顔でもなかつた。しかも、あの腕や首の何と言ふ

くよかさよ！ しかも一度仕事にかゝると、彼女はもう何もかも忘れて居るやうに見えた。日盛りの暑さの爲めに、顔ちうが汗ばんで来るのを、彼女は絶えずハンカチで拭きとつてゐたが、それさへも、クライドには、彼女の可愛らしさを増すやうに思へた。

今やクライドには、不思議な日々が續いた。此の長い日中の一日ちう、彼女の側につきつきりて、愛す可き娘を眺め崇める事が出来るのだ。しかも自ら進んで行きさへすれば、自分の望みがかなへられるかも知れないのだ。彼はホルテンス・ブリツクスにもかうであつた事を思ひ出したが、今はあの時よりも満足であつた。彼女はホルテンスよりも單純で親切で、尊敬すべき娘であつたからである。ロバアタ自身は、最初から彼に無頓着を装つてゐたが、それは嘘であつた。彼女は只、彼を占有し得るかどうかに迷つてゐたのだ。クライドの顔や手の美しさ、あの髪の色や軟らかさ、あの眼の光や憂鬱さや黒さ。何と言ふ立派さだらう。何と言ふ美しさだらう。

それから間もない或日、ギルバート・グリフイスが、通り掛りに此の部屋へ寄つて、クライドと語してゐた事があつたが、彼女はその様子を見て、クライドが社會的にも經濟的にも、想像以上に高い地位の人間である事を想像した。丁度その時、レナが彼女の隣で仕事をしてゐたが、ギルバートが這入つて來ると、彼女の方に口を寄せて言つた。

「ねえ、あれがギルバート・グリフィスよ。此處の社長の息子さんだから、社長が死んだら此の工場もあの人の物になる筈なのよ。そして、あの人が従兄弟よ。二人ともよく似てるぢやないの」

「本當によく似てるわね」とロバアタは、二人をこつそりと見較べ乍ら答へた。「でも、クライド・グリフィスの方が幾らかい、男ぢやない？」別の隣りで働いてゐるホダが、此の言葉を聞いて笑ひ出した。「此處の人は誰でもさう言つてゐるわよ。だつて、ギルバートさんのやうに威張り散らさないだけでもましなもの」

「あの人も金持なの？」ロバアタはクライドの事を考へ乍ら尋ねた。

「さア、さうではないらしいつて話よ。此處に来るまでは、皺伸部屋で働いてたのですもの、きつとあれで、その日暮しよ。でも、つい近頃、此の仕事を習ひに來たのだから、此の部屋にも餘り長くは居ないだらうと思ふの」

此の最後の言葉を聞くと、ロバアタはどうしようかと思つた。これまでの彼女は、自分がクライドに、ロマンチックな思ひを寄せて居るとは思つてゐなかつたのだが、今、突然、彼が何處かへ行つて再び見る事が出来なくなるかも知れないと思ふと、彼女の心は浪立つて來た。あんなに若く、あんなにさつぱりした、面白さうな人ではないか。しかも向ふでも、彼女に興味を持つて呉れて居る。さう

た、それはもう解りきつて居る。だが、あの人が彼女に興味を持つて居る等と考へる事は、間違つて居るのだ。あの人を彼女に惹きつけようとするのだから、既に間違ひなのだ。此の会社では、これ程の重要人物ではないか。遙かに上に居るあの人ではないか。

クライドが、此の會社でこれ程地位の高い人間であり、金持であるかも知れないと聞いた時、彼女を最も不安にしたものは、クライドの彼女に對する興味が、合法的なものではあり得ないと言ふ事が確かになつた事だつた。彼女は一介の貧乏女工ではないか。しかも彼は、此の富豪の甥ではないか。彼が彼女と結婚して呉れる筈がない。しかも結婚以外に、何處に二人の合法的關係があるだらう？これはうっかりしては居られない！

十五

當時、クライドの氣持は、ロバアタに對しても、ライカーガスでの彼の地位に對しても、烈しく動搖してゐた。一方でギルバートから女工と交際してはいけな言はれて居り、他方で彼の日常生活は、殆んど全く孤獨であつた。此の下宿に變つてから、彼は多少立派な町に住む事にはなつたが、他の點では、以前の下宿生活の方が未だ好い位であつた。以前には、こちらが求めれば友達になれるや

うな人達が幾人も彼の周圍に居たが、今はピートン夫人と同年輩の獨身者の弟と、その息子の三十計りの銀行員との他には、話をする者も居ないのであつた。彼等も他の人達と同様に、クライドが好い親戚を持つてゐる事を考へて、彼に交際を求め、事を潜越な不必要な事だと思つてゐるのだつた。

ロバータは、彼が求めて居るやうな高い世界の女ではなかつたが、しかも彼女には、無限の魅力が備はつて居た。孤獨な日常生活を送つて居る上に、年頃から言つても性格から言つても、抵抗し難い欲望を持つて居る彼は、最早や彼女から眼を離す事が出来なくなつて居たし、彼女自身も、彼から眼を離す事が出来なくなつて居た。二人の間には、それとない、しかし熱の籠つた眼配せが交された。彼女自身は、クライドに知らせようと思つて、さうした眼配せをするのではなかつたが、クライドはそれを見つけて、心弱くもなり、熱ッほくもなるのだつた。彼女の可愛らしい口元、愛らしい大きな眼、輝やかなしい恥しうな微笑。しかも彼女のあの兩腕の美しさよ！ すんなりとした身體のすばしこさよ！ 彼に若し勇氣さへあれば、鳥渡話し合つたゞけで、何處かに行く事も出来るのだ。彼に僅かの勇氣さへあれば、彼女は嫌とは言はないであらう。

困惑。憧憬。燃えさかる渴望の日々。彼の生活の變則的な逆説的な矛盾は、彼を困惑させるばかりでなく、更に苛々させた。世間の人は、彼が愉快に社交を楽しんで居るだらうと想像して居るのに反

して、彼自身は絶えず、孤獨と物足りなさとの中に暮して居るのではないか。

そこで彼は、土曜の午後や日曜日には、缺かさず見物の小旅行に出るやうになつた。それは、彼の身分に合つた享樂でもあつたし、彼を買被つてゐる人達の眼から逃れる、一つの手段でもあつた。彼はグローパービルやフオンダやアムステルダムに行つたし、グレー湖やクラム湖の方にも行つた。そこにはボートもあり、濱邊もあり、浴場もあつて、水泳着を借りる事も出来た。彼は、グリフィス家の人達と交際する時の事を考へて、出来るだけ社交的な嗜を覚えて置かうと思つたので、或る日偶然會つた男について、水泳や飛込みを習つた。彼は直ぐに上達した。しかし、彼が本當に好きになつたのは、小舟乗りであつた。彼はシャツ一枚になつて、赤や緑や青の小舟に乗つて、クラム湖の中を乗廻す繪の様な夏景色を、堪らなく嬉しく思つた。殊に、夏の雲が點々と青空に懸つて居るやうな日の、穏やかな涼しさが好きであつた。そんな時の彼は、自分が金持になつて、ラケット湖や、シユルン湖や、ジョージ・チャンプレン湖に行つて、ダンスやゴルフやテニスや、小舟に與する日が来る事を、白日の夢の様に空想した。

だが、丁度それと同じ頃に、ロバータやグレースも、此のクラム湖に来て見て、此の地方で一等の場所だと言ふ事に決めた。土曜日曜の午後には、彼女達も何度か遊びに来て、對岸の方にまで遊びに

行つた事があつた。ボートや水泳の出来ない彼女達は、木陰に坐つて水の流れを眺めたり、藪陰の花や木の實を集めたりした。水際には、白百合も咲誇つてゐた。彼等が両手に持ちきれない程の花を、ニュートン夫人に持歸つてやつたのも、一度や二度ではなかつた。

七月の三番目の日曜日の午後、クライドは例に依つて、此の湖に出掛けて、その西岸を、ボートハウスから一哩半計りも遠く漕ぎ出て居た。上衣や帽子を脱ぎ棄てた彼は、半ばやけ氣味の氣持で、様々な夢想に耽つてゐた。其處には幾つものボートが浮んでゐて、それらに、少年や少女や、男や女が乗込んで居たが、彼等の笑聲や話聲は、遠く水の上を渡つて、彼のボートまで聞えて來てゐた。遠く離れては居たが、それがみんな戀人である様に思へて、今更に自分のわびしさが身に染みて思ひ浮べられた。

實際、かうして嬉しさうに娘達と遊び廻つて居る他の若者の姿は、今の彼の抑壓された生活を際立たせるに充分であつた。彼は、自分の生れが幸運に恵まれてさへ居れば、今頃はソンドラ・フィンチュレーのやうな令嬢と一緒に、シユルン湖やラケット湖を乗廻して、此處よりもつと美しい景色を眺めて居られるのと思つた。さうすれば、彼だつてソンドラを乗せて、快速力の自動車を走らせる事も出来るし、テニスをしたり夜のダンスをしたりする事も出来るのではないか。何處を見ても、戀と

ロマンスと満足が充ちて居る時、彼だけが淋しく不安に暮らして居る氣がした。一體自分はどうからしいのだ？ 何處に行つたらいいのだ？ こんな生活を、永久に續けて行く事は出来ない。それでは餘りに慘めだ。

彼の心は、あの怖ろしい事件の前の、カンサス市時代の幸福の日に歸つて行つた。ラツタラアやヘツグランドやホルテンスなどの間に、愉快な交際が始まらうとした瞬間に、あの怖ろしい出来事が起つたのだ。彼はまたデイルードやゼラヤリタとの、それ以上に幸福だつた交際を思ひ出した。グリフィスの家の人達は、もう彼を構ひつけないのだらうか？ 彼が此の町に來たのは、只あの従兄弟に輕蔑され、のけ者にされ、伯父たち一族に無視される爲めであつたのだらうか？ 而かも此の季節外れの夏にさへ、様々な面白い事が、彼等の仲間には行はれて居るらしいではないか。此の地方の新聞紙には、殆んど毎日の様に、彼等の動靜が書いてあるし、サミュエルやギルバートの贅澤な自動車は、彼等がライカーガスの居る様な日には、必らず工場の立關に横づけにされて居る。ライカーガス・ホテルの食堂の前には、時々、若い金持連中が群つて居るのを見掛けるし、ワイキアヂイ街の立派な家の前には、時々避暑地から歸つて來たらしい人々の様子が見える。

しかも工場では、ギルバートやサミュエルが歸つて居るらしい日には、必らず重役達を連れて、工

場を見廻つて居る。而かも彼は、ギルバートやサミュエルのまがひのない血縁であり乍ら、つまらない仕事にうつちやられて居るのだ。それは只、彼が役に立たないからと言ふだけの事だ。彼の父も、此の伯父の様に働き手ではないし、彼の母も、此の冷たい無頓着な伯母のやうに、世間を知つては居ない。こんな工場等を出て行つて了つた方が好いのではないだらうか？ 第一、此の町に來た事から、馬鹿けた事ではなかつたのだらうか？ 此の親類達は、彼をどうして呉れる積りなのだらう？ 孤獨と憤りと絶望との中に、クライドの心は、グリフィス家やソンドラの事から離れて、ロバアタの方に歸つて行つた。無論彼女は貧しい女工に過ぎないが、彼が毎日接するどの女にも増して、彼女は可愛らしいではないか。

彼は、會社に勤めて居る人間が、其處に働いてる女工、例へばロバアタの様な娘と交はつてはいけないと言ふ、あの禁令の如何に馬鹿けて滑稽であるかを考へてゐた。彼は、彼女と友達となる事さへ出来ないのだ。かうした湖水へ連れて來たり、彼女の家へ尋ねて行つたりする事も出来ないのだ。而かも、もつとまじな他の連中と交際しようにも、彼の給金では、どうする事も出来ないではないか？ のみならず、彼女は非常に可愛らしい。殊に彼に好意を見せて居る。彼は、彼女がすばしく働いて居る様子を、はつきり眼に浮べる事が出來た。彼女のすんなりした手や腕や、滑らかな皮膚や、輝か

しい眼や、彼に笑ひ掛ける微笑を思ひ出して居た。工場に居る時と同じ様な感動が、今、彼の上に働きかけて居た。彼女は不幸にして女工ではあるが、彼女と結婚する必要さへなければ、彼は充分幸福であり得ると考へた。しかし、彼の結婚の野心は、今はもうグリフィス家の屬する社會と、確り結びついて居た。だが、それにも拘らず、彼の欲望は、彼女に依つて色濃くかき立てられてゐた。今少し彼女と話をする機會があつたら！——何時か彼女を工場から送つて行く様な日が來たら！——土曜か日曜に此の湖水に連れて來て漕ぎ廻る日があつたら！——彼女と共に長閑に夢想する日が來たら！ 彼は、灌木に覆はれた或る岬を曲つて、睡蓮の花の浮んで居る淺瀬の方に出て行つた。すると、岸に立つてその花を眺めてゐる娘があつた。帽子をとつてゐる彼女は、日の方を向いて居るので、眼に手を當て、水の方を見下して居たが、ほんやりと見詰めてゐる様子で、微かに口を開いて居た。クライドも、素晴らしく綺麗な娘だと思つて、權を止めて彼女の方を見た。青い上衣の袖を肘の處までたくし上げて居る様子や、フランネルのスカートの様子で、彼女がすんなりとした身體を持つて居る事も解つた。ロバアタではないかしら。いや、そんな事はない。いや、さうだ、さうだ。何れとも殆んど解らない中に、彼は岸から二十尺計りの近くから、彼女を見上げてゐたが、彼の顔には殆んど信じ難い夢が實現された時のやうに、或る光が輝いてゐた。同時にロバアタも、嬉しい幻

が何處からともなく現はれて来たかの様に、暫く眼を見張つて彼を眺めて居たが、その唇に、幸福さうな微笑が浮ぶのを、どうする事も出来なかつた。

「おや、アルデンさん。あなたですね。さうではないかと思つたのですが、遠くからは見えなかつたものですから」

「まア、あなたですの」彼女は笑つたが、その顔には少し赤味が差して来た。此處で彼に會つた事は、彼女にとつて嬉しくはあつたが、同時に厄介な事が起りさうな氣がして、多少の壓迫を感じたからであつた。かうして會へば、二人に友情が湧くかも知れなかつたが、その場合、それに抵抗する事は、彼女には最早出来なさうに思へたからである。それに、此處には、友達のグレース・マアルも來て居る。彼女にクライドの事を知らせたものだらうか？ 彼女は迷つた。しかし、彼に笑ひ掛けて、嬉しさうな顔をする自分に、抵抗するわけには行かなかつた。彼女は今日まで、色々クライドの事を考へて、幸福な夢想を抱いて居たのだつたが、それが今突然、彼に會つたのだつた。しかも二人は、只偶然に會つたので、そこには何の企みもあつたわけではないのだ。

「散歩ですか？」彼は、彼女と面と向つて、少からすまごころして居たが、さう聲をかけた。同時に、彼女が水の上を見詰めてゐた事を思ひ出して言ひ添へた。「此の睡蓮が欲しかつたので、あんなに見詰

めて居たのでせう？」

「え、え」彼女は未だ笑ひ續け乍ら、ぢつと彼を見詰めて居た。風に吹かれて居る彼の黒い髪の毛や、首をまる出しにして居る水色のシャツや、腕までまくり上げた袖や、綺麗なボートから出て居る黄色い權の姿が、彼女には身震ひする程美しく見えたからである。こんな立派な若い人を、彼女だけのものにする事が出来れば、此の世の中は天國である様に思へた。その他の者は何も要らないと思つた。而かも今、彼女の足元に、此の晴れ渡つた七月の午後、美しい小舟の中に、その男が坐つて居るのだ。彼は笑ひ乍ら、惚れふくと彼女を眺めて居るではないか？ 雛菊を摘みに行つた彼女の友達は、何處か遠くの方に行つて居る筈だ。本當に、遠くに行つて呉れ、ばい、が！

「私、何とかして、睡蓮が採れないかと思つて見ましたのよ。此方に來てから、今日始めて見付けたんですもの」

「幾らでも採つて上げますよ。其處に待つていらつしやい、採つて來ますから」彼は快活さうにさう叫んだが、彼女が一緒に此のボートに乗つて呉れたら、どんなに愉快だらうと思つて、言ひ添へた。「しかし、どうです。此のボートに乗つて見ませんか。大丈夫、ボートは廣いんですし、何處へでも連れて行つて上げますよ。鳥渡其處まで行けば、もつと綺麗な睡蓮がありますし、此の向ふ側に行け

ば幾らでもあります。あの島の向ふ側には、随分澤山ありますよ」

見ると、別の一隻の小舟が、クライドや彼女と同年輩の男女を乗せて、その近所を漕ぎ廻つて居た。緑色の小舟の中の娘は、白い着物に眞紅な帽子を被つて居た。そして、今クライドが話して居る島の邊りにも、今一隻の小舟があつて、その中には若い男女の一组が乗つて居た。無論彼女も、その小舟に乗つて見たかつた。出来るなら、自分一人で乗つて見たかつた。出来なければ、友達と一緒にでも仕方がないと思つた。しかし、自分獨りで乗りたい彼女は、何だつて自分獨りで此の湖水に來なかつたのだらうとも思つた。グレース・マアルが一緒だとすると、今後、二人の事を聞いた時に、彼女が何と思ふだらう、何を言ひ出したらうと考へられたからである。しかし、此處でクライドと一緒に乗らないとすると、或ひはもう自分に興味を持つて呉れないかも知れない——自分を嫌ひになるかも知れない——さう思ふと、彼女は怖ろしい氣もした。

彼女が黙つて立つて居るのを見ると、クライドは心配になつて突然叫んだ。「さア、お乗んなさい。嫌なんですか。是非乗つて下さい。採れるだけ睡蓮を探したら、何處へでも上げてあげますから。十分でよござんす」

彼女は、彼が「是非乗つて下さい」と言つたのを覚えて居た。それは、彼女を慰め、力づけた。そ

の様子では、彼女を利用するだけのつもりでもなさうに思へた。

「でも私、お友達と一緒に來てますから」彼女は殆んど悲しい氣持で叫んだ。彼女は未だ、自分一人で乗りたかつたのだ。實際、此の時の彼女程、グレース・マアルを邪魔に思つた事はなかつた。何だつてあの人なんぞを連れて來たのだらう？ あんな醜い女はクライドが嫌がるに違ひない。さうすれば、今日の喜びも滅茶々々になつてしまふ。

「それに」と彼女は、色々の思ひが心の中で闘ふのを感じ乍ら言ひ添へた。「矢張り、乗らない方がよくは御座いませんか？ そのボート大丈夫ですか？」

「は、は、大丈夫です」と、クライドは彼女が同意しなうなを見て笑つた。

やがて彼は、小舟を一尺ばかりの高さの土手に付けて、片足でそれを支へるやうにした。

「無論、危険なんぞは何もないですよ。よかつたら、あなたの友達を御呼びになつてもよござんすよ。ボートは未だ大丈夫ですから。睡蓮などは、向ふに行けばいくらだつてありますよ」彼はさう言つて、湖の東の方へ眼をやつた。

ロバアタも、もう抵抗する事が出来なくて、垂れ下つて居る枝に掴まつて身體を支へたが、同時に、「グレースさん、グレースさん。何處に居るのよ」と叫び始めた。彼女も、一緒に乗せた方がいゝと思つ

たからだつた。遠くの方から直ぐに返事が来た。「はい、何の御用？」「此方にいらつしやいよ。鳥渡、話したい事があるんだから」

「駄目よ。あんたこそいらつしやいよ。大變な雜菊だわよ」

「駄目よ。あなたが来なくちや。ボートに乗せてやらうと言ふ方があるんだから」彼女は、大きい聲で言はうと思つたが、どうしたものか、大きな聲で言へなかつたので、彼女の友達は黙つて花をつみ續けた。ロバアタは顔を顰めた。どうしていゝか解らなかつたが、突然、決心をして言ひ添へた。

「では、よござんすわ。ボートに乗つて、友達の居る處まで行きませう」

「あゝ、それはいい。ではお乗んなさい。此の邊で少し待つてゐて、若しその人が来なかつたら、その人の所へ漕いで行きませう。では、真中にお乗んなさい。その方が揺れないから」

下から見上げて居るクライドの眼を、ロバアタも神經質に、だが嬉しさうに見詰めて居た。突然の嬉しさに、彼女は薔薇色の霧にでも包まれてゐる様な氣がしたのだ。

「本當に大丈夫ですか？」彼女は片足を掛けて言つた。

「大丈夫、大丈夫。僕がちやんと持つてますから。その枝を掴んでいらつしやれば、あなたの身體も大丈夫ですよ」彼女が乗込むと、小舟は少し傾いた。彼女は、小さい叫び聲を擧げて、蒲團の敷いて

ある座席に腰を下した。さうした彼女が、クライドには赤坊の様な氣がした。

「それで大丈夫、真中に坐つていらつしやい。舟が傾きますからね。でも、愉快ちやありませんか。全で思ひがけないことですからね。でも、あの岬の所を曲る時、僕はあなたの事を考へてゐたのですよ。何時か、あなたを連れて、かうした處へ来たいと思つてゐたのですからね。しかも、来て見ると、偶然、あなたがいらしたのですから驚いたですよ」さう言つて、彼は手を振つて見せた。

「まア、さうですよ」此の告白を聞いて、ロバアタは嬉しい中にも多少吃驚した。そして彼に對する自分の氣持をも考へ出した。

「實際、僕は一日ぢう、あなたの事を考へて居たのですからね。本當ですよ。今朝もあなたを連れて何處かへ行きたいなアと、自分一人で思つて居たのですから」

「まア、グリフィスさん。そんな事をおつしやるものでは御座いませんわ」ロバアタは、此の突然な接觸が、餘りに早く二人を近づける事を怖れて、さう言つた。彼女は、彼をも彼女自身をも怖れたのだ。彼女は多少冷淡に、不興氣な顔をして見せ様と思つたが、それは果ない努力に過ぎなかつた。

「いや、しかし、それが事實なんだから仕方がないんです」とクライドも言つた。

「えゝ、それは私だつて、随分綺麗だと思ひますわ。私もあのお友達と一緒に、もう何度も此處に来

たのですもの」

「ほう、さうですか」彼はさう言つてから、自分も此處に来るのが好きな事や、此處で水泳を習つた事などを話した。「しかも来て見ると、あなたが土手の上に立つて、睡蓮を眺めてるんですもの。不思議ぢやありませんか。僕は、今少しで舟からおつこちる所でしたよ。あそこに立つていらした時程、美しいあなたを見た事がない気がしたんですもの」

「まあ、グリフィスさん」とロバアタは再び咎める様に言つた。「そんな事はおつしやらない方がよござんすわ。擲擲つていらつしやるのだとしか思へないぢやありませんか。お眼にかゝると直ぐそんな事をおつしやるんですもの。誰だつてさう思ひますわ」

クライドがもう一度うつとりと彼女を見詰めると、彼女も亦何時になくクライドが美しいと思つて、笑ひ返した。しかし、クライドがああ岬から出て来る直ぐ前まで、彼女も彼の事を考へて、二人だけで一緒に居られたらと思つて居たことを、若し彼に話したら、彼は何と思ふだらう？ 彼女は、彼と二人で坐つて、手を取り合つて話して居る事を想像して居たのだ。恐らく彼は、彼女の腰に手を廻すであらうし、彼女は黙つて、彼の自由にさせて置くであらう。そんな處を誰かに見られる怖ろしさも、彼女は知つてゐた。無論、そんな事はしてならない事だ。餘りに馴れ馴れしく、餘りに大膽な

事だ。だが、彼女がそれを空想したのは事實であつた。しかし、今かうして二人で小舟に乗り歩いてる處を、ライカーガスの人が見たらば、彼等は何と考へるだらう。彼は工場の監督であり、彼女はその下の雇人だ。その結論は只、不品行と言ふ事以外にはない。しかもグレース・マアルが来て居るのだ。直ぐに此處に現はれるだらう。無論、彼女は、自分達の事を説明する事が出来る。彼は只、漕ぎ廻つてゐる彼女を見付けたのだ。彼が睡蓮を探つてやらうと言ふのに、どうしてそれを断り得るだらう？ かうなるのは當然の事だ。それを避ける譯には行かない。

小舟は既に睡蓮の中に入つて居た。約束通り、クライドは權を棄て、睡蓮を探つて呉れた。他のボートの娘達に見習つて、彼女も水の中に片手をつけてゐたが、そのそばで、長い根を引いた睡蓮が幾つも引上げられた。クライドの垂れ下つた髪の毛や、水に伸した腕の美しさを見て居る中に、彼女の氣持も段々に静まつて來た。何と言ふ美しい此の人だらう！

十六

その午後の出來事は、その後數日間、二人とも、互ひに忘れる事が出来なかつた。二人とも、監督と女工として以上に、お互ひを知り合ふ事の不聰明を充分承知して居り乍ら、これ程ロマンチックに

二人を結びつけるものがあらうとは、考へる事も出来なかつた。
暫く、ボートの中で、睡蓮の美しさや、それを採る喜び等を話した末に、彼等はグレースも乗せて、やがてボートハウスに歸つて行つた。

しかし、陸に上ると、また多少の問題が起つて來た。これから一緒にライカーガ스에歸つたものか
どうかに就いて、迷つたからである。ロバアタにすれば、それは屹度悪い噂の種になるに違ひないと
思つたし、クライドにしても、ギルバートや他の連中に知られた時の事が考へられた。その爲めに厄
介な事が起るかも知れない。それを聞いたら、ギルバートは何と言ふだらう？ しかもグレースも、
クライドが自分に興味を持つてゐない事を知つてゐたので、自分自身の噂の事も考へて、不機嫌にな
つてゐた。その様子を察したロバアタは、「どうしたらいいのよ。斷つて歸る？」と言つて見た。
無論、ロバアタは、自分一人であるならば、彼と一緒に自動車で歸りたいと思つてゐたが、グレー
スの此の様子を見ては、さうする氣にはなれなかつた。何とかクライドを怒らせない様な口實を見つ
けて、別々に歸らうと思つた。

一方、クライドも、その事をギルバートに知られる危険を冒しても、一緒に歸る可きかどうか迷
つてゐた。しかし、わざ／＼さうした噂をギルバートに傳へるものもなさ／＼なので、彼等を連れて

自動車の方に行かうとすると、ニュートン家に下宿して居る若い電気技師のシヤアロックが、公園の
露臺から彼等に聲を掛けるのに會つた。彼は、小さい自動車を一臺持つてゐる友達と一緒に來て居る
のだつたが、これから町に歸らうとする處だつた。

「やア、これは旨く會つたもんですね。アルデンさん。やア、マアルさんもお揃ひですね。あなた方
もこれからお歸りになるんでせう。お歸りになるんだつたら、連れて行つて上げますよ」

その聲はクライドにも聞えた。その晩、彼女達は、ニュートン家の連中と一緒に教會へ行く事にな
つて居たので、少し時間も遅いから彼等の自動車に載せて貰つた方が便利だと、ロバアタは言つた。
しかし、彼女は、シヤアロックがクライドにも獎めて、皆で一緒に歸れる事を半ば望んでも居たのだ
つた。シヤアロックもクライドにさう言つたが、クライドは直ぐに斷つて了つた。もう少し残つて、
歩いて見たいと言ふのだつた。間もなく、ロバアタは彼と別れたが、その顔には感謝と喜びとが表は
れてゐた。それ程彼等は楽しい午後を過したのであつた。一人になると、クライドは、悲しい思ひで、
ロバアタと二人きりで、もう少し遊んでゐられない事をくよく／＼と考へてゐたが、間もなく一人でラ
イカーガ스에歸つて行つた。

翌朝のクライドは、何時にも増してロバアタに會ひたかつた。衆目に曝されて居る此の工場では、

彼女に自分の氣持を知らせる事は不可能であつたが、彼の顔に浮んで居る素早い微笑や、その眼の光で、彼女はクライドが、前夜同様に熱情を持つて居て呉れる事を知つた。一方彼女も、或る種の危期が来て居る事も感じたし、人眼を忍ぶ事に多少の慣りも感じて居たが、しかもクライドに、優しい流し眼を送らないわけに行かなかつた。彼が自分の様な者に興味を持つて居て呉れることは、彼女に取つて、一種の驚異であつた。

クライドは直ぐに、彼女が未だ自分の好意を喜んで居る事を見てとつて、適當な機會があつたら、彼女に或る事を話したいと思つてゐた。そこで一時間計り待つてから、彼女の兩側の女工が立て行つたのを見ると、彼はゆつくり彼女の方に寄つて行つて、彼女が捺印したばかりのカラーを取上げた。そして、それに就いて何か話して居る様に見せかけながら、「昨夜、あんなにして別れなきやならなかつたので、僕は随分悲しいんですがね。今晚、もう一度あそこで、二人きりで會ひたいのですが。會つて呉れませんか」と言つた。

ロバアタは、これが彼を斷念させるかさせないかの決め時である事を意識した。しかし、同時に、どんな問題をも無視して、彼の申出でを受けたい氣持も強く動いてゐた。彼の眼、彼の髪、彼の手。彼女は彼を非難する代りに、弱々しい懈ける様な眼で、彼の顔を見た。それは服従と不安以外の何物

をも示して居なかつた。クライドは、彼女も自分と同様に、不可抗的に自分に惹きつけられてゐるのだと思つた。その時若し、誰か來なかつたならば、クライドはもう少し話して、今晚の打合せをする所であつたが、それは出来なかつた。彼女の方は、他人から見られる事を、彼以上に心配して居なかつたが、彼は、その日は何時にも増して、自分が危険な道を歩いてゐる事を感じてゐたのだつた。

その日の彼は、計算にも間違ひ勝ちであつた。机に就いて仕事をして居ても、彼の心は少しもそれに集中されなかつた。彼の心は、絶えずロバアタの方に惹かれて居た。彼は、ロバアタさへ愛して呉れ、ば、最も幸福な人間になれると思つた。昨日、あの湖で、現在の位置の不滿を嘆じた彼ではあつたが、ロバアタと一緒に働ける事を考へると、今はもう、何時までも働いて居たい會社の様に思へた。これ迄だつて、彼は、グリフィス家のもつと酷い無頓着に、堪へ忍んで來たのではないか。彼の方で、彼等の機嫌を害さへしなければ、やがて彼等が、彼の社交的才分を認める日が来るかも知れない。だが、彼が現にやらうとして居る事は、彼に嚴禁されて居る事ではないか。何と言ふ禁令を、あのギルバートは出した事だらう！ しかし、彼女に了解させさへすれば、二人は曝露される危険を避けて、こつそり會へるに違ひないと思つた。その日、机に居ても歩いて居ても、絶えずクライド

の頭に登つて来るのはそれだつた。今や彼の頭には、彼女の事の他に何もなかつた。彼は、マホーク川の畔りの或る小さい公園で、彼女に會ふ事にしようと思つて居たが、その日は他の女工達が絶えず彼女の側に居るので、それを話す機会がなかつた。實際、彼は、晝食を食べに下りて行つた時にも、その積りで早く歸つて來たのだつたが、彼女は他の女工等に取巻かれてゐたし、その後にも、口を利く機會は全くなかつた。その日の夕方、工場から歸る時にも、彼は往來の何處かで彼女に話す機會がないものかと思つた。彼女がどう言はうとも、結局彼女は、彼と會ひたがつてゐるのだと言ふ事を、クライドは知つてゐたからだつた。彼は、彼女に責任を負はさない様に、偶然遭つた様に仕組めばいいのだと思つた。しかし汽笛が鳴つて、工場から出て行く時にも、彼女は他に連れがあつたので、彼は別の日に譲らなければならぬ事を知つた。

夜になると、クライドは、テラー街の方にぶら／＼と出掛けた。此の頃の彼は、夜には大抵、活動館に行くか、何處かの往來を散歩して、その不安と孤獨とを和ける事になつてゐたが、その夜はロバアタの家を探す積りだつたのだ。それは、カッピの家にも劣る様な見すほらしい古家で、その近所もごた／＼としてゐたが、その部屋から輝いて居る光には、何處かなつかしさうな和やかな様子があつた。家の前にある二三本の立木も、氣持のいい物であつた。ロバアタは今何をしてゐるのだらう？

何だつて、工場で彼を待つて居て呉れなかつたのだらう？ 何だつて、彼が今此處に居る事を感じて、出て來ないのだらう？ 彼は、何とかして彼が此處に居る事を知らせ、彼女を呼び出したいと思つたが、その方法はなかつた。たゞ、シヤアロツクがその家から出て來て、大通りの方に消えて行くのが見えた。その邊りには、澤山の人が大通りの方に歩いて居たので、彼も怪しまれない爲めに、ぶらぶらと其の邊を歩いて居なければならなかつた。それは美しい夜で、九時半頃の満月が、煙突の上に黄色ツほく掛つてゐた。歩き乍ら彼は、淋しさに幾度となく溜息をした。

やがて十時になり、月の光が、いよ／＼明るくなつても、ロバアタが出て來る様子もないので、彼は家に歸らうと思つた。此の邊りをうろ／＼してゐても何の役にも立たない。しかし、こんないゝ夜に、自分の部屋に歸つて行く氣もしない彼は、氣を變へてワイキアヂイ通りの方へ歩いて行つたが、その邊りの人達は、皆な避暑地に行つてゐて、どの家も眞暗であつた。彼はソンドラやベルチンの事を思ひ出して、彼等はこんな夜、何をしてゐるのだらうと思つた。何處で踊つてゐるのだらう？ 何處で車を走らせて居るのだらう？ 何處で戀事をして居るのだらう？ 彼は、貧乏に生れて、金もなく地位もない自分が、自分の思ひを通さうとする事は、何と困難な事であらうと思ひながら歩いてゐた。翌朝になると、彼はもう一度ロバアタに自分の氣持を傳へたいと思つて、六時四十五分にはもうビ

トンの家を出掛けた。工場に通ふ無数の職工の流れの中に、彼女を見付け様と思つたのだが、それは無駄だつた。彼は郵便局の側の小さい食堂で、一杯の珈琲を飲んでから、中央通りを工場の方へ歩いて行つたが、或る煙草屋の前に立止つて振り返ると、ロバアタがまた、例のグレース・マールと一緒に歩いて来るのが見えたからだつた。彼は何と言ふ下らない世の中だらうと思つた。こんなやくざな町では、會ひたい人に一人きりで會ふ事さへ出来ないのだ。町ぢうの人が、お互ひに知り合つて居るではないか。しかし、ロバアタは、彼が話したがつて居る事を知つて居る筈だ。何だつて、自分一人が出て来ないのだ？ 彼女の顔を見るだけなら、昨日だけで澤山だ。而かも今、また、グレース・マールと一緒に歩きながら、満足し切つた顔をして居るではないか。一體、彼女は、何を考へて居るのだ？

やがてクライドは、苦い顔をして工場に這入つて行つた。しかし、彼女の席について居るロバアタが、彼を見て立上つて、嬉しさうな笑ひを浮べて、「お早う御座います」と言つた姿を見ると、彼の氣持は幾らか納つて来た。彼女は未だ自分のものだと言ふ氣がした。

やがて、その日も午後の三時になつた。工場の中は、日中の暑さと、間斷ない労働の疲れと、川から反射して来るぎらくした光との爲めに、倦んだやうになつて居た。タ、タ、ター——カラーに打つ

ける金屬性の捺印の音も、工場に漲ぎるミシンの音に掻消されて、平常よりも音が低い様に思へる。誰が唄ひ出したのか、此の頃流行り出した『スウィート・ハート』の唄を、女工達は聲を合はせて歌つて居る。クライドの眼や、彼の氣持を、絶えず意識して居るロバアタは、何時になつたらクライドが、自分に何か話し掛けるだらうかと考へて居た。彼女はそれを望んで居たし、昨日のあの様子では、やがてもう堪へられなくなつて、何か言つて来るに違ひないと思へたからであつた。昨日の夕方のクライドの眼付きでも、それは解つて居た。しかし、こんなに色々邪魔があるのだから、クライドも色々考へて居るのだらうと思つて居た。しかしまた、時には、他に女工達が居る爲めに安全である事を、嬉しく思ふやうな事もあつた。

こんな事を考へ乍ら、仕事をして居るロバアタは、突然、十六時の積りで印を押して了つたカラーの一包みが、それよりも小さいカラーである事を發見した。彼女は吃驚して、監督の廻つて来るのを待たうかと思つたが、それよりもクライドの所へ直接に持つて行つた方がいゝと思つた。さうすれば、他の監督に見られないで済むし、他の女工達も皆さうして居るのであつたから。既に熟練した女工達にも、かうした間違ひは度々起るのであつた。

しかし今、切ない欲望に面接して居る彼女は、直接にクライドの前に行くことは、彼に求めて居る

機會を與へる事になることを考へて、彼の前に行く事を躊躇してゐた。だが、もつと怖ろしい事は、それが彼女の求めて居る機會を、彼女に與へる事であつた。彼女は、監督としてのクライドに忠實であらうか、それとも、現在の欲望に正反對な古い因襲に忠實であらうか——その中間に立つて、しばらく悩んでゐるが、やがて意を決して、その包みをクライドの机に置いた。その時、彼女の手は震へてゐたし、顔は青さめ、咽は塞がつてゐた。丁度その時、クライドは臺帳を抱へて、女工達の仕上げの計算をしてゐるが、仕事に身の浸まない彼は、間違つてばかりゐた。ふと見上げると、ロバアタが彼の方に身を屈めてゐた。忽ち彼の咽や唇が乾いて來た。機會が今、來てゐるのだ。而かもロバアタはと見ると、彼女もその勇敢さと自己僞瞞との爲めに緊張して、殆んど息もつけなげな様子である。「もちがひが御座いました」(これは間違ひの意味だ)「階上から來た包みですが、殆んど全部捺印した後で氣がついたものですから。十五半のカラーに十六を押したので御座います。どうも濟みませんでした」

彼女は靜かに微笑を浮べようと努めては居るが、その頬は青さめ、その手は、殊にその包みを差出してゐる方の手が、震へて居るのをクライドは氣付いた。忽ち彼は、彼女を此處に來させたのは、自分の間違ひを告げる爲めではあるが、しかしそれ以上の物が別にある事を感じた。かうしておどくと

彼の前に立つて居るのは、同時に彼に機會を與へて、それを利用させようとしてゐるのだ。その瞬間彼は餘りの突然さに、多少面喰つた形だつたが、同時に、これまで感じなかつた厚かましさを、勇敢さが湧いて來るのを感じた。彼女は今、彼を求めて居るのだ。だから、利巧にもかうして、話し掛ける機會を彼に與へようとして居るのだ。偉い！ 何と言ふ優しい勇敢さだらう！

「いや、構はないですよ」彼は平氣をよそほつて言つた。「洗濯室に送つて、もう一度押し變へる事が出来るかどうか、見て見ませう。實際には、此方の間違ひではないのですからね」

彼が温かい微笑を送ると、彼女も抑へつけた様な微笑を返した。そして、餘り露骨に此處へ來た氣持を解らせてはいけないと思つて、向ふへ去らうとした。

「しかし、鳥渡待つて下さい」と彼は素早く呼止めた。「鳥渡話したい事があるんですから。實は、日曜日以來、あなたに話したいと思つてたんですが、何處かで僕と會つて呉れませんか。此の工場の監督は、女工と交渉を持つてはいけない——無論、工場外での事です——と言ふ規則があるんですが、

しかし僕はあなたに會ひたいんです。ね、會つて呉れますか？ 僕は、あなたが此の工場に來て以來、殆んど氣狂ひの様にあなたを好きになつてたんですが、此の間の日曜日以來、どうもいけないんです。此の工場の古い規則なんか、止むを得なければ、もうどうでもいと思つてゐるんです。會つて呉れる

でせう？」

「でも、お會ひ出来るかどうか、私には解らないんですもの」自分の思ひ通りになつたロバアタは、自分の勇敢さに戦き乍ら答へた。彼女は、神經的に周囲を見廻したが、あらゆる眼が彼女に向けられて居る様に思へた。「私、今、ニュートンと言ふ人の御夫婦の家に居るんですけれど、皆な厳格な人なんでしょう、とても——」家に居る時のやうには行きませんわと言はうとしたのだつたが、クライドは遮つた。

「いや、まア、さう言はないで下さい。お願いです。僕はあなたに會ひたいんですから。決して、あなたに迷惑を掛けるやうな事はしませんから。若しよかつたら、あなたの家の近所でお會ひしても好いのです。さうすれば、都合がいゝんでせう？」

「いゝえ、それは駄目ですわ。兎に角、今は駄目ですわ」すつかり混亂した彼女は、無意識の中に、將來の黙諾を與へて、答へた。

「さう」クライドは、彼女が既に承諾しつゝある事を感じて微笑した。「何なら、二人で此の近くの町端を散歩してもよござんす。あなたの家の通り、あそこには、家の建つてない處がありますね。それともマホーク川の處に小さい公園がありますね。あのドリームランドの西側、あそこまで出て来て

呉れませんか。あそこの自動車の停る處で御會ひしてもいゝです。さうして呉れませんか」

「でも、そんな事をして——そんなに遠くまで行つて、よござんすかしら。私、未だそんな事をした事がないのですもの」彼女の言葉の様子が餘りに無邪氣で卒直なので、クライドは益々可愛いと思つた。「私、一人きりで何處かへ行くのが、本當に怖いんですもの。随分、うるさい町だつて言ひますし、屹度誰かに見つかりさうな氣がするんですもの。でも——」

「でも……どうしたんです」

「でも、私、餘り長く此處に居過ぎはしませんこと」さう言つた時、彼女は本當に喘いでゐた。周圍には何の變つた事もなかつたが、クライドも餘りにおぼつびらである事に氣づいて、早口に強制する様に言つた。

「さう、では、あなたの家の通りを出端れた處はどうです。今晚、鳥渡の間でいゝから出て来て下さいませんか。三十分かそこいら」

「まア、でも、今夜なんて、餘り急で駄目で御座いますわ。よく見なくちやなりませんし、つまり、準備をなくちやなりませんもの。だから、また別の日に」此の大冒険にすつかり昂奮し、困惑した彼女の顔は、無意識の中に微笑から泣顔に變つてゐた。

「さう、では水曜日の晩、八時半か九時はどうです。それでも駄目ですか。え？ え？」
ロバアタは考へ込んで来たが、その様子がクライドには、堪らなくよかつた。彼女は、餘りに長く此處に居るので、皆から見て居られる様な気がして、變におどくんと神經的になつて居るのだつた。

「私、もう自分の席に歸つた方がいゝと思ひますから」彼女は彼に答へないでさう言つた。

「鳥渡待つて下さい。未だ水曜日の時間が決まらないぢやありませんか。會つて呉れるんですか。」

九時でも八時半でもよござんす。兎に角、僕は八時に行つて待つてますから。よござんすか」

「え、では八時半。いゝえ、八時半から九時まで、出来たら参りますわ。それでよござんす？ 出来たら参りますけれど、若し何か差支へがあつたら、翌日申上げますわ」すつかり赤くなつた彼女はまご／＼と周圍を見廻してから、急いでベンチに歸つて行つた。その時、彼女は、怖ろしい罪惡の現行犯を捕まつたかの様に感じて、頭から足の先まで汗ばんでゐた。クライド自身も、彼の机の前で、昂奮の爲めに、殆んど息詰りさうになつてゐた。とう／＼彼女が承諾したのだ。しかも彼は、誰にも顔を知られて居る此のライカーガスの町で、彼女に會ふ事にしたのだ。何と言ふ冒險だらう。

しかし、彼女は彼女で、此の月明の夜、彼と一緒に歩く時の事を考へ、その腕に抱かれて、やさしい囁きを聞く時の事を考へてゐた。

十七

水曜の夜、ロバアタが家を出た時は、既に邊りは暗くなつてゐた。しかし、その前の彼女には、何と言ふ苦しさ悩ましさ、その心に迫つてゐた事だらう！ 彼女の内心の疑惑に打勝つ事の困難もあつたが、それに加へて、此のニュートン家を圍繞する凡俗な遍狭な宗教的な空氣があつた。此の町に來て以來、グレース・マールと一緒に居る場合には、殆んど外に出た事がなかつた。しかも、今夜は、クライドに話す事を忘れてゐたが、ニュートン夫婦やグレースと一緒に、ギデオンの浸禮教會に行く事になつて居たのだ。祈禱會が濟んだ後で、様々の遊戯だの、茶菓だの、アイスクリーム等に興ずる親睦會がある筈であつたのだ。

しかし彼女が、それをどう處置して、かに苦しんでゐる時に、偶然、工場のリゲット氏が、或る事を言つて呉れた。彼女の仕事が手早い事を認めた彼は、彼女に若し縫工部に行く希望があるならば、ブラレー夫人にさう言つて、仕事を教へて貰ふがいゝと言つて呉れたのだつた。クライドに會ふ日と、教會に行く日とがぶつかつて居るのを見た時、彼女はその事を思ひ出して、その晩はブラレー

夫人を訪ねなければならぬと、グレースに言ふ事に決心した。だが、それを言ふのは、水曜日の晩飯の前まで待つて居ようと思つた。さうすれば、クライドに會へる。そしてニュートン夫婦やグレースが歸つて来るまでには、彼女も歸つて来られるだらう。彼と會つて話す時には、どんな氣持がするだらう。またあのボートの時のやうに、彼女の美しさを褒めて呉れるだらうか？ 様々な果ない怖ろしい多彩な思ひが、彼女の胸に迫つて来た。今後、二人の交情が二人のどちらをも傷つけないで済めば、彼等は何處に行き、何をすればらうか？ 彼女は若し必要があれば、今の工場を止して、他の工場に移つてもいいと思つた。さうすれば、クライドに責任を負はせなくて済むから。

だが、その晩のことで、今一つ彼女の心配になつたのは、彼女の着物の事だつた。此の町に来て以来、彼女は此の町の氣の利いた娘達が、ビルツの町の娘達よりもいゝ着物を着てゐる事を知つてゐたが、母の處へ相當な金を送らねばならない彼女は、碌な身装もして居ないのだつた。而かも今、クライドに惹かれて来た彼女の心は、彼女の身装について、色々と惱まされるやうになつた。そこで、彼と工場で話した晩、彼女は自分の小さい衣袋篋を探して、昨年の夏ビルツで買った、青いソフト帽や、青と白との縞縞のスカートや、白いカンバス靴等を取揃へて置いた。ニュートンやグレースが教會へ出掛けた後で、急いで着換へる積りだつた。

八時半になつて、すつかり日が暮れて了ふと、彼女はテラー街を中央通りの方に歩いて行つたが、やがて西の方に迂廻して、逢引の場所に行つた。行つて見ると、クライドは既に五エーカー程の玉蜀黍畑を圍んだ木柵に倚りかゝつて、燈火に輝いてゐる此の小さな面白い町を眺めてゐた。様々な草や花の香りが邊りに立籠めてゐて、涼風が玉蜀黍畑の上や頭上の木の葉に吹渡つて居た。空には無数の星がきらめいて、大熊星、小熊星、天の河——遠い昔に彼の母が指さして呉れた天體がそこにあつた。彼は、カンサス市に居た時と今と、何と言ふ違ひ方だらうと思つてゐた。その頃の彼は、ホルテン・ス・ブリッダスにも、どの女にも、全でうぶで、口を利くのも怖い程であつたのだ。しかも、此の町へ来て、殊に此の捺印室の掛りになつて以来、彼は自分が曾つて思つてゐた程、醜い男ではない事を感じ始めたのであつた。彼は、娘達が彼に興味を持つて居る事を見て、彼女等をそんなに怖ろしく思はない事になつて来た。此の頃のロバアタの眼が既に、彼に惹きつけられて居る事を示して居るではないか？ 彼女は既に彼のものなのだ。彼女が来たら、彼女を抱いて接吻してやらう。しかも彼女には抵抗も出ないだらう。

彼は風にそよぐ玉蜀黍の音を聞き乍ら、夢の様古い事を思ひ起してゐたが、その時、突然、彼女が近づいて来るのを見た。快活で元氣ではあるが、神經質な彼女は、道の端まで来ると、注意深く邊

りを見廻したが、それを見ると、クライドはすぐに近づいて行つて、優しい聲で言つた。「やア、よく来て呉れましたね。何か厄介な事が起つた？」ホルテンス・ブリッグスや、リタ・ディツケルマンよりも嬉しうにして居る彼女を見た。彼女は、ホルテンスの様に打算的でもなかつたし、リタの様に官能的に自由で無分別でもなかつた。

「厄介な事？ え、なくは御座いませんでしたわ」彼女は直ぐ、教會に行く約束を忘れて居た事や、グレース・マアルが自分一人では教會に行かないと言ひ出した事や、嫌な嘘をついて、ブラレー夫人の處へ行く様に言つた事等を、手に取るやうに話して聞かせた。リゲットとロバアタとの間の話は、クライドも始めて聞く話だったので、烈しい好奇心を起した。彼は直ぐに、リゲットが彼女を自分の部屋から移さうとして居るのではないかと思つたからである。彼は彼女の話を録に進めさせないで、その事に就いての質問ばかりを發するので、ロバアタも非常に嬉しく思つてそれを話した。

「でも私、そんなに長くは出て居られませんかよ」その話しが一段落つくと、彼女はやさしくかう言つたが、その時クライドは、彼女の腕を把つて、川の方に歩いて行つた。「浸禮教會の親睦會は十時半か十一時には濟む筈ですから、それまでには、私歸らなくちやなりませんの」

彼女は色々な理由を擧げて、十時過ぎまで外に居る事の不得策を説明した。それはクライドには悲

しかつたが、もつともな事だと思へた。彼は出来るだけ長く彼女を引留めたかつたが、さうしても居られないのを見ると、焦るやうな氣持で、彼女との接觸を深めようとした。彼は、彼女の帽子や肩外套が、どんなによく似合ふかを言つて、讃辭を浴せた。やがて彼は彼女の腰に手を廻さうとしたが、彼女は餘りに早過ぎると思つて、その手を解かさうとした。

「未だ、未だ——その方がよくは御座いません？ その代り、私の腕を把つて頂戴」彼女は、優しい蕩かす様な聲でさう言つたが、その手を解いて腕を組合はせると、彼女は確かりと抱きしめる様にした。その瞬間、クライドは、何と言ふ自然な、嘘のない態度だらうと思つて、二人の間の氷が碎けたやうな氣がした。

だが、彼女は何とよく喋り續ける事だらう？ 彼女は、ライカーガスが好きな事だの、こんなに宗教に熱心な町はこれ迄見た事がない等と話した。やがて、ビルツやトリツベットミルの事や、彼女の家庭の事等話を話したが、それについては餘り詳しくは言はなかつた。クライドに聞かしたくない事だつたからである。彼女はまた、ニュートンやグレース・マアルが、彼女の一舉一動に眼を付けてる事も話した。聞き乍らクライドは、彼女が、ホルテンス・ブリッグスや、リタや、その他の娘達とどんなに違つてゐるかを考へてゐた。リタの様に、女らしくもないし、ホルテンスの様に派手で發作的で

氣取り屋でもないが、しかし單純で正直で、而かも美しく優しい。もつと氣のきいた着物を着せて見たら、どんなに優しく見えるだらうと、思はないで居られなかつた。以前のホルテンスに對する彼の態度と、今の彼女に對する彼の態度とを比べ合はせて、それを彼女に話したら、彼女は何と思ふだらうとも思つて見た。

「ねエ」と彼は最初の機會を捕へて言つた。「僕は、あなたがあの工場に来て以來、一度でもいいから會つて話したいと思つてたんですが、皆なが見てゐたので出来なかつたのです。それに、僕があの工場に来た時、あの工場で働いて居る娘に興味を持つたりしてはいけなと言はれてゐたので、成可くさうした事にならない様に努めてゐたのですが、今度はもう我慢が出来なくなつたのです」さう言つて彼は、じつと腕をしめたが、突然それをほめて両手で彼女の腕をとつた。「ねエ、ロバアタ。僕はあなたに氣狂ひの様になつてゐるんです。本當ですよ。あなたは程可愛い、いゝ人は居ないと思つてゐるんです。ねエ、僕の言つてゐる事が解つてますか。あなたがあの工場に来て以來、僕は殆んど寝る事も出来なかつたんです。嘘ではない、本當ですよ。僕はあなたの事を考へ續けたんです。だつて、こんな綺麗な髪や眼をしてゐるんですもの。今夜は特別綺麗ですよ。ねエ、ロバアタ」突然、彼は、両手で彼女の顔を挟んで接吻したが、彼女には逃げる暇もなかつた。彼女は直ぐ、その手を解かせ様とした

が、それも殆んど不可能であつた。事實、彼女自身も、彼に抱きついて、締めつけて貰ひたい氣がしてたが、同時に、その氣持の爲めに惱ましくもなつてゐた。それは怖ろしい事であつた。他の人が見たら何と考へ、何と言ふだらう。自分は本當に悪い娘だ。——だが、矢張り、此の儘で居たかつた。此の儘で、彼に身を寄せたまゝで居たかつた。

「まア、いけませんわ、グリフイスさん。いけませんわ、御止しになつて下さい。誰か見てゐるかも知れませんが、誰か近づいて來る氣がするんですもの。ねエ、どうぞ」彼女は脅えたやうに邊りを見廻したが、クライドは、狂喜して笑ひ出した。今や遂に人生は、その香はしい甘さを以つて、彼の前に現はれて來たのだ。「本當に私、こんな事は始めて、御座いますのよ」と彼女は續けた。「本當に私、始めてなんですもの。どうぞ、私は只あなたが——」

クライドは何も言はないで、只彼女の身體を支へてゐた。彼の青白い顔と、暗い渴いたやうな眼とが、直ぐ彼女の顔の側にあつた。彼女の抵抗にも拘はらず、彼は幾度となく接吻をした。彼女の小さい口や顎や頬が、餘りにも美しく、抵抗し難く見えたからだつた。だが、やがて、頼むやうな聲で囁いた。

「ねエ、ロバアタ。どうぞ、どうぞ、僕を愛すると言つて下さい。どうぞ。僕はあなたが愛して呉れ

てるのを知つてゐるんです。だから、どうぞ、今さう言つて下さい。僕は氣狂ひになる程、あなたを愛してゐるんです。僕達にはもう時間がないのだから」

彼はまた、彼女の頬や口に接吻したが、突然、彼女がぐたりとなつたのを感じた。今や彼女は、彼に抱かれた儘、抵抗もしないでじつとしてゐた。クライドは、或る妙な驚きを感じたが、それを説明するわけには行かなかつた。と、突然、彼の顔に涙が傳ふのを感じた。彼女の顔が、彼の肩に押付けられたかと思ふと、彼女の聲が聞え出した。「え、え、え、私、愛して下さるわ。え、え、愛して下さるわ。愛して下さるわ。」

その啜泣きの中に、半ば悲しみと半ば喜びとがあつた。その聲の中に、クライドはそれを感じた。その誠實さと單純さとに心を打たれた彼は、自分の眼にも涙が溢れて來るのを感じた。「それでいゝ、ロバアタ。それでいゝ。どうぞ、泣かないで。本當に、僕は、どんなに可愛いと思つて居るか。全くですよ、ロバアタ」

クライドが見上げると、東の方の低い屋根の上に、七月の満月の黄色味がかつた端が、丸く覗きかかつてゐた。その瞬間、人生は、その與へ得る凡てを彼に與へたやうな氣がした。

十八

此の逢引の絶頂は、今後続けられる接觸と喜びの、單なる序曲に過ぎなかつた。今や彼等は戀を見出した。そこにどんな問題があらうとも、二人は夢のやうに幸福であつた。しかし、それを續ける手段や方法は、また別個のものであつた。彼女がニュートン家に居る事は、彼等の戀の進行の邪魔になつたが、更にグレース・マアル自身も或る特殊な問題を提示してゐた。彼女の生活は、ロバアタにも増して拘束されてゐたが、それは彼女の容貌が醜いからばかりでなく、子供の時から遍狭な教育や、家庭の訓練に依つてゐた。だが、彼女も賑やかで自由である事は望んでゐたのだ。彼女の眼からすれば、ロバアタは快活で、時に傲慢な事もあつたが、それでも、彼女同様に因襲の中に捕はれてゐるので、酷く窮屈な女ではないと思つてゐた。そこで、彼女は益々ロバアタに接近して行つたが、ロバアタはそれを多少退屈に感じて居た。實際グレースは、彼女と話し合つたり、巫戯け合つたり、お互ひの愛の生活や夢想を打開けあつたりしても、ちつとも差し支へない仲だと空想して、そこに、彼女の灰色の世界に於ける慰めを見出してゐたのだ。

しかし、ロバアタは、クライドに會ふ以前でも、彼女と餘り親しくすることは考へものだと思つて

るた。それは退屈であつた。だから其の後になつても、彼女はクライドの事だけはグレースに話さないでおいた。彼女は此の突然の隔りを憤慨する計りでなく、かうした突然な革命的な變化を認めようとしなからうから、男に會つて直ぐそれを愛するなんて、彼女にはとても許せない事であると、ロバアタは思つたからである。さうした接觸は、此の町の立派な人間には禁ぜられて居る事ではないか。彼女はそれを知つてゐた。だから、クライドについては、全然話さない事にした。

事實、あの湖水で會つた日曜日の翌晩、グレースが色々クライドの事を尋ねた時にも、ロバアタは殆んど何の興味も持つてゐないかの様に、彼の事を話したのだつた。彼女は只、クライドが大變面白く男である事や、グレースの事を訊いてゐたと言ふ事を、話したに過ぎなかつた。自分の事を訊いてゐたと聞くと、グレースは疑はしい眼を向けて、此の人は本當の事を言つてゐるのかしらと言ひたけな顔をした。

「でも、あなたに餘り親切だから、屹度、あなたを好きなんだらうと思つてたわ」

「まア、馬鹿らしい」ロバアタは多少驚いて、狡さうに答へた。「だつて、私の顔なんぞ、ちつとも見てやしなかつたぢやないの。それにあの會社には、そんな事をしてはいけないと言ふ規則があるんですもの」

此の最後の言葉は、何よりもグレースの疑ひを解くに役立つた。因襲的な彼女には、さうした會社の規則に反く様な事は、考へる事さへ出来なかつたからである。何れにしてもロバアタは、クライドとのことをグレースに疑はせまいと思つて、クライドの事を話す時には、細心の注意を拂ふことにした。

しかし、かうした苦勞や緊張や恐怖は、その後起つた困難に比べれば、何でもないのであつた。實際、彼女は、クライドと完全な理解に達した今、どうして彼に會ふかに就て困つて來た。一度會つたが最後、何時また會へるのか見當さへつかなかつたからである。

「だつて、あなた、かうなのよ」それから二三日後の夜、一時間計りこつそり家から忍出て、マホー、ク川の畔の小さい空地で會つた時、彼女はクライドにかう説明した。「あのニユートン夫婦と來たら、私をうつちやつた儘では、殆んど何處へも出ないんでせう？ たとひあの人達はさうでなくても、グレースは絶対に私と一緒にでなくては出掛けないんですもの。トリツベットミルに居る時から、ずつとさうしてゐるもんだから、あの人にはもう私を家族か何かの様に思つて、それを當然だと思つてゐるんですわ。でも、かうなつたら、私、何とかして好い口實を見つけないと思ふのですけど、どうしたらいいか解らないのですもの。何處に、誰と一緒に行くと言つたらいいか、私考へてますのよ」

「それは僕にもよく解つてますがね。しかし、何とかしなきゃ仕方ないぢやないですか。工場でだけしか會へないなんて、とても堪らない事ですからね」彼のしんみりした、堪らなような顔を見ると、彼女も同情に動かされて、彼の失望を慰めようとして言つた「え、え、だから、私もその積りでは居ませんわ。私だつて嫌なんでももの。だけど、一體どうしたらいいでせうねエ？」彼女は柔らかな手を、クライドの瘠せた長い手の脊に置いた。

「こんな事も考へてますのよ」暫く考へてから、彼女はまた言つた。「實は、私の姉がニューヨークのホームーに住んでますの。此處から三十五哩ばかりですから、土曜の午後か日曜に、其處に行かうかしらと思つてますの。姉からは、度々来るやうにつて手紙を寄越すのですけれど、これ迄は考へた事もありませんでしたの。でも、私さうしますわ。ねエ、さうしますわ」

「そいつはい、何故さうしないんです。素的ぢやないですか」とクライドは叫んだ。

「確か、私の記憶に間違ひがなかつたら、あそこに行くには、フォンダで乗換へるんですわ。しかし、フォンダまでは何時でもトロツコが出ますし、フォンダからは確か二時と六時の二度、汽車が出たと思ひますの。ですから、私、二時前の何時にでも此處を出て、二時の汽車をやり過してしまへば、それでいゝので御座いませう？ 私、七時で行つてもいゝのですから。さうすれば、あなたに向ふで

會つてもよござんすし、途中で會つてもよござんすし、どちらにしても、此の町の人に見られないで済むと思ひますわ。そして、私がフォンダを發つたら、あなたも歸つていらつしやればいゝではありませんか。私、アグネスにさう言つてやりますわ」

「しかし、その時まではどうするんです？ 随分先の事ぢやありませんか」

「え、それも私考へてますわ。あなたも考へて下さいな。でも、もう歸る時間ですわ」彼女はせかせかとした調子で言つて、自分も立上り、クライドをも立上らして、彼の時計を見た。それは既に十時に近かつた。

「しかし、僕達はどうするんです」彼は執拗に續けた。「何だつて、此の次の日曜日に別の教會に行く振りをして、僕と何處かで會つて呉れないんです？ それでは駄目ですか？」

忽ちロバアタの顔が、少しばかり暗くなつたのに、クライドは氣付いた。彼女が子供の時から教へ込まれた或る信念に、クライドが侵害しつゝある事を感じたからだつた。

「まア」と、彼女は嚴肅な調子で答へた。「私、それだけはしたく御座いませぬの。氣持の悪い事です、正しい事でもないと思ひますから」

クライドも直ぐに、自分が危険な道を歩いて居る事を感じて、此の動議を引込めた。彼は、彼女を

驚かしたり、氣持悪くさせたりしたくなかつたからである。

「あゝ、さう、あなたの言ふ通りです。僕は、他に方法がなかつたから、さう言つたのですけれど」
「いゝえ、いゝえ。いゝのです。私は只、さうしたくないから、さう言つたわけですから」クライドが、自分が怒つたと感じたのだと思つて、彼女も優しく言つた。

クライドは頭を振つた。自分の子供の時にも、矢張りやかましく言はれてゐた事を思ひ出して、こんな事を言はなければよかつたと思つた。

彼等はテラー街の方に歸つて行つたが、フォンダ行きの話の他には、これと言ふ打合せも出来なかつた。幾度も幾度も接吻をした後に、彼等の言ひ得た事は、只、お互ひに何とか考へて見ようと言ふ事だけであつた。彼女も、両手を男の首に廻して、身體を投げ掛けたが、やがて其の小さい影を月光に揺らがせ乍ら、テラー街を東の方に走り出した。

其の後、ロバアタは、もう一度ブラレー夫人に會ふ口實を作つて、クライドに會つたが、その他には機會もない中に、ロバアタがフォンダに發つ日曜日が來た。豫め、時間を確めて置いたクライドは、一つ前の車で出發して、次の驛でロバアタと會つた。それからその晩の七時に彼女が汽車に乗るまで、二人は此の比較的小さい町の附近を遊び廻り乍ら、言ひ盡せない幸福を共にした。

フォンダの町から二三哩離れた處に、スターライトと言ふ娛樂公園があつて、其處には輪轉飛行機臺だの、摩天舟だの、メリーゴーラウンドだの、古水車だの、ダンス場だの、見掛け倒しの娛樂物が置いてあつた。その湖の殆んど真中に一つの島があつて、其處に小さい音樂堂が建て、あつたが、その岸には一匹の熊が檻に入れてあつた。ライカーガス附近にも、かうした人混みの遊び場所はあつたが、ロバアタは曾つて行つた事がなかつた。クライドは、それを見たと直ぐ叫んだ。「行つて見ませうか。ねエ、行かうぢやないですか。もうフォンダに來ると同じ事ですからね。少し遊んで行かうぢやないですか」

直ぐに彼等は駆け下りて行つた。丁度、メリーゴーラウンドが盛に廻つてゐたので、二人はそれに乗つた。竊馬に乗つた彼女の側に、腕を廻して立つて居る彼等は、上々の機嫌であつた。亂雑な下等な騒がしさの中であつたが、彼等はお互ひの心が、確かりと抱き合つて居るのを感じた。グル／＼と廻り乍ら、彼等は周囲の遊樂人達を眺めた。そこには、湖水の中でボートに乗つて居る者もあつたし、緑や白の固定飛行機に乗つて、廻つて居る者もあつたし、摩天船に乗つて上つたり降りたりして居る者もあつた。

二人は、湖水の向ふの森や空を眺めた。ダンス場に踊つて居る人達も、夢見心地のやうに見えた。

「あなたはダンスをしないの？ ロバアタ」突然、クライドが聞いた。
 「まア。いゝえ。出来ませんわ」丁度、彼女も、幸福さうに踊つて居る人達を眺めて、自分が踊れな
 い事を悲しく思つて居た處だったので、残念さうに答へた。ダンス等をしてはいけな
 いと、彼女の教
 會の人達は言つて居る。しかし、今かうした戀に陥つて居る時、他の人達は皆な、愉快さうに樂しさう
 に踊つて居るではないか。様々な着物の色が、緑色や鶯色の窓枠の中で、ちら／＼と動いて居る――
 見て居て氣持の悪い景色ではなかつた。何故ダンスをしては悪いのだらう？ 彼女の弟や妹でさ
 へ、親達の意見を無視して、機會があつたらダンスを習ふのだと言つて居るではないか？
 「いや、しかし、そんなに悪いものぢやないですよ」クライドはロバアタを抱いて踊る事が出来たら
 どんなに嬉しいだらうと思ひ乍ら叫んだ。「あなたが踊れると、随分愉快なんだがなア。よかつたら教
 へて上げませうか。二三分もしたら踊れるやうになれますよ」
 「どうですか」と彼女は嘲けるやうに答へたが、彼女の眼の色では、既に意を動かして居るらしかつ
 た。「私、そんなに器用ではありませんのよ。それに、私の田舎では、ダンスを餘りいゝものだと思つ
 てるませんし、教會でも止めてゐるのですもの。家の父達も、餘り喜ばないだらうと思ひますわ」
 「そんな馬鹿な事はないですよ。だつて、此の頃は誰でも踊つてゐるぢやないですか。ダンスを踊つて

何處に悪い處があるんです」

「えゝ、それは私にも解つてますわ。あなた方でも工場の人達でも、皆な踊つてますわ。あなたのや
 うなお金や地位のある人なら、何をしたつていゝのですもの。でも、私の様な女は、別だと思ひます
 わ。あなたの御両親だつて、私の父達と同じ様に、嚴格なので御座いませう？」

「えゝ、それは大したものですがね」クライドはさう言つて笑つたが「あなた方」だの「あなた」だ
 の「あなたのやうな金や地位のある人」だのと言はれたのが氣になつた。

「それはもう、あなたの親達以上に嚴格ですよ、屹度。しかし、僕は平氣ですよ。だつて、悪い事な
 んぞ、ちつともないぢやないですか。さア、教へて上げませう。實際、素的ですよ。ね、さア」

彼は、彼女の身體に腕を廻して、彼女の眼に覗き込んだ。クライドを好きで堪らない彼女の心は、
 幾らか折れて來た。

丁度その時、メリーゴーラウンドが止つたが、彼等は無意識の中にダンス場の方に流されて行つた。
 其處には餘り澤山ではないが、しかし狂氣の様な若者達が踊り廻つてゐた。可なりの人數のオーケス
 トラが、フォックストロットのワンステップだのを演奏してゐた。廣場の一部を仕切つて、その廻
 り木戸に、可愛らしい木戸番が立つて、切符を受取つて居た。一ダンスが十仙と言ふ事だつた。その

音楽と色彩と、旋律的に踊り廻つて居る人々の動作が、直ぐにクライドとロバアタを捉へて了つた。

オーケストラが止むと、踊手は皆外に出始めた。しかし、間もなく、五仙券がまた賣り出された。

「でも、私駄目ですわ」クライドが切符賣場の方に行き出すと、彼女は頼む様に言つた。「随分、見つともないと思ひますの。だつて私一度も踊つた事がないのですもの」

「見つともないんですつて？ ロバアタ。馬鹿を言つちやいけない。あなたなんぞ、一番綺麗ぢやありませんか。直ぐに素晴らしい踊手になれますよ」

彼は既に白銅貨を拂つて、中に入つて行つてゐた。

クライドをライカーガスの上流社會の人のやうに思つて居る彼女は、何となく晴れがましい氣持でダンス場の隅の方へ行つた。クライドが色々と踊り方を教へて呉れたが、ロバアタの様な娘にとつては、それは難かしい事ではなかつた。音楽が始まると、クライドは直ぐ彼女を引寄せて、歩き始めたが、彼女も大して骨折らないで一緒について行けた。彼に抱かれて、あちこちと動き廻つて居る事は、彼女にとつて喜ばしい感覺であつた。彼の身體の驚く可きリズムにつれて、彼女の身體も動いて居るのだ。

「素的ぢやないですか。天晴れな踊り振りますよ。全く驚いぢやつた。すつかりもうこつを飲込んで

るぢやないですか」

二度三度と踊つて居る中に、ロバアタは曾つて味つた事もない喜びの中に、我を忘れる様になつた。

彼女は今、ダンスを踊つて居るのだ！ しかも、クライドと一緒に！ 此のダンス場ぢうで、彼程立派な男は居ないではないか、と彼女は思つた。しかも、クライドはクライドで、ロバアタ程可愛い娘を見た事がないと考へてゐた。快活で愛嬌があつて、而かも従順だ。恐らくは、クライドに迷惑を掛ける様な事は決してしないだらう。彼はふと、ソンドラ・フィンチュレーの事を思出した。彼女は彼を無視した。彼も彼女の事などは忘れる可きであらう。だが、此處でかうしてロバアタと踊つて居乍らも、彼はソンドラの事を全く忘れるわけに行かなかつた。

五時半になると踊手が少なくなつたので、オーケストラも止んだ。「次回は七時半より」の貼り札が出されたが、二人は未だ踊り續けてゐた。やがて彼等もアイスクリーム・ソーダを飲んで、鳥渡した食事をして行つたが、その間に時間が瞬く間に過ぎて、もうフォンダ行き汽車に乗らなければならなくなつた。

その頃になつて、クライドとロバアタとは、しきりに明日の事を考へ出してゐた。明日の日曜日に、彼女が多少早く姉の處を出る事が出来れば、クライドもライカーガスから来て、彼女と會はうと言ふの

だつた。ホームーからの終列車は、十一時にフォンダを出る事になつてゐたから、それまで此の附近で遊べるわけだつた。ライカーガスから此の町に来る人なんか無いであらうから、ホームーから真直ぐ歸つて来たと言つても、悟られる心配はないわけであつた。

さうした打合せをした彼等は、その町の暗い通りを、色々と話し合ひ乍ら、停車場の方に行つた。ロバアタは、ビルツでの家庭の事等も多少話した。

しかし、かうした囁きや接吻や抱擁の他に、彼等にとつての重大事は、今後どうして、何處で會はうかと言ふ事であつた。二人は何とかしなければならぬ。そして、それは、ロバアタ自身が何かの方法を見付けるのでなくてはならないと、彼女は思つた。クライドが出来るだけ彼女に會はうとして苛々して居る事は解つてゐるが、と言つて、彼が適當な方法を考へ付けてゐるとは思へなかつたからである。

しかし彼女にとつても、それは容易な事ではなかつた。もう一度、ホームーに行くとか、ビルツの親達の所へ行くとか言へば、彼に會ふ事も出来るわけであつたが、それは一ヶ月以内と言ふわけには行かなかつた。しかも、その他にどんな口實があるだらう。工場で出来た新しい友達——郵便局——圖書館——女子青年會——みんなその時、クライドが言ひ出した事である。しかし、どれを考へて

も、僅々、一二時間の逢引きに過ぎない。しかも、クライドは、かうした週末の逢引きを求めて居るのである。しかも、此の夏の間には、もう幾つ週末も残つてゐなかつた。

十九

歸り途にも、彼等は誰にも氣付かれなかつた。汽軍の中にも知つた人は居なかつたし、ニュートンの家に歸つて来た時には、グレースはもう寢てゐた。彼女は鳥渡眼を醒して、旅行の事を訊ねたが、それも極くつまらない質問であつた。ロバアタの姉はどうしてゐるか。一日中ビルツに居て、ホームーにも、トリツベットミルにも行かなかつたか。ロバアタは、終日、姉の家に居た様に言つて置いた。グレース自身も、近中にトリツベットミルの親達の處に行かなければならない。そんな事を話してから、彼女は眠りに落ちた。

しかし、翌日の夕飯の時、オバル・フェリスとオリブ・ボープとが、同じ様にテーブルについて居た。前の日、フォンダに遊びに行つて、遅く歸つて来た彼等は、その日の朝飯のテーブルには、一緒に居なかつたのであつた。ロバアタが食堂に入つて来るのを見ると、彼等に決して悪意はなかつたが、ロバアタにとつては非常に厄介な事を言ひ出した。

「まあ、あんた。あのスターライト公園に一緒に行つてた人は誰よ？ あんた、あそこで、ダンスを踊つてたぢやないの。私達にはよく解つてたんだけど、あんたには解らなかつたらしいわね」ロバアタが何と返事をしようかと思つてゐる中に、フェリスが口を出した。「私達、随分あんたに解らせようと思つただけれど、あんたはその人の顔計り見てるんだもの。あんたダンスが巧いのね」
ロバアタは此の娘達とはそんなに親しくもなかつたし、此の思ひ掛けない素つば抜を言ひ抜ける方法も思ひ浮ばなかつたので、忽ち眞赤になつて了つた。言葉もなく眼を見張つて、グレースに終日姉の處に居たやうに説明して居た事を思ひ出してゐた。向ふ側に坐つて居るグレースは、ぢつと彼女の方を見詰めて、僅かに口を開いて居たが、それは、「さア、すつかり解りましたよ。ダンス！ 男の人！」と言ひたけであつた。テーブルの上座に居るジョージ・ニュートンも、何か心配さうに、その鋭い眼と鼻と顎とを、彼女の方に向けてゐた。

しかし、その瞬間に、ロバアタは何か言はねばならないと思つた。「え、さう。鳥渡ばかり行つてたわよ。姉の家の御友達がいらしたので、一緒に行つてたの」でも、長くは居なかつたのよ——と彼女は言はうと思つたが止した。母親譲りの或る闘志が、その瞬間、彼女を救ひに来たからだつた。だが、それにしても、何だつてスターライト公園に行つて悪いのだ？ ニュートン夫婦や、グレース

や、他の連中に、そんな事を尋ねる権利はないではないか？ 彼女は、自分の下宿代を拂つて居るのだ。だが、それにしても、何と言ふ際どい嘘を見破られたのだらうと、彼女は思つてゐた。而かも、それは皆、彼女が此の家に住んでゐて、くだらない事まで監視されてゐるからだと思つた。

「さうだわね。あの人は、ライカガスの人ではなかつたわね。あんな人を此の町で見掛けた事は無いのですもの」と、ポーブが、不思議さうに言つた。

「え、此の町の人ではないわ」ロバアタは、グレースに言つた嘘を攔まつた事を感じて、多少參つて居たが、でもさりげなさうに、さう答へた。實際、グレースは、彼女に隠した此の交際を、烈しく憤慨して居るらしかつた。ロバアタは、その場で立上つて、此の家を出て了ひたい氣がしたが、一生懸命に心を押へて、餘り親しくもない此の二人の娘を睨みつけてゐた。同時に、彼女の眼は、グレースやニュートンへも、挑戦的に向けられてゐた。彼等が若し、此の上何か言へば、彼女はホームリーの姉の家に入りする男の名前を、出鱈目に言つてやらうかとも思つたが、また、どんな報告をも拒んでやらうかとも思つた。そんな必要が何處にある！

實際、その拒絶をゆるめる必要がない事は、その後直ぐ解つた。食事が済んでから、彼女の部屋にやつて来たグレースは、彼女を非難するやうに言つた。「あんた、昨日は一日、姉さんの處に居たと言

つたぢやないの？」

「え、言つたけど、それがどうしたのよ」ロバアタは、寧ろ苦々しげに、挑戦的な答へをした。グレースは、道徳的に彼女を責めてる様に見せかけては居るが、事實は、ロバアタが彼女から離れて行かうとするのを怒つてゐるのだと言ふ事が、彼女に解つてゐたからである。

「だけど、これからはあなたが何處に行かうが誰と會はうが、私に嘘をつく事だけはよして頂戴。私はもう、あなたと一緒に何處にも行きたくないんだから。あなたが何處に行かうが、誰と一緒に行かうが、私はもう知りたいたとは思はないわよ。だけど、私に嘘をつくのはいゝとしても、ジョージやメリーに直ぐ見現はされるやうな事は止して頂戴。あなたが私から逃さうとしてゐるのは、もう私にも解つてゐるのだから。あなたを庇ふ爲めに、私が嘘をつかなくちやならない様な事は、ご免を蒙るわよ。そんな事は眞平だわ」

感情をすつかり害して、悲しくなつて居たグレースは、がみぐみと言つた。ロバアタはロバアタで、かうなつてはもう、此處の家を出るより他にないと思つてゐた。グレースは姪である——居候である。彼女には、彼女自身の生活もないし、自分で自分の生活を作る事も出来ないのだ。彼女の近くに居る限り、彼女はロバアタが、その全部を捧げる事を要求する。あらゆる思想と氣持とを、彼女と分け合

ふ事を要求する。若し彼女が、クライドの事を打明けでもしようものならば、彼女は屹度顛動して、結局、彼女を敵にして棄て、了ふだらう。だから、ロバアタは唯かう答へた。「あゝ、いゝわ。お望みならばさうませうよ。私はちつとも構はないわ。言ひたくなければ何も言はないから」

グレースは直ぐに、ロバアタがもう彼女を好いて居ない事や、彼女を對手にしようとして居ない事を見てとつた。早速、彼女は立上つて、昂然として部屋から出て行つた。ロバアタも、彼女を敵にした事を感じて、今はもう此の家から出て行くだけだと思つた。何れにしても、此の家の人達は餘りに遍狭だ。彼等は、クライドとの祕密な關係を理解しても呉れないし、許しても呉れない。餘りにもうるさく、或る意味からは失禮だ。クライドが言つた様に、此の家を出るに限る。それが必要なのだ。彼女は彼を愛して居る。非常に、非常に愛して居る。彼女と彼とを保護する爲めにも、どうにかしなければならぬ。他の貸間に引移らなければならぬ。

しかし、これには非常な勇氣と決心とが入つた。人に知られない様な處に、只一人で部屋を借りねばならないし、その事を母や姉に説明する必要もあつた。しかし、こんな事があつたあとで、此の家に居続ける事も、今はもう不可能であつた。殊にグレースや、ニュートン夫人の態度、初期の清教徒かフレンド教徒かの様な彼女等が、「兄弟」や「姉妹」の大した罪を發見したのではないか。彼女はダ

ンスをしてゐたのだ。しかも秘密に！ 而かも、スター・ライト公園に行つた事も黙つて居るし、その旅行についても、一緒に居た男についても、まるで説明らしい説明をしないのではないか。しかし、ロバアタの方から言へば、こんなに監視されて居たのでは、クライドと録々會ふ事も出来ないわけであつた。そこで彼女は、まる二日間、不愉快に考へ續けてから、クライドと相談をしたが、クライドは直ぐに、人目に立たないで彼と會へるやうな部屋を見つけると言つた。いろいろ相談の末、此の町の東南部がいゝと言ふ事になつたので、彼女は一時間計り探した末に、適當な家を見つけた。それは、エルム街の或る古い煉瓦造りの家で、其處には或る家具職の夫婦と、婦人帽子屋に通つて居る長女と、未だ學校に行つて居る次女とが住んでゐた。彼女の借りた部屋は、玄關の隣りの小さい部屋で、正しく往來に向いてゐるが、玄關から突き當りの居間で、他の部屋との交渉がすつかり断たれて居るので、誰にも氣付かれないで出入が出来る様になつてゐた。クライドとこつそり會ひたいと思つて居る彼女には、これは重大な事だつた。

のみならず、彼女が此の家の主婦のギルビン夫人と話した處から想像すると、此の家は、あのニュートンの家の様に嚴格でも、物好きでもなさゝうであつた。彼女の話では、此の家では經濟的に下宿人を置く必要はないのだが、此の部屋は殆んど使つて居ないので、貸す事にしたと言ふのだつた。ロバ

アタの様な、獨り者の女で、朝晩を一緒に食事をして呉れるやうなのが欲しかつたとの事だつた。彼女の家族だの何だのについては何も聞かないで、只、興ありけに彼女を見詰めてゐるだけであつた。その様子で、多分ロバアタを氣に入つてゐるのだらうと思つたし、此の家の氣風も、ニュートン家の様ではなさゝうに思へた。

だが、かうして、いざ引移るとなると、また色々と惱ましさを感ぜないで居られなかつた。そこには何となく後暗い感じがあつたし、殊に此の町での唯一の女友達のグレース・マアルと喧嘩別れをするのだと思ふと、いゝ氣持はしなかつた。彼女が此町へ來たのも、元はと言へばグレースの御蔭だつたからだ。彼女はまた、自分がグレースと別れたと聞いて、両親や姉がどう思ふかを考へた。一體、こんな事をしていゝのだらうか？ 此の町に來て未だ幾らにもならないのに、こんな事をしてよかつたのだらうか？ 彼女は、今日までの無瑕な生活が、壊れて行くやうな氣がした。だが、そこには今、クライドがあつた。彼女の凡てを捧げて居るクライドが居るではないか。

色々苦しんだ擧句に、彼女はしかし、止むを得ない事だと思つた。そこで、手附けを拂つて、二三日中に引越して來るからと言つて、歸つて行つた。そして、その日の夕方、ニュートン夫人に、此の家を引越す事を告げた。彼女は豫め考へてゐた通りに、彼女の弟と妹が、近日、此の町に來て

住む事になつてゐるから、その用意をして置きたいと説明した。

無論、ニュートン夫婦もグレースも、それは唯、ロバアタに出来た最近の知合ひの爲めで、その爲めにグレースと離れ様としてゐるのだと言ふ事が解つてゐるが、今は勝手にさせるより仕方がなかつた。言ふ迄もなく、彼女は、彼等に承認の出来ない或る種の冒険を冒して居るのだ。グレースがこれまで思つて居た程、頼母しい女でない事も解つて来た。無論彼女は、自分のしてゐる事を知つてゐるに違ひない。しかし、トリツベットミル時代の保守的な生活と相容れない或る考へが、彼女を捕へて居るのに違ひないと思つた。

しかし、ロバアタ自身も、かうして此の新しい環境に身を置いて見ると、クライドに會ふ自由が出来た事は別として、自分のとつた手段に、多少の懸念を感じた。悪くすると、自分は餘り急ぎ過ぎ、怒り過ぎて、後悔する様な事をしたのではないだらうか？ だが、既に済んだ事であるし、止むを得ない事だつたのだとも思つた。兎に角、暫く此の生活を送つて見ようと、彼女は決心した。

何よりも自分の良心を満足させる爲めに、彼女は直ぐ、母や姉に手紙を書いて、ニュートン家を出るやうになつた。いきさを、自分にい、やうに書いてやつた。グレースが段々自分勝手に、干渉勝ちになつて来たこと。それが彼女には堪へられなくなつたこと。だが、何も心配して呉れる事はない。萬

事は巧く行つて居る。自分一人の部屋だから、トムやエミリーや母親やアグネスが来ても、ちつとも構はない。来れば、ギルビン家の人達を紹介して上げると言つて、此の家庭の事を細かく書いてやつた。

しかし、これら凡ての事の底で、彼女の心の中に蟠つて居る思ひは、彼女が今、火遊びをして居る。社会的な不面目を生み出すのではないかと言ふ事であつた。無論、彼女が始めて此の部屋を見て、都合のい、部屋だと思つた事は、意識的には殆んど氣にも止めて居なかつたが、潜在意識的には、彼女はよくそれを知つてゐたのだ。彼女は今危険な路を探りつゝある。——それを知つてゐたのだ。しかも今、社會の道徳と相容れない欲望に面接しつゝある時、彼女は、どうしたらいいだらうと、屢々自分に聞いて見なければならなかつた。

二十

その後、數週間、ロバアタとクライドとは、此の地方の都市聯絡沿線のあちこちで會ひ續けたが、それでもまだ彼等には、満足しきれないものがあつた。その主なものは、此の部屋についての彼等の態度であつて、今少し此の部屋が利用出来さうだと言ふ點にあつた。無論クライドは、ロバアタに對

して、普通の健全な交際以上のものを求める事に、公然同意してゐる譯ではなかつたが、しかも彼女が此の部屋に移つてからは、それ以上の或る物——更に深くロバアタと結びついて、彼女の思想も行為も、あらゆる物を彼の物にしたいと言ふ、許し難い、非難すべき、だが酷く人間的な、殆んど避け難い欲望が、心の中に動いて来るのを、どうすることも出来なかつた。しかし、それでは、どうして彼のものにするのか？ 結婚をして、普通の平凡な關係を、平凡に續けるのか？ しかし彼は、一度もそれを思つた事はなかつた。グリフィス家と同等な家の娘達（例へばソンドラ・フィンチュレーやベルチン・クランストンのやうな）ならば兎も角、それ以下の娘達とは、どんな仲になつても、結婚はしたくないと思つて居た。それは主として、彼の此の新しい親戚達が、その結婚をどう思ふかについて考へるからであつた。實際、彼等がそれを知つたなら、何と思ふだらう？ 事實、彼は、ロバアタなどよりも、社會的に遙かに上位の人間であり、世間からもさう思はれて居るのではないか。而かも此の町には、彼を知つて居る人間が澤山ある。少くとも、口をきく程の人は澤山居る。だが、同時に、彼女の性質が、彼に適して居る事を知つて居る彼は、彼女が彼に不似合だと言ふ事は出来なかつたし、二人が結婚する事は幸福でないと言ふわけにも行かなかつた。

その上に、今一つ厄介な事が起りつゝあつた。それは、今や、風の冷めたい霜夜が近づきつゝある

事であつた。實際、此の附近の戶外遊樂地は、凡て九月の中頃に閉して了つたので、今は季節外れになりつゝあつた。無論ダンス場も、彼女が行きたがらない附近の町のホールを除いては、もう無くなつてゐた。教會や活動寫眞館や料理屋と一緒に行く事は、クライドの現在の境遇上、勿論出来ない事であつた。今や彼女の行動には、何の束縛もなかつたが、二人の關係を再整理して、クライドがギルピンの家に訊ねて行つてもいゝ様にする他には、彼等の會ふ可き場所はなかつた。しかし、そんな事は、彼女には出来ない事であつたし、クライドにも、それを言ひ出す勇氣がなかつた。

しかし、彼女が新しい部屋に移つてから六週間計り経つた或る十月始めの夜の事だつた。空には星影か鋭く、地には冷たい風が吹いてゐた。木の葉も既に散り始めてゐた。ロバアタは既に緑とクリム色の七三の冬外套を着てゐたし、彼女の帽子は、革で縁取つた鶯色のに變つて居た。最初に會つた日と變らない熱烈な接吻を、幾度となく交した後に、「段々寒くなつて來ますね」とクライドが言つた。それは既に十一時であつた。

「え、本當に寒くなりましたわねエ。もう直ぐ、もつと厚い外套が入る様になりますわ」

「僕達、これからどうしたらいいですかね。二人で行くやうな場所も、もう澤山ないし、かうして毎晩往來を歩くのも、餘り愉快ではないですからね。僕があなたの部屋に訪ねて行くわけには行かない

かしら。今度はニュートンの家とは違ふんだから、行つても構はないと思ふのですが」

「え、でも、あそこの居間は、毎晩大抵十時半か十一時頃まで使つてゐるのですもの。それに、あの家の二人の娘さんが、十二時頃まで出たり入つたりして居ますからね。そんな事をしてどうだかと思つてますの。それに、私と一緒に居らつしやる所を、人に見られてはお困りになるでせう。いらつしやれば、あの家の人達にもあなたを紹介しなくてはなりませんし」

「いや、僕のは、さう言ふ意味ではないのです」クライドは、彼女が餘りにこせ／＼して居る事を感じ、もつと自由な態度を取る可きだと感じ乍ら答へた。「僕だつて、ほんの少しの間、居るだけだから、家の人に知らせる必要はないではないですか」彼は時計を出して、マッチの光りで十一時半である事を確かめ、それを彼女に見せてから言つた。「もう誰も居ないでせう。誰か居る？」

彼女は頭を横に振つた。彼の考へが怖くなつたばかりでなく、胸を突かれるやうな気がしたのだつた。そんな事を言ひ出すなんて、餘りに大膽だ。その言葉の中に、彼女が面接する事を怖れてゐた秘密な恐怖や、強迫的な氣持が、含まれてゐる気がしたからだつた。それには何か、罪深い、下等な、怖ろしいものがある。それを冒してはならない。だが、同時にまた、彼女の内心には、自ら抑へ怖れてゐた強い慾望が、烈しく湧起つて來て居るのを感じた。

「い、え、でも、それはいけませんわ。そんな事をしては悪いんですもの。私、嫌なんですもの。誰に見られるか解りませんし、あなただと言ふ事が解るかも知れませんもの」その瞬間、烈しく湧起つて來た道徳的な反撥力が、無意識的に彼女をクライドの抱擁から逃げさせた程だつた。

クライドは、此の突然の反抗が、如何に根強いものであるかを感じた。が、それを感じれば感じる程、一層掴み難いものを掴まうと言ふ要求に鞭打たれた。様々な口實が、彼の唇に登つて來た。「しかし、こんな時間に、誰が見て居るもんですか。此の邊りには誰も居ないぢやないですか。たつた二三分でい、んぢやないですか。誰にも解りやしないですよ。そんなに大きな聲で話すわけでもないのだし、此の往來にだつて、誰も居ないぢやないですか。誰か居るかどうか、家の前を歩いて見様ぢやないですか」

これ迄の彼女は、此の家の半帳場以内には、彼を決して入れなかつたのであつたが、今クライドは、多少意地にかゝつて居るらしくもあつたし、上長として戀人として、多少怖れても居たので、ロバータは止むを得ず、彼を家の直ぐ近くまで來させて了つた。邊りには、犬の吠える聲の他には何も聞えなかつた。家の中も眞暗であつた。

「ね、誰も居ないぢやないですか。ほんの鳥渡立寄るのが、何故悪いんです？ 誰に知れるんです？

何も、音を立てる必要はないのだし。それに一體、この事が何處が悪いです？ 他の連中は皆なやつてるぢやないですか？ 娘が自分の友達を部屋に連れて行くなんて事は、そんなに怖ろしい事ではないですよ」

「まア、さうでせうか。屹度、あなた方にはさうかも知れませぬわ。だけど、私には、それがい、事だとは思へませんし、そんな事は嫌なんですよ」

かう言ふと同時に、ロバアタの心は烈しく痛み出した。彼女はこれ迄になく、反抗的な個人的な自分を男に示した事を感じたからだつた。屹度クライドは、こんな女だとは思つて居なかつたに違ひない。彼女は少からず怖くなつた。こんな口の利き方をしては、男に嫌はれるかも知れないと思つたからだつた。

瞬間に、クライドの氣持は暗くなつた。何だつて、そんな様子をするのだらう？ 僅か計りの享樂に對して、餘りに用心深く、怖がりすぎる。リタにしても、他の女工達にしても、こんな態度には出なかつたではないか？ なるほど、彼女は、彼を愛してるやうな顔をして居る。道端の木の下で抱いたり接吻したりする時には、彼女はそれを拒まなかつた。しかし、それ以上に少しばかり親密にしようとする時、彼女はもう承知出来ないのだ。一體、これは、どう言ふ種類の娘なのだ？ 彼女を追駈

けて何の役に立つのだ？ 結局、ホルテンス・ブリッグスの二の舞をやつてるのではないか、無論、

ロバアタは彼女とは違つて居るが、しかも、その頑固な點に於ては、同じではないか。

ロバアタには、クライドの顔を見る事さへ出来なかつたが、しかし、彼が怒つて居る事は解つてゐた。こんな事は彼にも始めてあつた。

「いや、それではよござんす。あなたが嫌ならば無理には言ひません」口を突いて出た言葉には、或る冷たい響があつた。「僕の行く家は他にもありますからね。僕にも、あなたが、僕の言ふ事を何も聞いて呉れない事が解つたですよ。しかし、一體あなたはどうする積りなんです？ 毎晩々々、かうして往來を歩けると思つてるんですか？」彼の語調は憂鬱であつた。これ迄になく喧嘩調子で、苦々しさうであつた。しかも彼が、他に行く處があると言つた事が、彼女を脅かし怖れさせた。即座に彼女の氣持が變らうとした程だつた。さうだ、此の人には、何時でも會へる娘達が、他に澤山ある筈だ。工場の他の女工達も、絶えず彼に眼配せして居るではないか。彼女自身も、何度となくそれを見てゐる。あのルザ・ニコフオリツチだつて、随分下等だけれど綺麗ではないか。それからあのフロラ・ブランド！ マルサ・ボウダールウー！ これ程綺麗な男だもの、誰でも追駈け廻すにきまつて居る！ 彼女は、餘りに頑固な女だと考へられる事を怖れた。餘りに無經驗で、餘りに勇氣がない爲めに、他の

娘に氣を向けられるかも知れない事を怖れた。さうなれば、彼女はクライドを失はねばならない。それを考へる事は怖かつた。忽ち、彼女の態度は、反抗から懇願に變つた。

「あら、どうぞそんなに困らせないで頂戴。出来れば私だつてさうしますわ。でも、此處では駄目です。お解りになりませんか？ え？ そんなことをすれば、此處の家の人に、屹度氣づかれるだらうと思ひますわ。若しも私達の事が解つて了ひ、あなたが誰だかを氣付かれてしまつたら、それこそどうなるとお思ひになつて？」彼女は辯解するやうに言ひ乍ら、クライドの腕を把つた。先刻のあの鋭い反抗にも拘はらず、彼女が此の事を痛々しい程心配して居るのだと言ふ事が、クライドにも解つた。

「どうか、そんな事は聞かないで下さい」彼女は訴へる様にかう言ひ添へた。

「ぢや、何だつてニュートンの家を出て來たのです？ この家が駄目だとすれば、外に二人の會ふ場所はないではありませんか」

さう聞いて、ロバアタの考へはまた迷つた。彼等のかうした關係は、明らかに因襲の鞭を度外視しなければならぬのだ。だが、それがどうして許せよう？ 彼女は、頑強に首肯かなかつた。それは餘りに奔放過ぎ、餘りに不道德すぎる。それは悪なのだ。

「私は行く處があると思つてたんですの」彼女は弱々しげに、宥める様に口を切つた。「以前、土曜や

日曜に出掛けて行つたやうに」

「でも、これから、土曜や日曜に、何處へ行くつもりなんですか？ 何處もみんな閉つて居ますよ」

ロバアタは再び、説明し難い困惑に陥つて了つて、「あゝ、一體私はどうしたらいいのかしら？」と空しく叫んだ。

「いや、そんな事は何でもないぢやないですか。あなたがさう仕様と思ひさへすれば、あなたの心持一つでどうにでもなるのに、あなたがさうしようとしなだけのことぢやないですか」

彼女はそこに立ち盡した。夜風に翻られて、木の葉がかさく〜と鳴つた。二人を結び付ける難問題。彼女は長い間それを怖れてゐたのであつたが、今やそれが明らかな姿を現はして來てゐるのだつた。自分の受けた薰陶に照して、少しも疚しい思ひがなく出来る事だつたら、彼女は今でもクライドの意の如くに振舞つたであらう。だが、彼女の心の中の鬭争は、さう簡單には片づかなかつた。時には、彼女の道徳的社會的教養に反しても、彼の言葉に承諾を與へ様かと傾いて行つた。だが、彼女は直ぐまた、さうした不遜な不自然な考へを斥けやうとした。而も、さうした強い自制心を持ち乍らも、クライドを慕ふ心に驅られて、只、優しく訴へるやうに振舞ふだけであつた。

「出来ませんわ。私には出来ませんわ。出来ればさうしますけど、私には出来ませんの。さうする事

が決して正しい事だと思へるんですもの。自分で出来る事ならやりますけれど、私には出来ないんですもの。彼女は、闇の中に浮んでるクライドの青白い顔を見上げて、彼が彼女の心の方へ動いて来て居るかどうかを讀取らうとした。だが、かうした明らかな拒絶を受けたクライドは、只いらだたしい思ひに悩むだけで、氣持は少しも變つて居なかつた。以前、ホルテンス・ブリッグスに引ずられ乍ら、彼の受けた様々な痛手と、今の此の悩みとは、相通する處があると思つた。彼は、もうこれ以上、かうした事に堪へ得なかつた。結局、さうする事が彼女の意向であるなら、自分には構はずに、只さうさせるだけの話だ。今日の彼には、澤山の娘をもににする事が出来るのだ。しかも、その娘達は、彼女よりも遙かに彼の意の儘になるのだ。

突然クライドは、苛だ、しげに肩を聳やかして、「ちや、あなたがさう考へてるんなら、それで結構です」と言ひ乍ら、つと後を向いて歩き出した。ロバアタは、呆然として、其處に立竦んでしまつた。「どうか行かないで、どうか行つて了はないで下さい」彼女は突然、悲しげに叫んだ。自分の反抗心や勇敢さが、遂にかうした深刻な悲しい變化を來たした事に堪へ忍び乍ら。「行つちまつては嫌。私こんなにあつて居るんですもの。私だつて出来る事ならしますわ。ねエ、あなた」

「いや、そんな事は、あなたが言はなくても解つてます」(彼がかうした態度をとつたのは、ホルテンスやリタとの經驗に依つたのであつた) 彼はロバアタの手から振切る様に身體を離して、忽ち闇の中に消えて行つた。

ロバアタは、此の思ひ掛けない成行にすくみ上つて「クライド」と叫んだ。出来るならば、もう一度頼んで見様と思つて、少し計り彼を追掛けて見たが、彼は歸つて來なかつた。今は彼女も、彼を引返へさせるより方法がないと思つて、彼を追つて走り続け様としたが、突然また立止つた。自分が哀願し、懇願し、屈從しつゝある事に、氣付いたからである。彼女の中に湧き起つた因襲的な訓練が、こんな身落してはならないと思はせたからであつた。今や、彼の美しい顔も、美しい手も、美しい眼も、彼女の側に居なかつた。彼女は、因襲の力と、彼と別れたくない思ひとの、此の二つの物に挟まれて、進む事も退く事も出来ない破目になつてゐた。

苦痛に訶まれて、黙つて立つて居る彼女の唇は、青ざめてゐた。咽喉に登つて來るクライドの名前さへ、聲に出せなかつた。彼女は只、心の中で「あゝ、クライド。行つちまつては嫌。行つちまつてはいや」と思ひ續けて居た。だが、彼の足音は段々と遠のき、段々と低くなつて、やがて消去つてしまつた。

これこそ彼女の愛の、最初の生臭い血祭りであつた。

二十一

その夜のロバアタの心持ちを描く事は容易でない。此處には、眞實で痛々しい戀があつた。しかも此の眞實の痛々しい戀は、若い者にとつて、抵抗し難いものであつたからである。のみならず、クライドの此の土地に於ける物質的、社交的地位の高さが、一層彼女を苦しめる事になつた。それは、クライドには無關係に、只周囲の憶測と噂さとして築き上げられたものであつたが、しかも尙ほ彼女はそれを信じてゐた。しかも彼女自身の家庭はと言へば、彼女の現在の地位と同様に、不幸な頼りないものであつた。而も今、クライドは、彼女の兩親が許し得ない厄介な怖ろしい自由と親しみを、要求し始めてゐるのではないか。自分はどうしたらいいだらう？ 何と言つたらいいだらう？

彼女はゆつくりと着物を脱いで、そつと舊式な寢臺に潜り込んだが、その暗い部屋の中で、そつと自分自身に言つてゐた。「いや、そんな事をしてはいけない。そんな事はしたくない。私には出来ない事だ。そんな事をすれば、私は悪い娘になつて了ふ。たとひ、その爲めに嚇されても、あの人が去つて了はれても、私にはそんな事は出来ない。そんな事を求めるあの人が恥ぢたらいいのだ」だが、同

時に、現在の此の境遇で、他にどうしたらいいのだとも考へてゐた。成程、クライドが言つた様に、人目に立たないで行ける場所は、もう殆んど無さうであつた。何と言ふ不當な會社の規則だらう。しかし、その規則がないにしても、二人の事を聞いたら、グリフィス家の人達は、クライドが不埒な事をして居ると思ふだらう。ニュートン夫婦だつて、ギルピンの家の人だつて、さう思ふだらう。それを彼等に知らせる事は、彼にとつても彼女にとつても不利益な事だ。あの人の不利益になる様な事は、彼女には出来ない。——決して出来ない。

此の點に就て、彼女が思ひついた一つの事は、別の工場に働き口を求めようかと言ふ事であつた。さうすれば、彼が訪ねて來た處で、問題は小さくなると思つたが、しかしそれは、彼に一日會へないで、唯夜だけ會ふ事を意味してゐた。しかし、それでも、毎晩會へるとは言へなかつた。それを考へた彼女は、他の工場に移る事もよさねばならなかつた。

彼女は、夜が明けて工場に行つて、またクライドに會ふ事を考へた。工場で會つたクライドが、彼女に話し掛けもせず、見向きもしなかつたら、どうしようかと思つた。堪らない！ 怖ろしい！ 嫌な事だ！ クライドの無頓着な冷たい幻が、寢て居る彼女の前に立つてゐる氣さへした。

彼女は立上つて、部屋の眞中に下つて居る、眞白い電燈の丸笠を見上げてから、部屋の隅の衣裳棚の

上に掛つてゐる鏡の前に行つた。彼女の眼の下には、既にもう黒い輪が出来てゐるやうな気がした。彼女は途方に暮れた様子で頭を振つた。あの人はそんな人ではない。そんなに残酷な人だらうか。あの人の要求する事が、どんなに困難で不可能だかを知つて呉れさへしたら！ 早く明日が来て、もう一度あの人の顔が見られたら！ 早く明日の晩が来て、もう一度あの人の手を把り、あの人の腕が自分を抱いて呉れたなら！

「クライド、クライド」彼女は聲に出して言つた。「どうぞ、私に、そんな事を爲さないで——ねエ爲さないでせう？——あなたには出来ないでせう？」

彼女は、部屋の真中の小さいテーブルの前にある古ぼけた椅子に腰を下した。机の上には、サタデー・イーブンニング・ボーストだの、ムンゼイ誌だの、通俗科學雜誌だの、幼年園藝雜誌だのが置いてあつた。彼女は暫く椅子の上で頬杖をついて居たが、次々に起つて来る苦しさをまぎらせ様として、寢床の上の寢巻を取上げたり、種のキャタログを開けて見たりしたが、それも直ぐに止めて了つた。「いや、いや、いや。そんな事は無いわ。屹度無いわ」だつて、何度も何度も、狂人の様に彼女を愛して居ると云つたのではないか？ あんなに度々、二人で一緒に、面白い處へ行つたのではないか？ 彼女は何時の間にか、無意識に寢臺の端に腰掛けて、両手で顎を支へてゐた。と、また、鏡の前に

行つたり、いら／＼と暗い外を見入つたりして、まだ夜は明けないかと思つた。やがて六時になり、六時半になつて、夜が明け、着物を着替へる時間になつて来たが、彼女はまた椅子に腰掛けたり、寢臺の端に坐つたり、鏡の前に立つたりしてゐた。

併し、かうして彼女が到達した一つの結論は、何れにしても、クライドと別れてはならないと云ふ事であつた。何とかして、別れさせない様にしなければならぬ。屹度、彼に愛し続けさせる様な言葉か方法かあるだらう。其爲には、たとひ——たとひ、此の室か、どこかの他の室に彼を泊らさねばならなくなつても、彼と別れる事は厭だ。どこかに別の室を借りて、兄弟だとか何とか云つて、そこで彼と逢ふ様にしてもいいのだ。

併し、此の時クライドを支配してゐた氣持は、彼女のと全く別の性質のものであつた。それを正確に充分に理解する爲には、彼があのカンサス市で、ホルテンス・ブリッグスと無駄に踊り廻つた事を考へてやらねばならない。更にまた、リタを思ひ切らねばならなかつた事にも、考へを及ぼしてやらねばならない。無論、今度の場合は先の場合とは事情が違つてゐたし、ホルテンスに對して臨んだ様な道徳的權威を以て、ロバアタに臨む譯には行かなかつたが、然も尙、娘達と云ふものは——どの娘達でも——皆頑固で、自分本位で、男の上手に出て、色々の事を男にさせる癖に、自分では何の酬い

もしないと云ふ事實だけは、變らなかつたからである。それに、ラッタラアも絶えずさう云つてたではないか。——女の件に關しては、クライドは多少馬鹿だ。餘りに容易に、餘りに熱心に自分の手の中を示して、直ぐに彼が惚れてる事を覺られて了ふから。クライド程の容貌——「元手」——を持つて居る男が、何だつてあんなに女を追つかけ廻すんだ。——と、ラッタラアは云ひ云ひしたものである。此の言葉が、當時、彼に深い印象を與へてゐた。ホルテンスやリタに對して失敗した彼は、其の失敗の故に、今、益々逆上せ上らされて居るのだつた。然も今、此處で、再び彼は、ホルテンスやリタとの場合と同じ様な失敗を、繰り返さうとしてゐるのだ。

併し、同時に彼は、自分が今無理な關係を要求してゐる事を覺つて、それが將來の危険を醸す事も自ら考へない譯ではなかつた。彼が若し、彼女が罪惡としか思ひ得ないものを要求するならば、將來になつて、彼が無視する事の出来ない云ひがかりを、彼女につけさせる事になりはしないだらうかと、朦朧に考へたからである。何れにしても、云ひ出した者は彼であつて、彼女ではなかつたと云ふ事になる。其の結果として、今後どんな事が起るにしても、彼が與へ様としてゐるもの以上のものを要求する立ち場に、彼女を置く事になりはしないだらうか。かうした氣持の背後には、彼女とは結婚し度くない——かうしたえらい親戚の前で、彼女と結婚する譯には行かないと云ふ氣持が、まだ蟠か

まつて居たのだ。従つて彼は、此の要求を進める可きか止す可きかに迷つてゐた。然も進めるとすれば、彼は將來に於ける何かの云ひがかりを避け得るであらうか？

無論彼は、かうした氣持をそれ程はつきり感じて居た譯ではないが、其時の彼の氣持の性質は、大體かう云つたものであつた。然も、ロバアタの性格的、肉體的の魅力は、此の要求を押し通す事の危険を自ら暗示されて居乍ら、然も尙、彼女が若し彼女の室に入れて呉れなければ、彼女とはもう絶縁だ——と自ら呟やかねばならない程、強いものであつた。それは彼女の全部を得たい慾望であつた。

それが結婚問題を含めるか含めないかに拘らず、兩性の最初の結合には必ず起つて來る此の鬭争が、翌日の工場でも戦かはれた。勿論、どちらも一口も口には出さなかつた。併しクライドは、烈しくロバアタを戀してゐる自分を知つて居乍ら、尙其の生れ付きの利己的な野心深い性質から、此の際、凡ての衝動を押へて居やうと思つたからである。彼は、彼女の方から讓歩して、許しを求め様としない限り、感情を害した顔をして、今後絶対に交際をしない決心をした様な態度をとらうと思つた。

その結果、その朝捺印部に現れた彼は、昨夜の出來事には殆ど無關係な様な事柄に、すつかり心を奪はれて居る様な態度をして居た。だが、かうした態度は、結局自分を敗北に導くに過ぎないとも考へられるので、内心多少の憂鬱と恐怖とを感じてゐた。と云ふのは、遅れて這入つて來たロバアタ

は、多少青ざめてほんやりしては居たが、然も尙平常通り可愛らしく、活潑で、彼の結局の勝利を確めさせるに足りなかつたからである。併し、彼女の性質をすつかり呑み込んで居ると思つて居るクライドは、頓て自分に服従するだらうと云ふ思ひに、僅かに支へられて居たのだつた。

彼は、彼女が見て居ない時には、絶えず彼女の方に目を注いでゐた。彼女の方でも、絶えず彼に目を配つて居たが、始めの内は、何時でも彼が見て居ない時だつたが、後には彼の目が彼女に集つて居るに違ひ無いと思つて満足した。併し、それでも、クライドが彼女を認めた様子は、彼女には見えなかつた。然も、彼女を烈しく失望させた事には、クライドは、只に彼女を無視して居る許りで無く、他の女工に氣を向けて居る様子を、ひどく露骨ではないまでも、こちらに解る様に見せて居る事だつた。それは、二人がかうした仲になつて以来、全く始めての事であつた。かうした女工達は、何時でもクライドに興味を持つて居て、彼が何かの素振りを見せるのを待ち受けて居るのだ。そして、彼の云ふ事ならば何でも従はうとして居るのだ。

今、クライドは、ルザ・ニコフオリツチの側に寄つて、其の獅子鼻の肥つた顔を見詰め乍ら、仕事の用事では無いらしい何かの話を乍ら、互に笑つて居た。頓て間も無く、彼はマルサ・ボウダルの側に寄つて、其のフランス人らしい肩や、裸體の腕に寄り添つて居た。其の肉感的な外國人臭い様

子は、確かに多くの男の人を引き附けるに違ひない。然も其の女とも、クライドは戯け様として居るではないか。最後に彼が寄つて行つたのは、あの肉感的な面白さうなアメリカ娘のフローラ・ブランドであつた。彼女に對して、クライドが之まで絶えず目を掛けて居た事は、ロバアタも既に知つて居た事だつた。併し、たとひさうであつても、彼女は曾てクライドが、かうした女に興味を持つ様になるだらうとは信じ様とした事が無かつた。さうだ。クライドに限つてそんな事は無い。

だが、クライドは、彼女の方はちつとも見て呉れなかつた。他の女工達とはあんなに愉快さうに話したり笑つたりして居乍ら、彼女には一言言葉を掛ける時間さへ與へて呉れなかつた。何と云ふひどい人だらう！ 何と云ふ慘酷さだらう！ あゝした流し眼で、公然と彼を彼女から奪はうとする之等の娘達を、彼女はどんなに輕蔑した事だらう。あゝ、怖い！ 屹度クライドは、すつかり怒つて居るのだ。それで無ければ、彼があんな事をする筈が無い。然も、自分達二人は、あんなにも色々な事を——あの戀、あの接吻を——して來たのでは無いか。

かうして時間が過ぎて行つたが、二人とも苦しかつた。自分の夢想到熱し易く、野心家特有の性急さを持つて居る彼には、殊にさうであつた。彼は刻々、ロバアタを失はねばならないと言ふ思ひに苦しめられた。彼女を取り戻すためには、彼女の望みに従ふより仕方がないと言ふ思ひに苦しめられた。

一方彼女は、クライドを自分の室に入れるかどうかの問題よりも、(此の點は、最早彼女には大した問題になつて居なかつた)むしろ、さうして彼を自分の室に入れた後、クライドが普通の用心深い社交的交渉で満足し得るかどうかの問題で、胸を裂かれる程に苦しんでゐた。

それだけで、彼の氣持を繼なげ止めて置く事が出来るだらうか？ だが、それ以上の事は出来ない——斷じて出来ない。然も今彼は他の女工にも氣がある様な顔をして居るし、あんなに無頓着な顔をして居る。其の刻々の苦しさに堪えられなくなつて來たので、彼女は三時頃になると休憩室に行つて持ち合せた鉛筆で短い手紙を書いた。

「クライド、どうぞ、そんな事はお止しになつて下さい。どうぞ、どうぞ。わたしの顔を見て、話し掛けて下さい。昨晩は悲しうございました。ほんたうに堪らなく悲しうございました。今晚出來れば、八時半にエルム街の端で、お目に掛りたうございますが、如何ですか！ お話し度い事がございませう。どうぞ入來して下さい。あなたが怒つて入來しやる事はわたしにも解つて居ますが、どうぞ、わたしの顔を見たり、話し掛けたりして下さい。わたしを悲しませないで下さい。わたしはこんなにあなを愛して居るのです。お解りになつてゐるでせう。」

あなたの悲しきロバアタより

彼女は阿片を求める者のやうな氣持で、その紙を疊んで部屋に歸つて行き、クライドの机に近づいた。その時彼は、机にうつむいて、何かの書類を見てゐたが、彼女は通り掛りに、その紙きれを手早く彼の前に落した。彼は、苦痛と不安と不満との混じつた黒い眼を擧げたが、その紙きれとロバアタの後姿とを認めて、直ぐに或る満足と喜びとに、心が弛むのを感じた。彼は披いて讀んで見た。忽ち或る温かい、しみぐとした光が、彼の全身に満ちて來た。

ロバアタは、自分のテーブルに歸ると、誰かに見られはしなかつたかと、心配さうに邊りを見廻したが、クライドがまともに彼女の顔を見て、微笑をさへ浮べて、彼女に首肯して居るのを見ると、これ迄止つてゐた全身の血が、急に動き出すのを感じた。彼女の魂の乾いた沼——悲しみを湛へた河と湖とが、凡て生と愛の力に溢れて來るのを感じた。

彼が彼女に會つて呉れるのだ。今夜會へるのだ、彼女を抱きかへて、また接吻して呉れるのだ。彼女は、彼の眼に見入る事が出来るだらう。もう喧嘩などはしない。決してしない！

その夜からの、更に親しい新しい接觸の驚きと喜びよ！ 反抗も消え、疑念も消えた。凡ては空しい闘ひであつた。彼等はお互ひに、相手がそれを望んでゐた事を知つてゐたのだ。彼等は、熱と恐怖との交錯した思ひで、近づきつゝある夜を待ち望まねばならなかつた。ロバアタがどれ程悩み、どれ程反抗しようとも、クライドには既に堅い決心があつた。無論彼とても、悪と汚れと裏切りの感じを持たないのではなかつたが、而かも、一度經驗すると、或る狂暴な痙攣的な喜びに、二人は動かされずた。だがロバアタは、その前に、どんな事があつても、(その接觸の自然的な結果について、彼女は考へてゐたのだ) 彼女を見棄てないと言ふ事を確かめさせた。男の助けを借りなければ、彼女にはどうする事も出来ないと思つたからである。しかし、その時でも、結婚の事は露骨には言はなかつた。自分の欲望に渴いて居るクライドは深くも考へないで、決して彼女を見棄てない事を誓つた。彼は、結婚の事などは何も考へて居なくせに、その點では、彼に信頼して呉れていゝと言ふ風に言つた。晝の間、様々に思ひ悩んで、自分の罪を責め立てるロバアタも、夜になつて自分の身體を任せる時、その時だけは、凡ての疑念が消え去る思ひがした。やがてその喜びが狂暴に募つて来る頃には、日の暮

れるのが待ち遠しい思ひで、此の秘密な熱ッほい夜の來るのを待つた。

クライドの氣持も、ロバアタのそれと大した違ひはなかつた。その兩親から、結婚の聖域外で此の事を冒すものは、放蕩者、亂淫者だと、幾度となく教へ込まれて來た彼は、彼等の今の行爲を、怖ろしい罪だと感じて居たのだつた。しかも、ロバアタは、苛々と空しい將來を覗き込んで、何時どうして、クライドの心が變るかも知れないと疑ひ悩んで居るのだつた。だが、夜が來ると、彼女の氣持も變つて、彼女はまた男に會ひに行く。——夜更けてから、こつそりと二人で灯の消えた彼女の部屋に忍び込む爲めに、狂暴な若さの熱情の爲めには、それは世にも稀な樂園であつた。

様々な疑惑や恐怖を持ち乍ら、かうして突然ロバアタを意のままにする事が出來たクライドは、生れて始めて、自分が世間並みの男になれた、——始めて本當に女と言ふものを知り始めた事を感じた彼は、自らかう言ひたけな様子をしてゐた——「見ろ。俺は最早、一二週間前の、あの無經驗な小僧子ではないぞ、俺はもう押しも押されもしない男一匹だ。人生に就いて、或る事を知つた人間なのだ。俺の周囲の氣取りくさつた若者や、巫山戯まはす娘共が知つて居る事で、俺の知らない事が何處にある？ 俺が若しやる氣になれば、俺に出來ない何があるのだ」リタの事は別としても、ホルテンス・ブリックスが與へたあの觀念——女の事に關しては、彼は駄目な人間だと言ふ觀念が、凡て嘘だつた

事が、彼にもこれで證明された譯だつた。様々な失敗や困難にも關らず、彼も遂にドン・チユアンやロザリオの様な若者になつた譯であつた。

しかも今、ロバアタが、こんななまで彼に身を捧けて居るのだとすれば、他の女だつて矢張りさうではないだらうか？

そこで彼は、これ迄とは打つて變つて、昂然として道を歩く様になつた。無論グリフィス家の人達は、彼に見向きもして呉れなかつたが、彼は絶えず鏡に覗き込んで、曾つて覺えない自信を感じるのであつた。實際今、自分の將來が凡てクライドの意志に掛つて居ると感じて居るロバアタは、殆んど絶えず彼の機嫌を探つて、出来るだけ親切に、出来るだけクライドの便利になる様に、努めて居るのだつた。事實、彼女の人生觀から言つても、彼女は今、彼一人のものである可きであつて、妻が夫に従ふ様に、彼の望みの儘に従ふ可きであつたのだ。

暫くクライドは、凡てを忘れて、此の戀に没頭して居た。こんな事をして居る中に、何かの間違ひが起るかも知れないと言ふ懸念も、全然なくはなかつたが、そんな事を深く考へて見る氣にはなれなかつた。彼には今、ロバアタがあるのだ。二人の關係は、彼等の見た限りでは、全くの秘密になつて居る。今や、此のまがひもの、新婚旅行の喜びは、その高潮に達して居た。温かく、輝かしい十一月

と、十二月初旬の日々が、夢の様に過ぎて行つた。それは、猥雑な貧弱な貧乏な、その日暮し生活に於ける、一種の恍惚境であつた。

さて一方、グリフィス家の人達は、六月中頃以來此の町を去つて居たが、クライドは絶えず彼等の事を思ひ浮べて居た。彼等の大きな邸宅は、何時通つて見ても扉が閉つて居て、偶に庭作りや、運轉手や召使ひの姿が見えるに過ぎなかつたが、クライドにとつては此の家が彼の神殿の様なものであつた。それは彼が何時かは到達するかも知れない高さの、一つの象徴であつた。彼は今でも、將來彼等と同等な豪者を盡せる身になる望みを斷念して居なかつたからである。

だがグリフィス家の人達の動靜や、そのライカーガス外での社交的活動に就いては、彼は唯、二つの地方新聞の社交欄に出て來る事しか知らなかつた。彼は、ロバアタと二人で何處かへ行つて居る時でさへ、かうした記事を読んで居るでは、ギルバートが大きな自動車を飛ばして居る様子や、ベラやベルチンやソンドラが、ダンスをしたり、月夜に小舟を浮べたり、テニスをしたり、何處かへ散歩したりして居る様子を想像した。しかも今、ロバアタとかうした關係になつて居る事を思ふて、彼は時に堪へ難い苦しきを感じる事もあつた。何と言つてもロバアタは、一介の女工ではないか、土に塗れて働く百姓の娘で、自分の生活め爲めに、自分で働かねばならない女ではないか。しかも彼は——若し運さへ

向いて来れば—— 彼は此の町に夢見てゐた事は、これでもうお終ひになるのだらうか？

かうして暗い氣持になつて居る時、殊にロバアタがすっかり彼の物になつて了つてからは、彼の氣持は時々、彼等の方に走つて行つた。彼は、ロバアタが自分に不釣合ひである事を思つた。少く共、グリフィス家の人間としては、不釣合ひであると思つた。だが、同時に、彼の氣持は、ロバアタにも歸つて行つた。彼を惹きつけてゐた彼女の美しさや優しさや快活さは、未だ決して失はれて居なかつたし、その態度も魅力も、享樂の對照として申分がなかつたからである。

しかも、グリフィス家やその仲間の人達が、此の町に歸つて来て、ライカーガスの町が再びあの企業と社交とに賑ひ出して來ると、彼はまた烈しく、その方に心を奪はれて行つた。ワイケアジ街の、あの美しい家並みよ！ それは活動と生活との、異常の感覺で人の心をそつて居る。あゝ、彼が若しその中に入れるのだつたら！

二十三

丁度その頃、十一月の或る夕方、工場への行き歸りに毎日通り馴れてゐるワイケアジ街を、クライドが通つて居ると、クライドにもグリフィス家の人達にも、思ひ掛けない様な事件をつぎつと生

んだ一つの出来事が起つた。その頃の彼は、若さと大望の喜びに満ちて、鼻唄でも歌ひたい氣持になつてゐた。彼にはい、地位があつた。彼はそこで尊敬されてゐた。部屋代や賄の他に、少く共一週十五弗の金を、自分やロバアタの爲めに使はねばならなかつた彼は、グリーン・デビッドソンや、ユニオン・リーグに居た程金持ではなかつたが、しかも一方に、貧乏な家族に煩はされる必要がなく、他方では、孤獨に悩む必要もなかつたので、酷く幸福であつた。しかも彼には、密かに身を捧けて居るロバアタがあつた。有難い事には、グリフィス家の人達は、何も知らないらしい。無論何かの問題が起れば、彼等の耳にも入る譯であつたが、元々、取越し苦勞をしない彼は、そんな事を考へて見様もしなかつた。

もとよりグリフィス家の人達や彼等の友人達は、クライドを社交的に認めようとはしなかつたが、さうした社交界に關係のない人や、彼を知つて居る人達は、次第に彼を認める様になつて來た。丁度此の日にも、此の會社の副社長格の重要人物、ルドルフ・スミリー氏が、彼に話しかけて、酷く懇切な調子で、若しクライドがゴルフをやるならば、此の春、アモスキーグに這入つたらどうかと奨めて呉れた。それは、此の町から五六哩離れたところにある。或る重要なゴルフ俱樂部で、スミリー氏が今や、クライドの社交的可能性を認め始めた事を示すものであつた。少くとも、工場にとつては大切

でなく共、グリフィス家にとつては大切な人間である事を、認め始めたらしかつた。

それに加へて、夜夕食後、十一時と言ふ早い時間に、ロバアタの處に行つてもよくなつたと言ふ事が、彼を酷く嬉しくさせて居た。彼等はかうして、度々祕密な冒険を冒して居る中に、知らずく大膽になつて来て居たのだつた。一向、誰にも認められない彼等は、此の調子ならば、旨く隠しおほせるだらうと思ふ様になつてゐた。たとひ、誰かに見られたにしても、クライドの兄弟だとか従兄弟だとか言へば、その場の疑ひを解く事が出来るわけだつた。その後になつて、若し見破られる心配があるならば、ロバアタが他の處へ引越せばいい。——色々言ひ合つた末に、彼等はさう相談を決めたのであつた。

しかし此の時、彼の心を全然他に向けさせる様な一つの出来事が起つた。その時彼は、此のワイケアジイ街でも特に素晴らしい或る家の前を通り掛つたが、それが誰の家であるかは、ちつとも知らなかつた。見ると、其處には大きな鐵の門があつて、中には芝生が敷きつめられ、往來の薄暗い光に照らされた處を見ると、あちこちに落葉が掻き集めてある様子だつた。その物靜かな、取澄した、整然とした庭の様子の中に、無限の富と威嚴とが藏されて居る氣がした。彼が表門に近づいて行くと、その前に一臺の大型自動車、扉を閉めたまゝで置いてあつたが、その中から出て來た運轉手が扉を開

けたので、クライドは直ぐに、ソンドラ・フィンチュレーがその中に居るのを知つた。

「デビッド、裏門に廻つて、ミリアルにさう言つておくれ、私はトランバルの家の晩餐に行かなくちやならないから、お前を待つて居られないつて、九時には歸つて來るからね。若しミリアムが居なかつたら、此の手紙を残して來てお呉れ。いゝかい、急いでだよ」その聲や様子には、主人らしい處があつたが、その氣輕らしい點は、此の春の時と同様に、クライドの心を突刺した。

だが、その時、ギルバート・グリフィスが此方に近づいて來るのだと思つた彼女は、直ぐに呼び掛けた。まア、御散歩？ 一寸待つて下されば、あなたも此の自動車に乗れてよ。今、デビッドを使ひに出した計りですけど、直ぐ歸つて來ますわよ」

ソンドラは、グリフィス家の富や聲望と共に、ペラに興味を持つてゐたが、ギルバートはちつとも好いて居なかつた。最初の中は、ソンドラも、彼と友達になる氣があつたのだが、ギルバートが何時も彼女を無視するので、とうとうその誇りを傷けられたのであつた。虚榮と自惚れに満ちて居る彼女にとつて、それはもう最後のものであつた。彼女には彼を許す事が出来なかつた。他人の自我を全然認め得ない彼女が、傲慢で冷靜で自惚れの強いギルバートを認め得ないのは、當然の事だつた。彼女に言はせれば、ギルバートは餘りに自分を買被り過ぎて、その虚榮の爲めに、誰とも附合へない男だ

と言ふのだつた。「ふム！ 唐變木！ 誰があんな奴の事を問題にするもんか。あれで自分では、此の町の有力者か何かの積りなのよ、自分でロツグ・フェラーかモルガンかの様に思つてるんだからい、わよ。しかしあんな男の何處が面白いのよ。私はべラは好きだわ。可愛い子ですもの。だけど、あのお洒落と來たら堪らないわ、あれでも相手にして呉れる娘が欲しいんだらうけれど、私だつたら御免を蒙むるわ」ギルバートの色々な噂を聞いて、ソンドラが自分に註釋して居る事は、大體此の通りだつた。

ギルバートはギルバートで、絶えずべラからソンドラのやつてゐる事を聞いて、かう言ふのが常だつた。「何だ、あの小娘が、何處にあんな娘を何とか考へる奴が居る者か。生意氣な鼻たれつ子のくせに」

しかし、此のライカーガスの狭い社交界では、彼等はお互ひに、仲間として扱ふ事が殆んど強制的に必要となつてゐた。彼女がギルバートと見て、直ぐに聲を掛けたのもその爲めであつた。しかし、彼女が自動車の扉口から身體をすらして、彼の爲めに座席を造つて呉れるのを見ると、クライドはその思ひ掛けなさに、石の様に堅くなつて了つた。すつかり度を失つた彼は、自分の聞いた事が間違ひではないかと思ひ乍ら、近付いて行つたが、その物欲し相な嬉し相な様子には、系統のい、飼犬の様な

處があつた。

「やア、今晚は」彼は帽子をとつてお辭儀をし乍ら叫んだ。「如何で御座います？」

言ひ乍ら彼は、これが數ヶ月前、伯父の家で會つた。あの素晴らしい美人のソンドラだと、確かめる様に、思つてゐた。此の夏の間、毎度新聞で見たあの娘なのだ、而かも今、こんなに可愛らしい顔をして、美しい自動車の中から、自分に呼び掛けてゐるのではないか。しかしソンドラは、その瞬間に、男がギルバートでなかつた事を認めて、すつかりまごつて了つた。どう言つて此の間違ひを言ひ抜けたものだらうかと思つたが、とうとうかう言つた。

「まア、御免なさい。あなたクライド・グリフィスさんでしたのね。私、ギルバートさんだと思ひましたのよ、だつて、薄暗くてよく解らなかつたのですもの」

彼女がまごくと困つて居る様子を見て、クライドにも彼女の間違ひが解つたが、それは彼にとつても、彼女にとつても、餘り有難い間違ひではなかつた。そこで、今度は、クライドの方がまごくと、早く歩き去らうと思つた。

「あ、御免なさい。いえ、何でもないのですよ。僕にはお邪魔をする氣はないのですから。僕は只……」言ひかけて、クライドは、顔を赤めて歩き去らうとした。

しかし、ソンドラは直ぐ、クライドが彼の従兄弟よりも立派で、遙かに遠慮深い上に、彼女の魅力や社会的地位にひどく動かされてる事を見てとつたので、優しい微笑を浮かべて、言ひ出した。「でもよござんすのよ。お這入りにならない。何處へでもお送りしますわ。ねえ、お乗んなさいませよ。私随分喜んで御送りしますわ」

此の時のクライドの様子に、自分が彼女に認められたのは間違ひの爲めであつた事に氣付いて、何となく失望したやうな、氣持を悪くした様な點の見える事を、ソンドラも氣付いたのであつた。彼の眼はしほくとして居たし、その唇には、何處か、悲しさうな弱々しい微笑が浮んでゐた。

「いえ、勿論、あなたにさういふ思召があるのですしたら、僕も喜んで乗せて戴きますけれど、事情は僕もよく解つて居るので、これで結構で御座います。どうぞ御遠慮なく、僕は只……」彼は半ば行きかゝつたが、直ぐに振切るわけに行かない程、彼女に氣持を惹かれてゐた。

「ねえ、本當にグリフィスさん、お這入り遊せよ。私、随分嬉しいんですのよ。もう直ぐデビッドが参りますから、何處へでもお連れしますわ。でも、もう一人のグリフィスには、お氣の毒ですわね。だつて、あなたがギルバートさんでなければ、お呼びしなかつたのですもの」

彼は鳥渡黙つてゐるが、やがてふらふらと車に入つて行つて、彼女の隣りに坐つた。彼のひとと爲り

に興味を持つて居る彼女は、直ぐに彼の顔を眺め始めて、ギルバートでなくつてよかつたと思つた。彼女は、クライドの顔をもつとよく見たかつたし、クライドにも、自分の美しさを見せたかつたのでスワッチをひねつて、天井の明りをつけた。やがて運転手が歸つて來ると、彼女はクライドの行く先を訊ねた。彼女の住んで居る町と、餘りにかげ離れて酷い町だつたので、クライドは澁々と自分の家を知らせた。自動車が走り出した。クライドは、此の短かい期會を利用して、彼女にいゝ印象を與へたい思ひで、いらくしてゐた。これが機會になつて、彼女がもう一度彼に會ひたいと思ふやうにならないとは、誰にも言へなかつたからである。それ程彼は、彼女の世界にあくがれて居たのだ。「かうしてお送りして戴くなんて、本當に有難う御座います」彼はソンドラの方を向いて笑ひ乍ら言つた。「従兄弟を呼んでいらつしやるのだとは知らないものですから、ついお側に行つて了つたのですけれど」

「いえ、もういゝんですの。その事は言はないで頂戴」ソンドラは甘ツたるい聲で、抜目なく答へた。「私が間違つたので、あなたがお間違へになつたのではないんですもの。でも私、間違つていゝ事をしたと思つてますわ。ギルに乗つて貰ふより、あなたに乗つて貰つた方がよつほどいゝんですもの。あの人と私とは、餘り仲善ではありませんのよ。會ふたんびに喧嘩計りしてゐるんですもの」一時の

狼狽から快復した彼女は、女王の様にそり返つて、クライドのよく整つた顔立ちを眺めてゐた。随分やさしさうな、笑つてるやうな眼を持つてる男だと、彼女は思った。ベラやギルバートの従兄弟だから將來にも望みのある男だらうとも思つた。

「それはお氣の毒で御座いますね」彼は、自信のある、毅然とした様子を見せようと努め乍ら、固くなつて言つた。

「でも、大した事ではありませんのよ。一度喧嘩をしたと言ふだけですもの」

彼女の前に出て、内氣におすおすして居る彼を見ると、ソンドラは容易に繰れる様な氣がして、嬉しかつた。「あなたは未だ伯父さんの處で働いていらつしやいますの」

「え、さうです」クライドは、其處に重大な違ひが出て來ると思つて、急いで答へた。「今の所、あの工場の、或る部屋を受持つてます」

「まあ、わたし、ちつとも知りませんでしたわ。だつて、あれ以來、ちつとも御目に掛らないんですもの。随分御忙しくていらつしやる様ですわね」さう云つて、彼を見た彼女の眼の中には「あなたの親戚は、あなたに興味を持つて居ない様ですわね」と云ひたけな表情があつたが、今彼を好きになつてゐる彼女は、さうは云はなかつた。「此の夏も、すつと此の町にいらしつたのでございませう？」

「え、さうです」クライドは呑み込んだ様に簡單に答へた。「さうしなきあならなかつたんです。仕事の都合があるものですから。併し、あなたのお名前は、随分新聞で拜見しましたですよ。あなたの競馬やテニス試合の記事も拜見しましたし、六月のあの花自動車の行列の時にも、あなたを拜見しました。あの時には、ほんとにお綺麗だと思ひましたね。全で天使の様だと思ひましたよ」

其の時の彼の眼には、何か求める様な、讚嘆する様な光が表れて居たが、それがすっかり彼女を引き附けた。何と云ふ氣持のいゝ青年だらう。ギルバートとは段違ひだ。彼女は、自分が只氣まぐれに興味を持つて居るに過ぎないのに、相手がこんなにも露骨に絶望的に引き附けられて居るのを見て、多少氣の毒になり、従つて彼に親切にしてやらうと思つた。のみならず、クライドがすっかり彼女に參つて居る事をあのギルバートが知つたら、どんなに怒るだらうとも思つた。クライドを誰か引き立て、やつて、彼（ギルバート）以上に遇してやつたら、ギルバートはどんな顔をするだらう。さう考へると、彼女は、面白くて堪らなくなつて來た。

併し、丁度此時、不幸にも自動車が、ピートンの家の前に來て止つた。二人の冒険も之で終りを告げるらしかつた。

「まあ、有難うございませうわ。わたし其の御言葉を忘れませんわ」運轉手が扉を開けて、クライドが

降りて行く時、彼女は抜け目無く笑ひ乍ら云つた。クライド自身も、此の廻り會ひの素晴らしさの爲に有頂天であつた。「あゝ、此處がお宅ですのね。此の冬もつとライカーガスに入來しやるお積り？」
「えゝ、間違ひ無く此の町に居ます。居たいと思つてます」其の最後の言葉に彼は、自分の云ひ度い凡ての意味をこめて居た。

「あゝ、さう、では屹度、何處かでいつか御目に掛れますわね。兎に角、御目に掛り度いと思つてますわ」

彼女は頷いて、誘ふ様な笑ひを浮べ乍ら、手を差し出した。クライドは、馬鹿らしい程切實な思ひで、云ひ添へた。

「えゝ、僕もさう思つてます」

「では左様なら、左様なら」

自動車動き出すと彼女は云つた。それを見送り乍ら、クライドは、之から後、こんなに彼女と親しく話す様な事がまたと有るだらうかと思つて居た。だが、かうしてまた彼女に廻り會はうとは？

然も、始めて會つた時のあの冷淡さに比べて、今日はまた何といふ變り方だらう！

「彼はやがて、望み有りさうに身を返して、だが幾らか物足りなさうに、彼の室に這入つて行つた。」

然もソンドラはソンドラで……走り行く自動車の中で考へてゐた。――何だつてあのグリフィス家の人達は、あんなにあの人に無頓着なのだらう？

二十四

此の遇然の邂逅は、様々な結果を考へさせた。クライドは今、ロバアタとの關係を充分楽しみもし満足もして居たが、然も一度かうして彼女に會ふと、彼の社交の可能性が、其の全局面を彼の眼前に見せて來たからである。然も不思議にも、此の一人の令嬢が、上流社會全體を代表するかのやうに彼には思へたのである。ソンドラ・フィンチュレーのあの美しさ！あの可愛らしい顔、粹な着物、派手で上品な動作！最初に會つたあの時に、彼女の氣を引く事が彼に出來たのであつたら！いや今でもいゝ。そんな事が出來るのであつたら！

實際、クライドには、ロバアタと今の様な關係を結んで居ると云ふ事は、ソンドラの様な娘や、其の代表する世界の引力と相殺する程の重みを持つて居なかつたのである。考へても見るがいゝ。フィンチュレー電氣掃除器會社と云へば、此の地方での最大企業の一つでは無いか。其の高い建物と煙突とは、マホーク河の向ふに、大きく空の一角を劃つて居るではないか。然もフィンチュレーの邸宅と

云へば、ワイケアジー街のあの素晴らしい家並みの中でも特に目立つ、最新式の建築趣味に依つて造られた家では無いが。それはイタリア・ルネッサンスのクリーム色の大理石と、オランダ風の砂石とを巧みに取り合せたものであつて、此の家庭の事が最も多く此の町で噂されるのであつた。

此の申し分のない娘と、もつと親しくすることが出来ることは、彼の長い間の夢想であつた。彼女が彼に好意を持つて呉れて、その結果、彼等の社會に交はる事が出来たら！ 彼もグリフィス家の一族ではないか。ギルバートと同様に、容貌も立派ではないか。ギルバート程の金があれば——その一部分でもあれば、彼だつてちやほやされていゝ人間ではないか。ギルバートの様な着物を着、立派な自動車を持ち廻す事が出来たら！ さうなれば、こんな娘だつて、喜んで彼に近づくだらうし、或は悪に落ちるかも知れない。しかし、今は、たゞ、おとなしく、時の來るのを待つて居るだけのことだと彼は憂鬱に考へてゐた。

畜生！ 彼はその晩、ロバアタの處へ行く氣がしなかつた、彼は何かの口實を設け様と思つた。明日の朝、彼女に會つた時、或る用事で伯父の處に呼ばれたと言はうと思つた。彼の今の氣持では、彼女の處に行きたくなかつたし、行けもしないのであつた。水の様に流れ動いて居る彼の性格としては、此の富と、此の美しさと、此の特殊な社會的地位とが、

かうした結果を齎らさないで居られないのであつた。一方、ソンドラも、かうして會つたクライドの事を考へて居たが、彼女も少からず彼に心を惹かれて居た。殊に彼が、従兄弟のギルバートとは正反對な態度で、彼女に對して居る事が、ソンドラの心を動かした。彼の着物や態度や、彼が口を滑らした様子から察して、彼はソンドラが想像して居たよりも、多少立派な地位について居るのかも知れないと思つた。だが同時に、此の夏の間、ペラやギルバートやミヤヤ、彼等の親達と交際してゐても、クライドの事などは一口も言はなかつた事も、ソンドラは思ひ出した。實際、彼女の聞き得た噂と言へば、只あのグリフィス夫人が、最初の晩、これが彼等の貧しい甥で、夫の親切で此の町に連れて來られたのだと言つた事だけであつた。しかし今、かうして會つて見ると、彼はそんなにやくざな男だとも見えないし、甚しく貧乏して居るとも見えない。

——酷く面白さうな、快活な男で、彼女の様な娘から、眞面目に相手にされる事をはつきり望んで居るではないか。その上に、彼がギルバートの従兄弟である事、——グリフィス家の一族である事が、彼女の心を動かした。

トランバル家と言ふのは、ダグラス・トランバルを中心とする一家族であつて、主人のダグラスは、相當に繁昌する賑暮しの辯護士で、此の地方の投機師であるが、その子供がいゝ上に、彼自身も

機敏で立派な人間である處から、此のライカーガスの社交界に喰入る事が出来て居るのだつた。ソンドラは、此の家に行くや否や、早速その家の二人の娘の姉ジル・トランバルに、今日の事を打聞けた。「私、今日面白い経験をして来たのよ」かう言つて彼女は、たつた今起つた出来事を詳しく話した。食事が済むと、此の事を非常に面白いと思つたジルが、妹のガートルードや、弟のトレーシーに話を聞かせた。

「あゝ、あの男なら僕も中央通りで三四度見掛けましたよ」父親の事務所で法律を研究して居るトランバルも言つた。「まるで、ギルにそっくりぢやないですか、ギル程威張り散らして居るなだけの事です。僕も此の夏、ギルではないかと思つて、二三度お辭儀をした事があつたですよ」「あゝ、私も會つたわよ」とガートルード・トランバルも言つた。「その人、時々縁無し帽を被つてギルバートと同じ様な帯付き外套を着て居ない事？ その人が何時かの土曜の午後、スタークの家の前を通つて居る時、アラベラ・スタークがさう言つたので、ヂルも私も見たことがあるの。ギルよりもいゝ男だと思つたわ」

さう聞いて、いよく自分の判断が確かだと思つたソンドラは、「ベルチンと私とは、此の春、グリフィスの家であの人と會つた事があるのよ。その時には、大變な恥かしがり屋だと思つた」だけだ

ど、今見るととても綺麗だし、眼付きでも笑ひ顔でも、とても優しく可愛らしいのよ」

「おや、まア、ソンドラ」とヂル・トランバルが口を入れた。スネデカー學校の同級生であつた彼女は、誰よりもソンドラと仲善しであつたのだ。「そんな事を聞かせたら、誰かさんが屹度焼持を妬くわよ」

「ギルだつて、自分の從兄弟が自分よりもいゝ男だなんて言はれたら、餘りいゝ氣持はしないだらう」トレーシー・トランバルが調子を合せた。

「あゝ、あいつ」とソンドラが苛々した様に鼻であしらつた。「あの人は、自分で相當なものだと思つてるから、大丈夫よ。私、グリフィス家の連中が、あの從兄弟に何もしてやらないのも、屹度ギルの爲めだと思ふわ。屹度さうだわ。無論ベラには、そんな積りはしないのよ。今年の春、あの人の事をいゝ男だつて言つた事があるんですもの。無論、ミラが他人に悪くする様な事はないわ。でも、誰か、あの人を拾ひ上げて見る人はないかしら。無論、鳥渡の間の事だけれど、冗談にあの人をあつちこつち招待してやるのよ。さうしたらあの人どうするかしら。グリフィスの人達はどう思ふかしら。伯父さん達やミラやベラは、何とも思はないだらうと思ふけれど、ギルは屹度嫌な顔をするわよ。私、自分ではベラとの仲が善過ぎて駄目だけれど、駄目でない人があるのを私、知つてるわ」彼女はかう言つ

てベルチン・クランストンの事を考へてゐた。彼女は、ギルやグリフィス家の連中を大嫌ひであつた。ただ、あの人にダンスだの馬乗りだのテニスだの、そんなものが出来るかしら。彼女が黙つて考へて居る様子を他の連中は注意深く眺めてゐた。彼女程綺麗ではないが、同じ様に跳ねつかへりのチルが言つた。「でも、そんな事をしては悪くない？　グリフィスの人達が本當に嫌がりはしないかしら」

「嫌がつたつて平氣ではないの」ソンドラが言つた。「あの人は、唯、あの人を無視するだけの事ぢやないの。そんな事は問題にしないでよ、わよ。何もあの人達が、あの人を招待するんではないのだから」

「そいつは面白い！　つまり、此の町に喧嘩を巻きさうつて譯でせう？」と、トレシーが言つた。

「いや、それは屹度喧嘩になるよ。ギルが嫌がるのは眼に見えてるんだから。僕だつて、ギルの立場に居たら嫌だからねえ。此の町を引掻き廻す積りなら、一つやるんだね。屹度騒ぎになるよ」

かうした事に乗り易いソンドラの性質ではあつたが、この儘であつたら、別にこれと言ふ結果は生れて來なかつたであらう。だが、その後、幾度か同じ事をベルチン・クランストンやチル・トランバ、バトリシア・アンソニーや、アラベラ・スタークと話し合つたので、とう／＼その噂が、ギル

パートの耳に這入つたのであつた。それをギルバートの耳に入れたのはユンスタンス・ヴィナントで、町の人の噂に依ると、彼女とギルとの間には婚約が結ばれるであらうと言ふ事であつた。實際、ユンスタンスは、ギルバートが結局彼女と結婚して呉れる事を望んでゐたので、ソンドラがクライドに興味を持つて居る事を聞き、更に彼女をギルバートよりもいゝ男だと言つて居る事を聞いて、すつかり苛々して來たのであつた。彼女は、ソンドラへの復讐を考へて、凡ての事をギルバートに告げたのであつたが、それを聞くとギルバートは、直ぐにクライドとソンドラに關して、色々な皮肉を言ひ出した。その噂がまたソンドラに傳はると、彼女は忽ち烈しい復讐心に囿はれて了つた。彼女がクライドによくしてやれば、他の連中もクライドに親切になるだらう。それは、ギルバートが、社交上の一敵國を迎へる事になる。しかもそれは、彼の従兄弟なのだ。愉快！　直ぐにソンドラは、或る方法を思ひついた。その方法に依れば、クライドに氣付かせる心配もないし、旨く行かなかつた處で、自分の損にはならないのであつた。

その頃、此のライカーガスには、スネデカー學校に行つて居た若い上流家族の連中の中に「時々俱樂部」と言ふ、時偶の晚餐ダンス會が開かれる事になつてゐた。その俱樂部には、これと言ふ規則もなかつたし、役員だの事務所だのと言ふ様なものもなかつた。その俱樂部員と目されて居る者が、誰で

も勝手に會員を招集して、晩餐やダンスやお茶を供する事になつてゐた。

ソンドラは此の會を利用して、彼女以外の誰かにクライドを招待させれば、事は容易に運ぶのだと思つた。例へば、チル・トランバルがさうした會を開いてクライドを招待する。何と言ふ譯のない話だらう。さうすれば、彼女はもう一度クライドに會へるし、クライドがどの程度に彼女に興味を持つてゐるかも知れない、彼がどんな男であるかも知れないに解るのであつた。

そこで、彼等の小さい晩餐會が、十二月の最初の木曜日に、チル・トランバルを女主人公として、此の俱樂部の連中の爲めに催される事になつた。それには、ソンドラとその弟、スチユート・トランバル家のトレシー及び、ガートルード、アラベラ・スターク、ベルチンとその兄の他にユチカやグローバースビルからも連中が来る筈であつた。無論クライドも呼ばれる筈であつたが、彼に對しては、嫌な氣を起させない様に、單にソンドラ計りでなく、ベルチンもチルもガートルードも周到の注意を拂はうと言ふ事になつた。彼のダンスのプログラムには皆で書き込まう。食事の時にも、決して彼を除け者にしない様にしよう。一晚中、絶えず誰か、相手になつてゐるやうに仕よう。さうすれば、他の連中も自然に、彼に興味を持つ様になるから、ソンドラだけが彼に親切をしようと云ふ厄介を背負はないで済む計りでなく、ギルバートに對して充分な嫌がらせになるからであつた。

此の計畫はその通りに實行された。

ソンドラと會つてから二週間計り経つた、或る十二月の夕方、工場から歸つて来たクライドは、その部屋に入ると、衣裳棚の鏡の所に、クリーム色の手紙が置いてあるのを見て驚いた。それは、大きな走り書きの、見馴れない筆跡であつた。彼は取上げて、裏返して見たが、ひどく解り悪い字でB・T及びJ・Tと書いてあつた。あけて見ると、次の様なカードが出て来た。

時々俱樂部御招待

第一回 冬季晩餐舞踏會

十二月四日・木曜日

ワイケアジイ街 一三四

ダグラス・トランバル家に於て

御出席の有無、チル・トランバル嬢まで御返事下され度候

裏返して見ると、表書と同じ讀み悪い筆跡で、親愛なるグリフィスさん。入來して下さいませう。極く内輪の會です。屹度御氣に召すだらうと思ひます。いらつしやるならば、チル・トランバル

までお知らせ下さい。——ソンドラ・フィンチュレー」と書いてあつた。

読んで見て、クライドは狂氣した。二度目に彼女に會つて以來、彼はいよくその夢想を募らせて現在の境遇から浮び上る事計り考へてゐたからである。彼は、自分の平凡な周囲には、本當に惜しい人間だと自分を考へ始めてゐた。しかし今、此處に「時々俱樂部」の招待が來たのだ。彼は未だ此の俱樂部の事を聞いた事はなかつたが、かうした連中の名前が出て居る限りは、屹度素晴らしいものに違ひない。しかもソンドラ自身の裏書まであるではないか。何と言ふ素晴らしさだらう！

彼はもうじつとしてゐられなかつた。忽ち立上つて、部屋の中を歩き始めたが、鏡に覗き込んだり手や顔を洗つたり、せかくと動き廻り乍ら、ネクタイが少し貧弱だと思つて、それを取更へて見たりした。彼はその晩、どんな着物を着ようかと考へたり、此の前會つた時のソンドラの顔を思ひ出したりした。同時に、此の手紙を見て、こんなに喜んで居る彼の事を、何かの方法でロバアタが見る事が出來たら、彼女は何と考へるだらうとも思ひ出さないうで居られなかつた。無論それは、彼女に烈しい苦しみを與へるに違ひなかつたが、クライドは、その爲めに、ソンドラに對する氣持を變へ様とはさら／＼に思はなかつた。

あの驚く可き令嬢よ！

あの美しさよ！

彼女の住む、あの富の世界！ 社會的地位！

生れつき異教徒的で、因襲になすまない彼は、かうしてあのソンドラが、彼に對して烈しい喜ばしさをを見せて居る時、ロバアタを振切つて彼女の方に行く事が、何故悪いのだと考へてゐた。第一、何をしたつてロバアタに解る氣づかひはないではないか？ 自分で言ひさへしなければ、こんな思ひ掛けない事が彼女に解る筈がない。無論彼は、彼女には何も言はない積りである。彼の様な貧乏な青年が、かうした高い憧れを持つたと言つて、其處にどんな悪い事があるのだ？ 彼のやうな貧乏人が、ソンドラのやうな令嬢と結婚したと言ふ例は、他にも澤山ある事ではないか。

彼は、ロバアタとあつた關係になつて居り乍ら、或る條件の他には、彼女と結婚の約束をしてゐないことをはつきりと、思ひ出して居た。しかしその條件も、彼がカンサス市で聞かされた所に依れば、さう容易に起つて來る事ではないらしかつた。

かうして突然、またもソンドラが彼の前に現はれた事は、彼をいよく狂喜せしめた。燦然として眼を奪ふあの輝やかなしい金銀の殿堂の女神が、今や公然とクライドの心にその姿を示し、彼の參詣を許して居るのだ。疑ひもなく、ソンドラ自身も、その會に出席するのだ。彼はかう考へて、身を震は

せて狂喜した。

しかし、彼は、ギルバートやグリフィス家の人達がこのことを聞いてどう思ふかも考へて見た。彼等はどんな顔をするだらう？ 氣持を悪くするだらうか？ それとも却つて喜ぶかしら。あるひは更に彼を無視することに努めるか知ら。それとも、今迄になく彼に注意を拂ひ出すかしら、だが、何れにしても、これは、彼の方から企てたことではないのだ。彼等と同じ仲間の人たちが、而もこの町では尊敬しなければならぬ人たちが、正式に彼を招んで呉れたのではないか？ 而も、さうなつた成り行きにも、彼にやましい點はないではないか。而もその分別に、洗練された陰影を持たない彼は、今後、ギルバートやグリフィス家の人達が、厭でも應でも彼をその家に招ばねばならぬことを考へて、或る皮肉な喜びをさへ感じたのであつた。實際、他の人達がかうして彼を招くのには、グリフィス一家の者達がどうしてそれを避け得るだらう。あゝ、愉快！ 而も、これが、あの高慢ちきなギルバートの面前なのだ。無論ギルバートは憤慨するに違ひないが、あの伯父やミラはさうでもないだらうから、ギルバートの密かな復讐などは、恐れる必要がない。考へ乍ら、クライドは獨りでほくそ笑んだ。

だが、それにしても、此の驚くべき招待状！ 彼に對する興味がなくて、どうしてソンドラがかう

した走り書きの添書をするだらう？ 何故だ？ その夜の彼は、殆んど夕食も食べないほどに、亢奮してゐた。彼はカードを取上げて、その筆跡に接吻した。そして、何時ものやうにロバアタに會ひにも行かないで、先日彼女に會つた日のやうに、鳥渡外を散歩してから、早く寢床に着いた。今夜の彼も、ロバアタに會つたり話したりする氣には、とてもなれなかつたからである。他の考へ——ソンドラのことや、彼女が彼に興味を持つてゐると言ふことが——、餘りにも強く彼の心を魅了し盡してゐたからである。

二十五

無論、クライドは、ソンドラの事などは、一度もロバアタに話さなかつた。而も、彼女と同じ工場に居る時、彼女の部屋に行つて居る時、稍々ともすれば彼の思ひが、ソンドラの上を走つて行くのを、どうする事も出来なかつた。一方ロバアタも、彼の冷淡な様子を見て、一體どんな事が彼に始まりかけて居るのだらうと、思ふ時があつた。だが彼は、彼女の見て居ない處では、何時でも、ソンドラのような娘が彼に興味を持つてゐる事を、色々な空想の中で楽しみ續けてゐた。だが、さうなつた時ロバアタはどうなるのだらう？ どうしたらいいのだらう？ 二人の間には、既にかうした關係が出

来て了つて居るではないか。しかし、此の新しい光の直射を浴びると、彼はもうロバアタの顔を見る
氣さへなくなつて來てゐた。それ程、此の新しい光は強かつた。それは、間違つてゐる事だらうか？
こんな事は悪い事だらうか？ 彼の母親はさう言ふに違ひない。彼の父親もさう言ふだらう、恐らく
は、正義を信じて居るあらゆる人間がさう言ふだらう。——ソンドラ・フィンチュレー自身も、また
あのグリフィス家の人達も、みんなが。

だが！ だが！ それは、その年の最初の雪が降つた日だつた。クライドは、此の頃知合ひになつ
た或る親しい小間物屋の男の忠告に従つて、新しい絹帽子と絹の白手袋とを着け、新しい絹張傘をさ
して、ワイケアジイ通りのトランバル家に行つた。それは大して宏壯な家ではなかつたが、一寸奇妙
な建て方の低い家で、窓掛を洩れて來る光の様子には、クリスマス・カードを思はせる様な處があつ
た。彼が行つた時は丁度定刻であつたが、既に家の前には、様々の形や色をした立派な自動車、五
六臺も並んでゐた。その雪に彼はれた車體の一行を見ると、彼は自分の貧しさを烈しく感じた。彼に
はどんなにしても、こんな眞似は出來ないのだと思つた。しかも、門から入つて玄關に近づいて行く
と、中から大きな笑ひ聲や話聲が聞えて來た。

一人の背の高い瘠せた召使ひが、彼の帽子や外套や傘を受取つて呉れると、彼は直ぐ、明らかに彼

を待受けて居たらしいヂル・トランバルと顔を見合はせた。震ひつく程美しい娘ではなかつたが、縮
毛の金髪で、すつきりとした顔立で、腕や肩をむき出しにした白いサティンを着て、ライン石を鏤め
た帯を額に巻いて居た。

「よく存じ上げてますから、御紹介には及びませんわ」彼女は近付いてクライドに手を與へ乍ら言つ
た。「私、ヂル・トランバルですの。フィンチュレーさんは未だ入來つしやいませんけれ共、おさしつ
かへ御座いませんでせう？ さア、皆様の處に入來して下さい」彼女は、幾つかの部屋が直角に連つ
て居る方へ案内し乍ら言つた。「随分よく、ギル・グリフィスに似てらつしやいますのね」

「僕がですか？」さう言はれて、少からず嬉しくなつたクライドは、笑ひ乍ら言つた。

その部屋の天井は低かつた。色付き灯笠の中の美しい光が、黒ツほい壁を照し出して、暖爐の裸火
が、色々の家具を、薔薇色に染め出して居た。繪だの、書物だの、色々の美術品などが置いてあつた。

「さア、トレシー。あなたが紹介役よ」と彼女は言つた。「わたしの弟のトレシー・トランバル
ですの、グリフィスさん。皆さん、此の方、クライド・グリフィスさん」トレシー・トランバルが
彼の手を探ると、皆なの眼が彼の方へ集つた。彼は鳥渡、恥しい氣もしたが、さりげなく親しさを微
笑を浮べて見せた。しかし、皆なが話を止して居るのに氣付いて、彼は「どうぞ僕にお構ひなく、お

話をお続けになつて下さい」と言つたが、その様子で、皆な彼をきさくな才氣のある男だと思つた。だが、その時、トレーシーが言ひ添へた。「一人宛、一々御紹介するのは面倒ですから、僕が此處で名指して申上げませう。あれが僕の妹の、ガートルードです。その隣に、妹と話して居るのがスコット・ニコルスン君」クライドは、ピンク色の着物を着た小柄の活潑さうな、色の淺黒い娘が、彼に頷くの氣付いた。彼女の側の非常に美しい赤ら顔の青年も、彼に頷いた。「やア、如何ですか」彼等かう二三尺離れた窓の側に、一人の脊の高い、餘り綺麗でない娘が立つて、彼女よりも脊の低い肩巾の廣い青年と話して居たが、それはアラベラ・スタークとフランク・ハリエツトだと言ふ事だつた。「二人は今、コーネル大學とシラキウス大學とのフットボールの試合の話をして居るんです……こちらが、ユチカのバーチャード・テラー君とフアント嬢です」矢繼早の紹介で、クライドは覺える譯にも行かなかつた。「バーレー・ヘーンズ君とヴァンダ・ステイル嬢……さア、これで皆だつたか知ら。あ、グラントとニナ・テンプルが來ました」見ると、酷くおめかし屋らしい憂鬱な眼色をした脊の高い男が、茶色の前髪を入念に手入れした小肥りの若い娘を連れて、部屋眞中に入つて來た。「やア、チル。やア、ヴァンダ。やア、ウイネット」その中に、クライドも、此の二人に紹介されたが、彼等は決して彼に意を向けてると思はれなかつた。「今日はねエ、ニナは餘り來たがらなかつたの

だけれど、僕がベルチンやチルに約束したもんだから、無理に引張つて來たんだよ。僕達は今まで、バグレーの家に行つてただけで、そこで誰に會つたと思ふ？ 當て、見給へ、スコット。ヴァン・ピータースンとローダ・ハルさ。今日、着いた計りなんだつて」と、若いクラランストンが直ぐに話し出した。

「へエ、さうかい」と、我儘の強さうなスコット・ニコルスンが言つた。「何だつて連れて來なかつたんだい？ ローダにもヴァンにも會ひたかつたのに」

「駄目なんだ。あいつらは、今日早く歸らなきやならないんださうだ。しかし、後から鳥渡位來るかも知れないよ。で、飯は未だかい？ もう始まつてるだらうと思つてたんだが」

「いや、此の辯護士さんの家ではねエ、何時もあまり物を食はないんだからね」と、フランク・ハリエツトが口を出した。彼は脊の低い、肩巾の廣い、快活な男で、ひどく無遠慮で、またひどくいゝ男で、綺麗な齒並びをしてゐたが、クライドは直ぐ此の青年を好きになつた。

「へエ、さうかい。しかし、俺達は食はないわけには行かないんだから、早く食はしてもらひたいもんだね。で、おきや、俺は歸るよ。時に、來年のコーネル大學の整調は誰がなる事になつてゐるんだい」直ぐにコーネル大學の話が、ハリエツトやクラランストンや、他の連中の間に始つたが、クライドに

は解らなかつた。彼等が親し気に話して居るかうした大學の事などは、クライドはこれ迄、殆んど聞いた事もなかつたのだ。彼は、自分の此の缺陷を感じて、いい加減に話を合してゐたが、自分が此の場場違ひな人間である事を、感じないで居られなかつた。かうした連中は、皆大學に行つて、彼以上の教育を受けて居るのだ。恐らく彼も、何處かの學校に行つて居たやうに、言つて置く方が好いかと思つた。無論、カシサス市に居た時には、其處に州立大學や、ミゾリー大學がある事を知つて居たし、シカゴにはシカゴ大學がある事を聞いてゐた。しかし、さうした大學を、彼は一寸でも覗いて見た事があるのか？　しかし彼は、若し誰かに聞かれたらさう言はうと思つて、その時の返答を考へ始めた。例へば、彼が大學で何を學んだかと聞かれた時、何と答へたらいいだらう？　彼は、數學と言ふ言葉を、何處かで聞いた氣がしたので、それを頭の中で繰返してゐた。

だが、彼等自身の事に興味を持ち過ぎて居る彼等は、彼に對しては一向注意して居ないらしく見えた。彼がグリフイス家の一人である事は、他の處では重大であつたが、此處では何でもなし。それは勿論、當然の事であつた。そして今、トレーシー・トランバルがウイネット・フアントを擱へて何か話し出すと、彼は全くの一人ほつちで、取残されて了つた氣がした。だが、丁度その時、小柄で淺黒い顔色をしたガートルードが彼の處へ寄つて來た。

「随分、皆さん、遅う御座いますね。でも、これがしよつちうですよ。八時だと言つて置けば、大抵八時半か九時でなければ集まらないのです。でも、何處でもさうなんで御座いますか？」

「さうですとも」クライドは、出来るだけ平氣さうにして居ようと努め乍ら、慇懃に答へた。

「私、ガートルード・トランバルですの」と彼女は繰返して言つた。「あの別嬪さんのデルの妹ですよ」と皮肉な愉快さうな微笑を口や眼に浮べて「あなた、私にお辭儀をなすつたけれど、私を御存じないので御座いますか？　でも、私達だつてさうですわねエ。あなたの御噂だけ伺つて居たんですもの」だが此處で、クライドを少し擔いでやらうと思つて、また言ひ續けた。「此の町の神秘的なグリフイスだなんて言つて居乍ら、誰もお目に掛つた事なんて無いのですもの。でも、私は一度、中央通りであなたをお見掛けした事がありますよ。リツチの店でキャンデーを買つていらつしやいましたけれど、あなたは御存じなかつたでせう？　キャンデーを御好きでいらつしやいますの？」

「え、好きですよ。何故ですか？」クライドは、脅かされた様な氣がして、訊ねて見た。彼がその時キャンデーを買つて居たのは、ロバアタにやる爲めであつたからである。此の娘は多少皮肉屋で、餘り面白い娘でもなさうであつたが、兎に角、孤獨から救つて呉れたので、他の娘達よりも氣が樂に話せるのであつた。

「何故つて、聞き返したりなさる處を見ると、あの時、誰か娘さんの爲めに買つていらしたらしう御座んすわね。誰かさう言ふ方がおありになるので御座いませう？ 如何？」

「どうして？」クライドは一寸の間、口を噤んでロバアタの事を思ひ出した。「ロバアタと一緒に居る處を誰かに見られてるのではないかしら」と言ふ考へが頭の中に閃いたからである。同時に、これ迄會つた娘と違つて、何と言ふ大膽な利巧さうな娘だらうとも思つた。「いゝえ、そんな者はありませんよ。何故、そんな事をおつしやるんです？」と、彼は直ぐ問ひ返した。

だが、こんな事をロバアタに聞かせたら何と思ふだらうと言ふ考へが浮んで来たので、彼は多少苛しい調子で言ひ添へた。「しかし、仲々手厳しうございますね。あなたは人を驚かすのが御好きなんでせう？ 屹度」

「誰？ 私？ そんな事はありませんわ。でも、あなたにそんな方がある事は解りきつてますわ。私はね、自分の事を他人に知らせたくながつてる人が、どんな風に返答をなさるか、それを見たい爲めに、時々質問をして見るのが好きなんですの」と彼女は挑戦する様にクライドの眼に覗き込んだ。「でも、何れにしても、あなたに、人があるのは解りきつてますわ。綺麗な男の方には、誰にでもそんな人があるのですもの」

「へエ、僕が綺麗なんですか？」彼は神経的に、しかし喜んで、彼女の顔を覗き込んだ。「誰がさう言ひました？」

「まあ、まるで御存じない様におつしやるわね。さう、色んな人がさう言つてますわ。例へば此の私よ。それからソンドラ・フィンチュレーも、あなたを御綺麗だと思つてますわ。尤も、あの人は、男の人は誰だつて好きなんですけど。でも、それは姉のチルだつて同じ事ですわ。あの人は、綺麗な男の人なら誰でも好きなんですけど、私は少し違つて居るんですの。だつて、私自身、あんなに綺麗ではないんですもの」彼女はさう言つて、皮肉に揶揄ふ様に、彼女の眼を瞬きして見せたが、クライドは、そんな事をされ、ばされる程、自分の低い地位が省られて、淋しい氣持になつた。「ただけど、あなたは、あなたのお従兄弟さんよりもお綺麗だと、自分でお思ひにならない？ さう言つてる人も随分ありますわよ」

かう訊かれて、クライドは、多少たじたとになり、多少嬉しくもなつたが、しかし、さうだと言ひきる氣にはなれなかつた。彼の頭に浮んで来たギルバートの、あの積極的な、意地張りな、執念深さうな顔を考へると、こんな事が彼の耳に入つたが最後、あの工場を追出されるに決まつてると考へたからである。

「そんな事があるのですか」と彼は笑ひ出した。「そんな事は僕、考へた事もないんです」

「まア、さう？ では、さうでもようござんすけれど、どつちにしてもさうなのよ。でも、あなたが幾らお綺麗でも、お金が無くつては何にもなりませんわね。だつて、お金のある人とは交際へないんですもの。綺麗な人よりもお金のある人の方を、みんな好くんですものね」

何と言ふ鋭い娘だらうと、クライドは思つた。何と言ふ冷酷な宣言だらう。彼女にはそんな氣があつたのではなかつたが、彼は、その言葉の爲めに、すつかりしよけてしまつた。

しかし、丁度そこへソンドラが、クライドの知らない或る脊のひよる長い青年と一緒に入つて來たと、續いてベルチンとスチュワート・フィンチュレーが入つて來た。

「まア、いらしたわよ」と、ガートルードが多少意地悪さうに言つた。彼女はソンドラが、彼女の姉よりも遙かに美しいと言ふ事に憤慨すると共に、彼女がクライドに興味を持つて居る事にも、憤慨して居たからだつた。「あの人はね、あなたがどんなにあの人を美しいと思ふか、それを見たがつて居るのよ。だから、あの人を失望させては駄目よ」

だが、それを確かめる爲めに、クライドが彼女を見詰める必要はなかつた。彼女の地位や財産や着物やお化粧を別問題にしても、ソンドラの性質そのものが、既にクライドをすつかり動かして居たか

らである。財産や地位に恵まれて居る彼女は、ホルテンス・ブリッグスの様に野蠻ではなかつたが、その我意の強い點では、彼女に勝るとも劣つて居なかつた。彼女は一種の小型のアフロダイトであつて、自分の好きな男を、その魅力に依つて粉碎しようとはするが、同時に、どんな關係にならうとも、彼女の個性や自我の自由を棄て様とはしないのである。しかも今、彼女自身にも解らない或理由の爲めに、彼女はクライドに心を惹かれてゐた。社會的にも經濟的にも彼は何者でもなかつたが、而かも彼女は、彼に興味を感じてゐた。

そこで、彼女は先づクライドが來て居るかどうかを見たが、彼に對してはさうした様子を氣振にも見せないで、出来るだけ氣取つた様子を作つてゐた。それは凡て、ホルテンスが用ひたのと同じ手管であつて、それに依つて、一番よく彼に印象付ける事が出来ると思つて居たのだつた。見ると彼女は、透き徹る様な錦紗の舞踏衣を着て、部屋ぢうをあちこちと歩き乍ら、皆と挨拶をして居たが、やがて、偶然彼が來て居る事に氣付いた顔をして、クライドの所へ近近いて來た。

「まア、いらしつてらしたの？ どうなさるだらうと思つてましたのよ。こんな事、あなたには詰らない事かも知れないと思つてましたの。でも、もう皆さんに御紹介は済んだのでせうね？」未だ紹介が済まなければ、自分が紹介をして上げようと言はない計りに、彼女は邊りを見廻した。他の連中は、

クライドからそんなに深い印象を受けて居なかつたが、彼女が彼に興味を持つて居る事から、彼に多少の興味を持つてゐた。

「え、殆んど皆さんに御目に掛りました」

「でも、私と一緒に来たフレツデー・セルスとは未だでしたわね。ねエ、フレツデー」彼女が例の瘠せた青年に聲を掛けると、その青年も近付いて来て、春の雄鶏が雀を見下して居る様に、クライドを見下した。

「此の方がクライド・グリフィスさんよ。私が話したでせう？ フレツド・ギルバートに似てらつしやると思はない？」

「あ、全くだ」此の愛嬌のある青年が叫んだ。「あなたはギルの従兄弟ださうですね。ギルならば、僕はよく知つてますよ。一緒にプリンストンに行つてましたし、シエネクタデイのゼネラル・エレクトリックに關係する前は、僕もしよつちう此の町に居ましたから。あなたも、あの會社に關係して居られるんでせう？」

「え、さうです」自分よりも學問もあり仕事も出来る青年だと思ふと、クライドは少からず壓迫される氣がした。彼は、此の男が、自分にまるで解らない事を何か話し出しはしないかと思つて、びく

びくして居た。

「何かの課を受持つていらつしやるんでせうね」

「さうです」クライドはびく／＼と、用心し乍ら答へた。

「僕は、カラー業と言ふ奴に就いては、金銭問題は別として、何時でも或る疑ひを持つてゐるんですがね。その問題に就いて、ギルと僕とは大學時代にしよつちう議論をしたものですが、ギルに言はせると、カラーを作つてそれを擴めると言ふ事は、それに依つて清潔と風采とを與へるものだから、社會的重大性があると言ふんですが、僕は、それは屹度、奴が何かの本で讀んだ事に違ひないと言つて、何時でも笑つてやつたものですよ」

クライドは、何とか返事を仕様と思つたが、どう言つていゝか解らなかつた。「社會的重大性」——それはどう言ふ意味で言つたのだらう？ 大學でなければ教へて呉れない様な、何か深い科學的な意味があるのだらうか？ だが、彼が未だ一口も返答をしない中に、ソンドラが直ぐ無雜作に口を入れて呉れた。「駄目よ、フレツデー！ 議論なんかしては。そんな事、面白くも何ともないぢやないの。それに私、此の方に、私の弟やベルチンに會つて戴き度いの。あなた、覺えてらつしやるわね、克蘭ストン嬢を。此年の春、伯父様のお家で、私と一緒にお目に掛つたんでせうし」

さう言はれると、ソンドラを非常に崇拜して居るフレッドは、もうどうする事も出来なかつた。

「え、勿論覚えてますよ」此の二人に就いて、既に長い間考へてゐたクライドは、さう言つて彼等の方に向いた。彼は、此のベルチンを、素晴らしく美しい娘だと思つてゐたが、しかし、何處か彼に解らない點のある娘だとも思つてゐた。何となく不誠實な、狡い處がある様な氣がして、頼りにならない様な、不思議に複雑した感じが、此の娘を見て居ると、起つて來るのであつた。

「まア、御機嫌よう。お眼に掛かれて嬉しう御座いますわ」彼女は、緑色の眼で彼に笑ひ掛け乍ら、何處か無頓着な、嘲弄するやうな調子で話し掛けた。彼女も彼を綺麗だとは思つて居たが、彼を相手に仕様などは、考へる事も出来ないのであつた。「随分御仕事の方がお忙しいので御座いませう」でも、かうして一度出ていらつしやれば、これからはちよいちよいお眼に掛かれるだらうと思ひますわ」

「はア、僕もさうして戴きたいものだと思つて居ります」彼は齒を丸出しにして、さう答へた。

彼女の眼色では、彼女の言つてゐる事等は、自分でも信じて居なかつたし、クライドが信じて居ないことも知つて居る様子だつたが、只、こんな事を言ふのが社交的に必要だと思つてゐるらしかつた。ソンドラの弟のスチュワートも、これに近い態度で彼と應答した。

「やア、如何ですか。お眼に掛かれて愉快です。姉からお噂は聞いて居りましたが、ライカーガスには長くいらつしやるお積りですか。さうなされるとよござんすね。さうすれば、またちよいち御眼にかゝれますから」

クライドは、此のスチュワートの快活な無頓着な笑ひ聲を聞き乍ら、何と言ふ如才なだらうと思つてゐた。と、側を通り掛つたウイネット・フアントの白い腕を把つて、「一寸待つた、ウイネット。あなたに訊ねたい事があるんだ」と言つたスチュワートの様子も、クライドの頭に残つた。彼は彼女とびつたり身體を喰付けて、何か早口に喋り乍ら、別の部屋に行つた。クライドは、その着物の素晴らしさにも氣がついた。

何と言ふ綺麗びやかな世界だらうと思つた。何と言ふ快活な世界だらう。やがて、ヂル・トランバルが叫び始めた。「さア、皆さん、いらして下さい。こんなに遅くなつたのは私のせりではないのよ。皆さんが入来しやるのも遅かつたし、それに料理番が馬鹿なんですもの。早く済ましてダンスにしませう」

「皆さんが席についたら、あなた、私とトランバルとの間にお坐んなさいね」とソンドラが言つた。「それだ、いでせう。さア、では、私の手を把つて頂戴」

彼女の白い腕がクライドの腕に絡んだ。今や彼は徐々として、しかし確実に、樂園に移されつゝある事を感じた。

二十六

晚餐は、クライドと無関係な様々な人や、場所や、計畫の噂話で終始した。しかしクライドは、彼自身の魅力も手傳つて、直ぐに此の場の空氣に馴染んだので、別に變な氣持もしなくなり、或る程度まで無頓着に、彼の地位を保つ事が出来た。ソンドラ・フィンチュレーが彼を好いてると言ふ事に、他の若い娘達が興味を持つて居ると言ふ事も、此の場合の彼の助けになつた。彼の隣りに坐つて居るヂル・トランバルは、彼が何處から来たかとか、彼の家庭ではどんな暮しをして居るとか、何故此のライカーガスに來る氣になつたとか、様々な質問を發したが、その間にも、他の連中が、色んな娘達やその情人の噂をしたりするので、クライドも時々、黙つて居る事が出来た。クライドは、自分の家族の本當の事を言つてはならない事を感じてゐたので、彼の父は今デンバーで、或るホテルを經營して居る——餘り大きいのではないが、それでも兎に角ホテルだと言つた。彼がライカーガスに來たのは、シカゴで伯父から奨められて、カラー業を習ふことになつたからだと言つて置いた。彼は自分でも

今の仕事に興味を持つて居るのか居ないのか解らなかつたし、何時まで此の儘で續けられるかどうかも解らなかつたので、さう言つて置けば將來の役に立つと思つて、多少の財産や地位がある人間だと思はせるやうに話す事に努めた。實際、ヂルと同様に、彼の言葉に耳を傾けて居るソンドラは、ギルバートから出たらしい色んな噂があるにも拘らず、クライドの言葉を信じようとした。

これは、ソンドラやヂルに對して計りでなく、他の連中に對しても、重大な事柄であつた。彼がどれ程いゝ男であり、彼の町での親戚關係がどれ程よいにしても、曾つて、コンスタンス・ウイナントが報告したやうに、只、従兄弟の家族に依り頼らうとして居るつまらない人間であつたならば、其處に色々な問題が起るわけであつた。いくら親類がよくつても、彼が只、金のない事務員や雇人であるとするれば、彼等は決して友達以上の者にはならないのであるが、多少でも金があつて、何處かの地方に多少の地位を持つて居ると言ふ事になれば、彼の立場は全然違つたものになつて來るからである。今、ソンドラは、彼女が思つたよりもましな地位に居る男だと感じて、非常に安心をすると共に、一層の親しみをを見せて來る事になつた。

「食事が濟んだら、僕と一緒に踊つて戴けますでせうか？」皆なが何處かでダンス會を開かうと話してゐる時、クライドは彼女に笑ひ掛けられた時に乗じて、さう言つて見た。

「え、無論だわ。あなたさへよかつたら」彼女は、この上にも彼の心を掻き立てやうと思つて、媚を含んで答へた。

「一度きりですか」

「幾つお踊りになりたいの？ だつて、此處には十人計りも男の人が居るのでありますもの。這入つていらつしやる時、プログラムをお取りになつて？」

「そんな物があつたのですか？」

「え、でも、いゝのよ。御飯が濟んでからお持ちになれるんだから。三番と八番に私の名を書いて置いて頂戴。さうすれば、あなたも他の人と踊れるでせう」彼女は盪かす様な笑聲になつて、「あなた、誰にもいゝ顔をしてなくつちや駄目ですわよ。いゝこと？」

「え、分つてます」と、彼は未だ彼女の顔を見續けて、「しかし、今年の四月、伯父の家でお眼に掛つて以來、僕は絶えずあなたにお眼に掛りたいと思つて居たのです。僕は毎日、あなたのお名前が新聞に出るのを、探して居たのですからね」

彼が、彼女の顔を求めるやうに眺めるのを見ると、ソンドラも、我にもなく、此の素朴な告白に捕へられるやうな氣がした。彼女が言つたり仕たりする事を、自分でも言つたり仕たり出来ない彼は、

せめて活字の中で、も、彼女について行きたがつて居たのだ。さう思ふとソンドラは、それをもつと大きな物にしたい望みに、抵抗する事が出来なかつた。

「まア、さう？ 随分有難いわね。でも、私の事で、どんな事が書いてありましたの？」

「あなたが十二番湖やグリーン・ウッド湖にいらした事だの、シャロンで水泳大會にお出になつた事だの、ポール・スマイスにいらした事だのが書いてありましたよ。何だか、新聞に依ると、シユールン湖から来た誰か、あなたに興味を持つて、あなたがその人と結婚なさるかも知れないなんて、書いてあつた新聞もありましたですよ」

「まア、そんな事が書いてありました？ まア、何て馬鹿でせう。此處らの新聞は、そんなくだらない事計り書くんですのよ」彼女のその調子には、彼の闖入を許して居るやうな所があつたので、彼は面喰つた。だが、彼女は益々優しくなつて、また會話を始めの所に戻した。

「あなた馬乗りはお好き？」 彼女は優しく訊ねた。

「いゝえ、未だです。一度、やつて見たいと思つてますけど、未ださうした機會がなかつたものですから。やれば出来さうに思つてますけども」

「無論、やさしいんですもの。一二度お教はりになれば乗れますわよ」彼女は稍々聲を低めて言ひ添

へた。「何時か、一度、乗つて見ませうか。私の家には幾匹も馬が居ますから、屹度お氣に召すのがあ
るだらうと思ひますわ」

クライドは、その時の事を考へて、髪の毛の根まで震へる心地がした。彼は現にソンドラから、彼
女の馬を使つて、遠乗りに出やうと誘はれて居るのではないか。

「あゝ、それは有難う御座いますね。どんなに愉快でせう」

皆なは既にテーブルから立上りつゝあつた。四人の樂師の室内樂團が来て、隣りの部屋で最初のフ
オクストロットを弾き始めて居たので、誰ももう食事の興味などは無くなつて居るのだつた。その長
い広い部屋からは、あらゆる邪魔物の家具が取除けられて、壁椅子だけが残されて居た。

「では、早くプログラムを取つて来て、皆さんが立たない前に、踊りをお決めになるとよござんすわ」
ソンドラが注意した。

「えゝ、さうしませう。しかし、あなたが僕と踊つて下さるのは二つだけですか？」

「さう、では、三番と五番と八番にして頂戴。それだけが第一部よ」彼女がさう言つて、行つて了ふ
と、クライドは直ぐにプログラムを取りに行つた。

その夜のダンスは、總て其の頃に流行した氣忙しいフォクストロット系のものであつて、その時

の踊手の氣持に従つて、色んな言葉やバリエーションを入れるやうなのが多かつた。先月の間、ロバ
アタと度々踊つて居たクライドは、ひどく調子がよくなつて居たし、その上に、とう／＼ソンドラの
やうな素晴らしいお嬢さんと、かうした親しい交渉が持てるやうになつたのだと言ふ思ひで、精一ぱ
いに踊る事が出来た。

無論彼は、他の令嬢達にも、禮儀深く愛嬌よくしようと思つて居たが、踊り乍ら掠め過ぎるソンドラ
の凝視に會ふと、何となく頭がくらくらして来るやうな氣がした。彼女はグラント・克蘭ストンに
抱かれて、ぐつたりと夢見る様に寄り掛つて踊つて居たが、その間にも、クライドが近づいて來ると、
それとない眼を送つて、彼の方を眺めて居た。それは、彼女の態度が如何に優美でロマンチックで詩
的であるか——人生の本當の花である事を、示さうとして居るかのやうであつた。丁度その時、彼は
ニナ・テンブルと踊つてゐるが、彼女は「ねエ、随分しとやかだと思ひにならない？」と彼の耳に
囁いた。

「どなたがです」さう言はれると、クライドの頬や額が赤くなつたが、自分の氣持を見透かされまい
として尋ねた「どなたの事を言つてらつしやるんです？」

「お解りにならない？ では、何だつてそんなに赤くお成りになつたの？」

彼も赤くなつた事に氣づいて、自分の言ひ抜けの滑稽さを知つた。彼は振返つたが、丁度その時音楽が止んで、踊手が皆な椅子に引上げて行つた。ソンドラが、グラント・クランストンと一緒に向ふへ行くと、クライドもニイナを連れて、書齋の窓の所へ行つた。

續いてベルチンと踊つたが、彼女の冷淡な皮肉な態度は、多少クライドを面喰はせた。彼女のクライドに對して持つ興味は、主としてソンドラが彼に興味を持つて居るらしいと言ふ事實にあつた。

「随分御上手ですわね。こちらにいらつしやる前、シカゴか何處かで、餘程踊つていらしたので御座います。」

彼女はゆつくりと無頓着な調子で話した。

「はア、此の町に来るまで、シカゴに居ましたけれど、ダンスは餘りやりませんでした。仕事が忙しかつたものですから」彼は、あらゆる物を持つて居るかうした娘達と、何物をも持たないロバアタとを思ひ比べてゐた。だが、此の瞬間の彼には、この令嬢よりもロバアタの方がいゝやうに思へた。彼女は優しく温かく親切だ。——こんなに冷たくはない。

やがて、憂鬱なサキソフオンの音が、時々朗々と入つて来る音楽が始まると、ソンドラが彼の所に近づいて来て、右手で彼の左手を把り、彼の腕を彼女の腰に廻させた。その氣輕さうな親しげな態度

は、夢見心地のクライドの心を震へ上らせた。

彼女は、技巧的な媚るやうな様子で、彼の眼に笑ひ掛けた。その物軟らかい狡さうな、だが意味ありげな微笑は、彼の動悸を高めさせ、彼の咽喉を塞らせるに充分であつた。彼女の使つて居る香はしい香水が、春の香りの様に彼の鼻を咬つた。

「如何？ 楽しんでいらしつて？」

「え、あなたのお顔を見て居られますからね」

「だつて、他にもいゝお嬢さんが澤山居るではありませんか？」

「でも、あなた程綺麗なお嬢さんは見かけませんもの」

「そして、私程上手に踊るお嬢さんも居ないし、私程やさしいお嬢さんも居ない——さうでせう？」

あなたがおつしやらうとする事は」

彼女は、擲擲ふ様に彼を見上げた。クライドは、ロバアタとは全く違つた女を相手にして居るのだと氣付いて、まご／＼して顔を赤らめた。

「つまり、誰でもがさう言ふから、僕がそんな事を言はなくてもいゝとおつしやるんでせう？」とクライドは眞面目に言つた。

「いゝえ、誰でもさう言つて呉れる譯でもありませんわ」彼の返事の單純さに、いくらか參つたソンドラは、それに依つてまた興味を唆られもした。「私を綺麗だと思つてない人も、随分ありますわよ」
「へえ、そんな人があるんですか？」彼女に自分が揶揄はれて居るのではない事を知ると、彼は喜んで問ひ返した。だが、その先はもう聞きたくない氣もした。彼は、何か別の事を話さうと思つて、先刻の食卓での話しを思ひ出した。「あなたは、戶外遊戯や運動ならば、何でも御好きのやうで御座いますね」

「えゝ、それは」彼女は直ぐ熱情を込めて應じた。「本當に私、あんなに好きなものは何もありませんのよ。乗馬だつて、テニスだつて、水泳だつて、モーター・ボートだつて、飛び込みだつて、氣狂ひになる程好きなんですもの。あなた、水泳はなさいますの」

「えゝ、勿論」クライドは得意になつて言つた。

「テニスは？」

「やつと始めた計りです」彼はまるで出来ないと言ふのを怖れて、さう言つて置いた。

「私、テニスは随分好きなのですの。何時か御一緒に致しませうか」

かう言はれて、クライドはすつかり嬉しくなつた。悲しげな戀の流行唄の曲につれて、彼等は輕や

かに滑り廻つたが、彼女はまた話し續けた。「ベラ・グリフィスとスチュワートと、グラントと私とで、いゝダブルスが出来ますの。去年の夏はグリーン・ウッドでも、十二番湖でも、大抵私達が優勝しましたのよ。私の飛び込みをあなたに一度見て戴きたう御座いますわ。それに十二番湖には、此の邊で一番速いモーター・ボートがありますの。スチュワートのですけれど。一時間に六十哩は出せるんですもの」

その様子で、クライドは、此の題目が彼女を喜ばせる計りでなく、昂奮さへさせる事を知つた。それは只に戶外運動の樂しみを齎らす計りでなく、かうした社會の深い興味になつて居る勝利者の名譽を與へるからであつた。更に其の後になつて、クライドにも解つた事だが、かうした機會で、彼女は幾度も衣裳を着更へて、その美しさを誇る事が出来るからであつた。水着を着て居る時の彼女の何と言ふ美しさよ！更に乗馬服、テニス着、夜會服、自動車服！

二人は、お互ひに抱き合つて居るお互ひの興味を感じ合つて、一緒に踊り續けた。彼等が見交はす熱情的な眼の色の中には、クライドが若し運動家で、經濟的に多少の餘裕があれば、あちらこちらと連れて歩き度い暗示が見えて居た。しかしクライドは、時に自ら嘲つて、大膽さうに振舞つて居る事もあつたが、その内心には、或る深い不安が漂つて居て、何か酷く物欲しさうな、多少悲しげな光さ

へ眼の中に光つてゐた。

「あゝ、これでダンスもお仕舞ですね」彼は悲しきうに言った。

「アンコールをしてやりませうよ」と彼女が言つて、手を叩いた。オーケストラが直ぐ賑やかな曲を弾き出した。二人は直ぐ、あちらこちらと滑り出した。調子の合つて来た二人は、音楽の旋律に溶け込んで、小波に踊る二つの木の葉の様に踊り廻つた。

「あゝ、本當に愉快でした。もう一度また、ソンドラ、あなたと一緒に踊りたいものですね」

「ソンドラなんて、私をお呼びになつては嫌。未だ私の事をよく御存じないのぢやありませんか」

「いや、フィンチュレーさんと言ふ積りだつたのです。しかし、あなたは僕を非常にお好きなのぢやないんですか？」

彼の顔は眞青で、悲しさうであつた。

彼女はそれに氣付いてゐた。

「いゝえ、非常に好きだなんて、そんな事はありませんわ。私は只、多少あなたが好きな。只、あなたが、感傷的になつて居ない時だけわよ」

音楽が止んだ。軽やかな踊りの足取りが、靜かな足取りに變つた。

「未だ雪が降つてるかどうか見て來ませうよ。いらつしやらない？」さう言つたのは、ソンドラであつた。

「あゝ、行きませう」

人々のざはめいて居る中を、二人は急いで扉口の方へ出て行つた。外は一面に、綿の様に軟らかい靜かな雪に被はれてゐた。雪は渦巻き乍ら、無言の中に降り注いでゐた。

二十七

それに續いた十二月の日々は、クライドにとつて、嬉しくもあつたが、またごとくとした日夜でもあつた。彼を愉快な崇拜者だと見てとつたソンドラ・フィンチュレーは、最初から彼を忘れもしなかつたし、忽にもしなかつたからである。しかし、社會的に高い地位を持つて居る彼女は、最初、どうして此の關係を進めるかに就て迷つてゐた。クライドが餘りにも貧乏であつたし、それに加へて、グリフィス家の人達が餘りにはつきりと彼を無視してゐたからである。

のみならず、かうして彼女がクライドと交際を開いたのに就いては、最初はギルバートを苛々させてやらうと言ふ動機からであつたが、今は別な理由が加はつて來てゐた。それは、彼女が彼を好いて

居ると言ふ事だつた。彼の魅力と、彼女やその地位に對する尊敬が、彼女を喜ばせ、惹着けたからだつた。追従を喜ぶ彼女の性格に、クライドの眞面目なロマンチックな追従が、色々な物を訴へて來たからである。同時にまた、彼の肉體的・精神的の色々な素質が、彼女に愉快だつたからである。彼が好色的であり乍らその勇氣を持たない事や、彼女を尊敬はして居るが、同時に唯の人間として見て居る事や、彼の精神的・肉體的の活氣が彼女のそれにふさはしい事等が、彼女を惱したり、嬉しくさせたりしてゐるのだつた。

従つて、餘り人目に立たないで、悪い評判も受けしないで、クライドとの關係を進め様とする事は、ソンドラにとつて容易ならぬ事柄であつた。夜な夜な、彼女の寢床で、彼女の狭い小さい頭に登る問題はこれだつた。しかし、その夜、トランバルで彼に會つた連中は、ソンドラの彼に對する興味を充分に知つて了つたし、クライドが面白い愛嬌のある男である事も解つたので、彼等は、殊に娘達は、クライドを仲間に入れる事に満足した。

そこで、それから二週間計りした或る日、クライドが自分の両親や兄弟やロバアタに、安いクリスマス・プレゼントを買はうと思つて、スタークの店に行つて居る時、自分で買物に來て居るデル・トランバルに會つた。彼女は直ぐ明日の晩、グローバースピルのヴァンダ・ステイルの家で、クリス

マス前のダンス會があるから、一緒に行かないかと誘つた。デル自身はフランク・ハリエットと一緒に行く積りだが、多分ソンドラ・フィンチュレーも、その會に行くだらうと言ふのだつた。ソンドラには何か他の約束があるらしいが、出来るだけその會にも行く積りで居る。しかし、クライドが、彼女の妹のガートルードを誘つて呉れば、ガートルードは非常に喜ぶであらう。のみならず、クライドがその會に行く事を聞いたら、ソンドラも屹度、他の會を斷つても、その會には行くであらうから——と言ふのであつた。

「御一緒にいらつしやるならば、トレーシーがお待ち申してますわ」と彼女は言ひ續けた。「それとも」と彼女は言ひよんで、「その會に行く前に、晩御飯を召上りに、私共へいらして下さいませんか」と。私達内輪の者計りですけど、いらして下されば、随分嬉しう御座いますわ。ダンス會は十一時から始まるんで御座いますから」

その會があるのは金曜日の夜であつたが、その晩には、クライドは、ロバアタと會ふ約束がしてあつた。クリスマス休暇で、三日間、親の所へ歸つて來る彼女は、その翌日、此の町を發つ事になつてゐたからである。それは、彼等がかうなつてから始めての、長い別れであつた。その晩、クライドに新しい萬年筆とエバーシャープ鉛筆とを贈物にする積りであつたロバアタは、彼と一緒に最後の夜を過

す事を、非常な楽しみにしてゐたのであつたし、クライドの方でも、白と黒との組合せ化粧道具で、彼女を驚かせようと考へてゐたのだつた。

しかし今、再びソンドラに會へる事が解ると、彼は、ロバアタとの此の最後の晩の約束を、取消さうと思つた。無論、相當な口實を設けて、丁寧に斷る積りであつた。彼はソンドラにすつかり參つては居たが、しかしロバアタにも未だ深い興味を感じて居たので、彼女を悲しませようとは思つて居なかつたからである。無論、彼女が失望するであらう事は、クライドにも解つてゐた。だが、此の突然の社交的進出に對して、ヂルの申出を拒む事は、此の際、彼には出来なかつた。何だつて？ グローバースビルに行くのを止すんだつて？ それは、ロバアタに對しては不信で殘酷であるかも知れないが、ソンドラに會はない譯には行かないではないか？

そこで彼は、その會に出る事を約束したが、直ぐにロバアタの所に寄つて、適當な辯解をしようと思つた。例へば、グリフィス家で、彼を晚餐に呼んで居ると言へば、一も二もなく彼女を得心させる事が出来ると思つた。しかし、行つて見ると、彼女は外出して居たので、彼は翌朝、工場でその事を説明する事にした。クライドは、都合に依つては、土曜日にフォンダまで一緒に行く約束をして、其處で贈物を與へてもいいと思つた。

しかし金曜日の朝、工場に行つた彼は、彼女を満足させる様に、詳しく説明する積りであつたに拘らず、こんな風に嘔いて了つた。「ねエ、今晚の約束を破らなきやなくなつたんだよ。伯父の處へ呼ばれてるんで、どうしても行かなきやならないんだ。出来るなら、早く歸つて、君のところへ寄りたいのだけれど、さう出来るかどうか解らないんだ。しかし、もし會へなかつたら、明日、フォンダへ行く汽車で會ふことにしよう。君に上げたいものがあるんでね。もつと早く君に知らせるとよかつたんだが、何しろ今朝さう言つて来たもんだからね。悪く思はないでお呉れ。ねエ、いゝだらう？」彼は自分の悲しみを表はす爲めに、出来るだけ憂鬱さうな顔をして見せた。

彼と一緒に幸福な最後の夜を送らうとして居たロバアタは、かうして思ひ掛けなくその約束を棄てられるのを見ると、始めて頭を横に振つた。そして、どうしてこんな事になつたのだらうと、重い氣持で考へてゐた。これまでのクライドは、細心の注意を拂つて、ソンドラの事を隠して居たので、彼女は何も知らないものであつた。無論、彼が言ふ通りに、斷り難い招待が来たのに違ひないだらうが、彼女だつて、こんなにも楽しみにして、その夜を待つてゐたのではないか。しかも、これからまる三日間、二人は會へないのだ。工場に居る時も、自分の部屋に歸つてからも、彼女は悲しく思ひ續けて、せめて宴會の後にでも、一寸立寄ると言つて呉れたらよかつたのにと考へて居た。だが、宴會は屹度

遅くまで續くのだらう。彼にも確かな事が解らないのだらう。或ひは、食後に何處かへ行く約束なのかも知れない。

しかし、一方クライドは、トランバルの家に行き、その後ステイルの家に行つて、一ヶ月前までは、夢想さへしなかつた様々な歓待を受けてゐた。實際ステイルの家に行くと、トランバル家の人達の紹介ではあり、グリフィス家の人間でもあるので、彼は忽ち色々な人々に紹介され、同時にまた、色々な會や企ての招待を受けた。彼はグローバースビルのヴァンダム家に、除夜舞踏會の丁寧な招待を受けたし、クリスマス前夜には、ハリエツト家の晩餐舞踏會にも招待された。その時には、ギルバートもベラも、ソンドラやベルチン達も招待される事になつてゐた。

やがて、その晩も殆んど眞夜中頃になつて、ソンドラがやつて來た。彼女はスコット・ニコルスや、フレディ・セルスや、ベルチンと一緒に來たが、最初はクライドにまるで氣付かない様子をしてゐるが、やがて彼を認めて、「おやまあ、あなたが來てらしたの？」と、彼に呼び掛けた。彼女は眞赤なスペイン肩掛けを掛けて、盛装をこらしてゐた。しかしクライドは、彼女が彼に氣付いて居る事を最初から知つて居たので、折を見て彼女に近づいて行つて、心配さうに訊ねた。「今夜は僕と踊つて下さらない積りですか？」

「まあ、どうして？ 御望みならば踊りますわ。だけど私、あなたがもう、私をお忘れになつたのかと思つたのよ」彼女は擲擲ふやうに言つた。

「僕があなたを忘れるんですつて？ 僕が今夜此處へ來たのは、あなたに會ひたいため計りぢやないですか。此の前にお會ひしてから、僕には他の事は何にも考へられなかつたんですもの」

事實、すつかり彼女に引入れられて居る彼は、彼女の表面的の無頓着等には構つて居られないで、いよく彼女に惹つけられて行つた。その強さが、今や彼女を壓倒してゐた。彼の細められた眼瞼や、その中に光つて居る慾望に燃えた眼は、端で見える眼にも凄いやうな處があつた。

「まあ、あなたつて、何でも思ふ通りに言つちまふ方だね」彼女は、自分の頭の大きなスペイン鬘をいじり乍ら、彼に笑ひ掛けた。「随分いゝ事計りおつしやるわねエ」

「つまり、ソンドラ、僕の言ふ事を信じられないとおつしやるんですか？」彼は熱情を籠めて訊ねたが、此の二度目のソンドラと言ふ呼び掛けは、彼女にとつても彼にとつても、鋭い響を持つてゐた。彼は彼女が顔を顰めるかと思つてゐるが、その言葉に喜ばされた彼女は、黙つてそのまゝにして置いた。

「えゝ、さう、勿論だわ」彼女は多少曖昧に言つたが、同時に始めて多少苛々した様子を見せた。彼

女は、クライドに對してどんな態度を探つていゝのか、自分で多少解らなくなりかけてゐるのだつた。「だが、私とどのダンスを踊りたいのか、早くおつしやいよ。誰か此方に來かけて居るぢやないの」さう言つて彼女は、小さいプログラムをそつと彼の方に差出した。「十一番はどう？ 此の次ぎよ」

「それだけでですか？」
「さう、では十四番も。でも、随分欲が深いのね」彼女はクライドの眼に笑ひかけた。その笑ひ聲が、すつかり彼を虜にしてしまつた。

續いて彼女は、フランク・ハリエツトと踊り始めたが、踊つて居る間に、クライドがクリスマス前夜に招待されてる事や、ジェシカ・ハントが除夜會に彼を招待して居る事などを聞いて、彼女は直ぐ、クライドがかうした社交に成功して居る事や、彼女が怖れてゐた程重荷にならない人間である事を確かめた。彼には魅力がある——それはもう疑ふまでもない事だ。しかも彼は、こんなに彼女にのほせ上つてゐる。だから、彼がこれ程色々な人からちやほやされるのを見て、彼を彼女から奪はうとする娘が現はれないとも限らないと、彼女は思つた。しかし、虚榮と自惚れとの強い彼女は、そんな事はさせまいと決心した。そこで、その次のダンスをクライドと踊つて居る時、彼女は言つた。「クリスマス前夜にハリエツトの家へ招かれてゐるんですつて？」

「えゝ。みんなあなたの御蔭です。あなたもいらつしやるんでせう？」

「處が、大變残念ですけどね、私、他の處に呼ばれてゐて駄目なの。すつと前から、アルバニーに行く事になつてましたし、休暇中はサラトガに行く事になつてますの。私、明日立つのですけれど、でも新年には歸つて來る積りなんですの。フレツデイのお友達が、新年には、シエネクタデイで大宴會をやるらしいんですもの。あなたの従兄弟のベラも、私の弟のステュワートも、グラントも、ベルチンも、皆な行く事になつてますの。よかつたら、あなたも、私達と一緒にいらつしやらない？」
彼女は、「私と一緒に」と言はうとしたのを、「私達と一緒に」と變へたのであつた。彼女は、かうしてフアートの招待を斷らせれば、彼女がクライドを擱んで居る事を、他の連中にはつきり示せると思つて居たのだつた。無論クライドは、再び其處で彼女に會へる喜びの爲めに、直ぐにそれを承諾した。だが同時に、此の計畫に従へば、自然ベラ・グリフィスに顔を合はせる事にもなるので、クライドは、驚きと共に胸があえぐ感じがした。彼女に會へば、彼女は屹度、彼の噂を彼女の家族の者に傳へるであらうが、その結果はどうなるであらう？ 彼等グリフィス家の人達は、クリスマスにさへ彼を招ばないのではないか？ 無論クライドが、ソンドラの自動車に乗せられた事や、その後『時々俱樂部』に呼ばれた事も彼等の耳に入つてゐるが、それでも尙彼等は、何もしなかつたのであつた。それ

を聞いてギルバートは激怒したが、彼の父親や母親は、どうしたらいいかに迷ひ乍ら、その儘にして置いたのである。

彼等の計畫に依れば、彼等は翌朝までシエネクタデイに残つて居る事になつて居たが、ソンドラは、始めその事を説明して置かなかつた。しかも、クライドの方でも、ビルツから歸つて来たロバアタが、せめて、除夜の晩でもクライドと一緒に過さうとして居る事を忘れてゐた。これが、後になつて、厄介の種になつた。しかし今、ソンドラの計畫にすつかり嬉しくなつたクライドは、一も二もなく彼女に賛成をして丁つた。

「でもね」と彼女は注意深く言つた。「これからは、何處でも、餘り私に計り眼をつけてゐては駄目よ。あなたがそんな事をなさると、これから度々會へなくなるかも知れないんですもの。何時かまたゆつくり話しますがね、家の父や母は、それは妙な人達ですからね。それに、此處の友達にも、さういふ人がありますの。無論あなたが親切にして下さるのは結構なのよ。だけど、多少無頓着にしてゐるのよ——解つて？——さうすれば、少くとも此の冬の間は、あなたにお目にかゝれると思ふの。よくつて？」

彼が、餘りに烈しく彼女に詰め寄つて居る事は、彼自身も知つてゐたので、此の言葉を聞くと、たぢ

たぢとして、じつと求める様に彼女の顔を見た。「しかし、あなたも、多少は僕の事を思つてゐて下さるんですね」彼の半ば求めるやうな、半ば哀願する様な眼つきが、彼女をまた擱へて了つた。彼に心を惹かれ乍ら、尙大膽になり得ない彼女は、今後どうしていゝか解らない乍らに答へた。「さア、どうですか。何れ話す時があるかも知れませんが、でも、今は話せないの。私、多少はあなたが好きですわ。時には、他の人達よりも、あなたを好いてゐるのではないかと思ふ事もあるのよ。でも、私達は未だお互ひに、よく知合つてゐないのぢやありませんか。でも、シエネクタデイには、兎も角一緒にいらつしやるでせう？」

「え、無論参ります」

「詳しい事は手紙で御知らせするか、御宅に御伺ひするかしますわ。お宅に電話があつて？」

彼はその番號を知らせてやつた。

「でも、何か豫定の變更があつたり、御約束を破るやうな事があつたりしても、悪く思つては駄目ですよ。その中に、何處かで屹度、御眼に掛りますからね」さう言つて彼女は、微笑した。クライドは、息もつけない思ひがした。彼女がこんなに眞面目に彼に話し掛けて呉れる事や、時には彼の事を思つて呉れる事もあると言ふだけで、彼はもう澤山であつた。此の美しい令嬢が、彼と一緒に樂しまうと

して居るのだ。これ程澤山の友達や崇拜者に圍れて居る此の驚く可き令嬢が、彼を今拾ひ上げようとして居るのだ。

二十八

翌朝の六時半、グローバースビルから歸つて一時間も休むと、クライドは直ぐ起上つたが、彼の心の中には、ロバアタとの事をどうしようかと思ひが、こんがらがつてゐた。彼女は今日、ビルツへ歸る筈であつた。彼はフォンダまで一緒に行く約束をしてゐた。しかし今、彼は行きたくなかつた。無論彼は、何かの口實を見つけないならなかつたが、しかし、何と言つたものだらう。

幸ひにその前日、彼はホイガムがリゲットに言つて居た事を聞いてゐた。それは、今日、工場の終る頃にスミリーの部屋で、此の工場の部長會議があると言ふ事だつた。リゲットの部屋の一部の長であるに過ぎないクライドは、それに出るわけではなかつたが、彼はこれを理由にしようと思つて、晝食後一時間計りしてから、一つの手紙を彼女の机に落した。

「非常に残念だが、三時から階下で部長會議があるので、フォンダに行けない。しかし、その前に一寸、あなたの部屋に行く積りです。あなたに上げたいものがあるから、必ず待つて居て下さい。しか

し、どうぞ悪く思はないで下さい。止むを得ない事ですから。水曜に歸つて來たら必ず行きます。

クライドより

その場で直ぐ讀む事の出来ないロバアタは、最初、屹度何かよい事だらうと思つて、喜んでゐた。しかし二三分後、休憩室でそれを開けた時、彼女の顔色は變つた。昨夜、約束を破つて來なかつた事と言ひ、今朝は今朝で、何か考へ耽つて居る様子と言ひ、更に今日來られないと言ふ此の突然の變化には、一體何があるのだらう？ 部長會議に出る事も、伯父さんの招待に出る事も、どちらも避けるわけには行かないのであらう。しかし、前日、彼女に會へないと言つて居る時の彼の態度は、別れに望んで居る人とも見えない快活さではなかつたか？ 何れにしても、彼女が三日間不在である事は彼にも解つて居る筈だし、その別れがどんなに彼女につらいかも、解つて居る筈だ。

忽ち、彼女の氣持は、希望から絶望へと變つた。彼女にとつて、人生は何時もかうであつた。今、クリスマス前の二日前に、彼女を迎へる歡聲の外には何も無いビルツに歸つて行く時でさへ、彼女は、彼に會ふ事さへ碌々出来ないではないか。ロバアタは、自分のベンチに歸つて行つたが、その顔には、突如として迫つて來た不幸が、あり／＼と見えてゐた。彼女は氣乗りがしない様子で、のろ／＼と働いて居た。その變り方は、クライドの眼にも留つたが、ソンドラに對して逆上せ上つて居る彼は、自

ら悔いようとも思はなかつた。

一時になつて、何處かの工場の汽笛が、土曜の終業時間が来た事を知らせると、クライドとロバータとは別々に彼女の部屋に歸つて行つた。途中で、クライドは、何と彼女に言つたものだらうかと考へてゐた。一體どうしたらいいだらう？ 突如として、その色を失つた此の愛情を、何としてごまかしたらいいだらう。十五日前までは、あれ程に強かつた此の二人の關係を、極端に無興味になつた今後、どうして續けて行つたらいいだらう。もう、彼女を愛さなくなつたのだとは、どんなにしても言へないと思つた。それは餘りに残酷であつたし、ロバータが何と言ひ出すか解らなかつたからである。而かもソンドラに對して、かうした懺れや計畫を持つてゐる今、知らない顔をして、元のまゝに彼女を愛し續ける事も彼には出来なかつた。それは不可能だ。のみならず、最初ソンドラの氣持が解つた時にも、彼はロバータを棄て様とは全く思はなかつたではないか。しかし、何故思はなかつたのだ？ ソンドラ程の地位や美さに比べて、ロバータの彼に與へ得るものは何だ？ しかし、一方でソンドラと結ぶかも知れない關係を考へ、他方で變らない深い愛を持つてゐる様に見せ掛ける事は、立派な事だと言へるだらうか？ クライドがかうして考へ續けて居る時、彼より先に自分の部屋へ歸つたロバータは、どうしてこんな事が、突然、二人の間に起つて來たのだらうと考へてゐた。こんなに無頓着に

クリスマス前の約束を破つた上に、三日間も會はなくならうとするのに、フオンダまで見送つても呉れない——これは一體どうした事だらう？ 會議があるからだとかクライドは言ふが、本當だらうか？ 彼女は、必要があれば四時まで待つてもいいと思つたが、クライドの様子には、それさへ受けつけさうもない或る物があつた。酷くそわ／＼した逃げ腰さへ見えるではないか。一體これはどうしたと言ふのだらう？ それも、かうした仲になつてから、未だ幾月も経たない今ではないか？ 最初の中は、否、今日までも、二人はお互ひに別れられない氣持で結びついて來たのではないか？ 何か不吉な變化があるのではないだらうか？ 彼等の驚く可き愛の夢をぶち壊すやうなものが、起りつゝあるのではあるまいか？ 彼女は既に彼に全部を捧げて居るのだ。彼の信實と不信實とは、彼女にとつては一切のものだ。彼女の將來に對しても、彼女の命に對しても。

彼女が此の新しい問題を考へて居る時、クライドがクリスマスの贈物を抱へて、彼女の部屋へ入つて來た。彼は未だ、ロバータを出來るだけなだめやうと思つて、出來るだけ尤もらしい顔をして居やうと考へて居た。

「やア、どうも困つた事になつちまつてね、ロバータ」彼は、快活と同情と不安との混り會つた顔をして見せ乍ら言ひ出した。

「今日、こんな會議があるなんて、二時間計り前まで、僕はまるで知らなかつたんだ。しかし、會社の事だから、どうにも仕様がななんだよ。君、悪く思つてはならないだらうね？ どう？」だが、彼は既に、工場や、此の部屋での彼女の様子で、彼女が眞暗い氣持で居る事を察して居た。「しかし、一寸でも君に話す事が出来て、まあよかつたよ。實は昨夜、これを持って来る積りだつたのだが、他の用事で駄目だつたのだ。全くくさくさしてしまふよ。全くだよ」彼はさう言ひ乍ら、贈物を彼女に渡した。

これが若し昨晚贈られたのであつたなら、彼女はどんなに喜んだか知れなかつたのだが、今はその熱も消え果て、その箱をテーブルの上へ置いたゞけだつた。

「昨晚はどうでしたの。御愉快でした？」彼を彼女から奪う出来事が、その中にあるのではないかと思つて、彼女は訊ねた。

「あゝ、多少は愉快だつたよ」クライドは、出来るだけごまかさうと思つて答へた。「僕は只、伯父の處で晚餐を招ばれるだけかと思つてたのだが、行つて見るとそれだけでは無かつたんだ。本當の用事は、ベラとミラとのお伴をして、グローバースピルに行つて呉れると言ふ事だつたんだよ。あそこには、ステイルと言ふ大きな手袋屋の金持が居るだらう？ 其處でダンス會があつたのだが、ギルが行け

ないので、僕に連れて行つて呉れると言ふのさ。しかし、あんなダンス會なんて、大して面白くないし、濟んだ時には僕もほつとしちやつたよ」彼は、ベラやミラやギルバートの名前を非常に親しい者の様に言つたが、その調子がロバアタに深く印象した。

「では、此處にいらつしやる時間なんて、まるでありませんでしたのね」

「あゝ、さうなんだ。皆なが歸るまで待つてなくちやならないんだからね。とても一人では歸つて来られないんだ。しかし、その贈物を開けて見ない」彼は、彼女の氣持を變へ様と思つて、さう言ひ足した。

彼女は、その贈物のリボンを解き始めたが、同時にその會で起り得べき色々な事柄に、彼女の思ひを集めてゐた。ベラとミラとの外に、どんなお嬢さんがその會には居たのだらう？ 或ひは其處に、彼が近頃興味を持つたお嬢さんが居たのではないだらうか？ 彼は何時でも、ソンドラ・フィンチュレーだの、ベルチン・克蘭ストンだの、ヂル・トランバルだのと言つて居るではないか。若しかりたら、その人達が、その會に行つてたのではないかしから。

「あなたのお従兄弟さんの外には、どんな人が行つてらしたの？」と、突然彼女が訊ね出した。「随分澤山ゐたよ。此の附近の色んな處から、二三十人も來てるんだ。皆な君の知らない人だよ」

「ライカトガスからも行つた人があるの？」

「あゝ、三人。ベラがさう言ふもんだから、ヂル・トランバルと妹とを連れて行つたし、僕等が行つた時には、アラベラ・スタークや、パーレー・ヘーンスがもう來てゐたよ」彼は自分に興味がある様な女の事は、ソンドラを始め誰の事も言はなかつた。

しかし、それを話す時の彼の態度には——その聲の調子にも、眼の色にも、ロバアタを満足させ得ないものがあつた。その新しい發見が、いよく彼女を苦しめたが、今、餘りにクライドを苦しめることは、不得策だと思つた。餘り問ひ詰めれば、彼が怒るかも知れないと思つたからである。何れにしても、彼が、かうした社會の人達と彼自身とを同等の人間の様に言ふことは、二人が始めて知つた時以來、變りのない事であつた。彼女は、自分が何かの要求をして居ると思はれる事も、嫌であつた。

「私、昨夜は、あなたに贈物を上げようと思つて、随分會ひたかつたの」彼女は、彼に訴へると言ふよりも、寧ろ自分の氣持を變へたい爲めに、そんな事を言ひ出した。その聲には、クライドの聞き馴れた悲しきと、訴へる様な物が籠つて居たが、今の彼には、それも餘りこたへなかつた。

「しかし、そのわけはもう話したぢやないか」とクライドは多少嚇すやうな調子で言つた。

「えゝ、解つてますわ」彼女は、自分の本當の氣持を隠さうとして、悲しきうに答へた。同時に、紙を開いて、化粧箱の入り居る箱をあけた。開けて見ると、彼女の氣持は多少變つた。彼女は曾つて、これ程高價な珍らしいものを、手にした事がなかつたからである。「まア、綺麗だ事。本當に綺麗だねエ」その瞬間、我にもなく嬉しくなつて、彼女は叫んだ。「こんな物を下さるなんて、私夢にも思つてなかつたわ。私の贈物なんぞ、とても駄目だわ」

彼女は直ぐ、自分の贈物を取る爲めに立つて行つた。しかしクライドは、これ程の贈物も、彼女に與へる悲しみを償ふには足りない事を知つてゐた。彼の愛が續く事だけが、あらゆる物に勝る贈物である事を知つてゐたからだ。

「氣に入つた？」彼は、彼女の氣を變へさせようと思つてさう言つて見た。

「無論よ、あなた」彼女は嬉しきうにそれを見て答へたが、直ぐ憂鬱さうに「でも、私のはそんなに、ものではなくつてよ」と言ひ添へた。彼女は、自分の計畫にも、少からず失望したらしかつた。

「でも、私のだつて、あなたのお役には立つのよ。あなたが何時も身につけて、心臓の隣りに持つて居て下さる事が望みなんですもの」

彼女の渡した小箱には、エバーシャープ鉛筆と、銀の裝飾を施した萬年筆とが入つて居た。二週間

前であつたならば、彼女を抱いてその悲しみを慰める彼であつた筈だが、今は只部屋の中に突立つたきりで、どうしたものかと迷つてゐた。何時もの様な表示をするには、彼の氣持は餘りに白々としてゐた。彼は只薄ッぺらな言葉を並べるより方法がなかつた。

「こいつは素的だ。丁度僕も欲しかつた處だ。何を貰つたよりも有難いね」彼は非常に嬉し相な顔をしてそれを眺めてから、何時でも使へる様にポケットに挟んだ。しかし、彼女がまだしよけて居るのを見ると、これまでの楽しさを思ひ出して、彼女を抱いて接吻した。彼女が彼の首に抱きついて、涙を流して居る間、彼もじつと抱きしめて、別に心配する事はない。水曜日に歸つて來れば、また、これまで通りの通になるのだと言つてゐたが、しかし、自分では、嘘を言つて居る事に氣付いてゐた。彼は、餘りに早い自分の氣持の變り方に、多少變な氣持さへしてゐた。他に女が現はれた爲めに、こんなにも人の氣持は變るものだらうかと思つて見たが、しかもそれが事實であるのを、どうする事も出来なかつた。彼女が未だ彼の愛を信じて居るのだと思ふと、彼は本當に氣の毒になつた。

かうした彼の氣持は、ロバアタにも通じてゐたので、彼等の氣持がびつたりと會ふわけには行かなかつた。彼の様子には落着きがなかつたし、彼の抱擁は無感動であつたし、彼の言葉の調子には、本當のやさしさが缺けてゐた。その證據には、彼は間もなくその抱擁を解いて、時計を見てから言つた。

「さアもう行かなきゃならない。三時までに二十分しかないからね。一緒に送つて行けるといふんだけど、まア、君が歸つて來てから會ふ事にしよう」

彼は身を踢めて接吻したが、その時、ロバアタは、彼の氣持が何時になく冷たい事をはつきりと感じた。彼は面白さうで親切ではあるが、彼の思ひは他所に行つて居る。殊に此の頃はさうだ。彼女は一生懸命に自信を持たうと努め乍ら、寧ろ冷靜に言つた。「え、時間にお遅れにならない方がいゝわ、クライド、急いでいらつしやい。でも私、遅くもクリスマスの晩までには歸つて來たいと思ふの。クリスマス午後の、早く歸つて來たら、あなた此處にいらして下さる？」

「あゝ、勿論、來るとも」別に差支へる様な豫定もなかつたし、それ程大膽に彼女を棄てる氣にもならなかつたので、彼は心からさう答へた。「何時に歸つて來る積りだい？」

八時頃だと聞いて、彼は、その時こそは、彼女とゆつくりしやうと決心したが、直ぐまた時計を引出して「では、行つて來るよ」と言ひ乍ら、扉口の方へ行つた。

だが、氣が立つて居るロバアタは、彼の着物の衿を掴んで、その眼に見入り乍ら、半ば訴へる様に、半ば要求する様に言つた。「では、クリスマスの晩は間違ひなくね。いゝ？ クライド。今度こそは他の約束なんぞしては嫌よ。よくつて？」

「大丈夫、心配する事はないよ。皆な、止むを得なくつてかうなつたのだが、木曜日は確かだよ」彼はもう一度接吻してから、急いで出て行つた。かうしたやり方が、餘り賢明でない様な氣もしてゐたが、その他には別に方法もない氣がした。男が女に別れる時には、多少の策略は要る。だが、彼にその策略があつたやうか？ その技巧を知つてゐたやうか？ 此の際、彼の爲めに、もつといふ方法があつた事は確かだ。だが、既にあのソンドラや、除夜の會に心を奪はれて居る彼には、どうする事も出来なかつたのだ。彼は、ソンドラと一緒にシエネクタデイの夜會に行く事計り考へてゐた。その會では、屹度、彼女の眞意が解る機會があるだらうと思つて。

クライドが出て行くと、ロバアタは變に頼りない懶い氣持で、窓の中から彼を見送つて居た。彼女は、自分の將來がどうなるんだらうと思つてゐた。クライドが若し自分を愛さなくなつたらどうしよう？ 彼に捧げ盡した彼女の將來は、只彼の氣持一つに懸つてゐるのだ。彼はもう彼女に倦きたのだらうか？ もう會ひたくなつたのだらうか？ さうだとすると、何と言ふ怖ろしさだ。さうなつた時、彼女はどうしたらいいだらう？ こんな事ならば、こんなに早く、こんなに易々と、男の要求に従ふのではなかつたのに。

彼女は、窓の外、雪の積つた木の枝を眺め乍ら、溜息をついた。折角の休暇を、こんなにして歸

つて行くのか。しかも、あの人は此の町の社交界で、あんなにも高い地位を占めて居るのだ。其處には、彼女の企て及ばない色んな愉快が、彼を待つて居るのだ。悲しげに頭を振つた彼女は、鏡の中を覗き込んでから、僅かな贈物や持物を集めて、やがてその部屋を出て行つた。

二十九

ビルツのじめくした田園は、ライカーガスから歸つて來たロバアタを、失望させるに充分であつた。其處には、昔の健康な情緒を打壞す荒廢の跡が、歴然としてゐたからである。停車場に使つてあるほろ／＼の百姓屋で、汽車から降りた彼女は、十年前前から着て居る古外套を着た父親が、がた／＼の百姓馬車を持つて、其處に待つて居るのを見た。彼は相變らず廢殘の疲れを見せて居たが、娘の姿を見ると、その顔も急に輝いて來た。彼女を好きで堪らない父親は、二人で並んで馬車に坐ると、嬉しさうに何か喋り乍ら、石ころの田舎道を、彼等の百姓家へと向つた。道々ロバアタは、子供の時から知つて居るあらゆる立木や、曲り角や、道標に眼を留めたが、彼女の心には何の喜びもなかつた。凡ては餘りに單調であつた。ぶら／＼病のタイタスや、息子のトムの

無能力では、いくら母親が働いて見ても、親譲りの田地は只重荷になるばかりだった。去年、二千弗の抵當に入れたのもそのまゝになつて居るし、北側の煙突も未だ壊れたまゝになつて居たし、梯子段はいよく壊れて来て居たし、壁も垣根もその他の建物も、以前と何の變りもなかつた。——幾らか變つて居ると言へば、あらゆるものが雪に被はれて、繪の様に綺麗になつて居る事だけだった。家中の家具さへも、昔のまゝに置いてあつた。そこには、母や妹や弟が居たが、彼女とクライドとの事などは夢にも知らないで、心から彼女の歸つて来た事を喜んで呉れた。だが、自分自身の事をしり、クライドの曖昧な態度を知つて居る彼女は、何時になく沈んだ顔をして居た。

實際彼女は、クライドと結婚しさえすれば、親達の道徳的標準にも一致し得る事を考へて、その點で自ら慰めて来たのであつたが、此の頃の世の中の進歩を知らない彼等は、それさへも墮落だと考へさうに思へた。——それは彼女を、しよけさせるに足りた。

しかし、それよりも尙彼女を苦しめた事は、彼女が最初からクライドに對して持つて居た幻影に對して、母達の信頼を得る事が出来ないと言ふ點であつた。かうした望みは彼女には高過ぎると、母が思ひはしまいかと思つたからである。屹度母は、クライドと彼女との關係に就いて、色々の事を聞くだらうが、それを何と答へていゝかと迷つて居た。同時に、彼女が若し何かの信頼を持つて居ないと

すれば、彼女とクライドとに關する凡ての厄介な疑惑を、秘密にして置く可きであつた。

暫くトムやエミリーと話した後で、彼女は、クリスマス準備で忙しく働いて居る母親の處へ行つた。彼女は、途中で見て来た此の村の事や、ライカーガスの生活について話さうと思つて居たのだが、入つて行くと、母親が見上げて言つたうどうだね？ 此の村へ歸つて見ての氣持は。ライカーガスから歸つて来たのでは、何を見てもつまらないだらうね」その様子で、ロバアタは、母親が自分をすっかり偉くなつた人間の様に思つてゐるのだと察したが、直ぐ母親の處に寄つて行つて、嬉しさうに抱きついた。「まア、お母さん。何處へ行つたつて、お母さんが居らつしやる處位、いゝ處はありませんわ。さうお思ひにならない？」

母親は只嬉しさうに娘の顔を眺めてその背中を叩いたが、「さうだとも、さうだとも、ロバアタ。何處に行つても家程いゝ處は無いからねえ」

その母の言葉には、二人の間の深い信頼がこもつて居た。お互ひの幸福を望み會ふ完全な卒直さがその中にあつたので、ロバアタはあやふく涙をこぼさうとした。彼女は、咽喉が詰り、眼がうるほふのを感じたが、自分の氣持を見せまいとして、一生懸命に我慢した。彼女は、この母に、何もかも話して了ひたい慾望を感じたが、クライドの事を考へると、容易に取去る事の出来ない隔てが、二人の

間にある事を感じないで居られなかつた。たとひ相手は母親でも、此の地方の因襲は餘りに強い事を考へたからだつた。

彼女は、何とかして、早く自分の問題をぶちまけて、母親の助力は得られないまでも、せめてその同情は得たいと思つて、一瞬間躊躇したが、口に出しては言へなかつた。「私、お母さんがライカーガスに來て下すつたら、どんなにいゝかと思つて居るのよ。でも——」彼女は出し抜に、大切な事を云ひさうになつて居るのに氣付いて言葉を切つた。母が近くに居てさへ呉れ、ば、クライドの要求にも抵抗出來たのと思つてゐたからだつた。

「あゝ、私が居なくつて、お前はさぞ淋しいだらうと思ふけれど、しかしまア、その方がいゝのだよ。知つてる通りのこんな田舎だし、それにお前はお前の仕事が好きなんだからね。さうだらう？ 今の仕事は氣に入つてゐるんだらう」

「えゝ、仕事は別に悪くはありませんわ。それに、私が多少でも此の家を助ける事が出来るのですもの。でも、たつた一人で暮してゐるのは、そんなにいゝ事ではありませんわ」

「しかし、何だつてニュートンの家を出たのだい？ グレースはそんなに面白くない子かい？ 随分仲がよかつたらしいぢやないか」

「えゝ、始めはよかつたのよ。でも、あの男、男のお友達がないでせう？ だから、男の人が鳥渡でも私に親切にすると、怖ろしく私に嫉妬をやくんですもの。私が行く處へは何處へでもついて來るし、あの人が行く處へは、何處へでも私を連れて行かうとするんですもの。だから、私一人では何處へも行けないの。それは、お母さん、變なものよ。女二人に男一人では、どうにもならないぢやないの」

「あゝ、それはさうだね」と、母は一寸笑つたが、直ぐ言ひ足した。「その男の人つて誰だい？」
「グリフィスさんと言ふ方なの」彼女は一寸躊躇してから言つた。此の村の單純な生活と、あの町での例外的な生活とが、對照的に彼女の眼の前を通り過ぎたからだつた。「でも、その人の名前は、未だ誰にも言つて貰つては困るのよ。その人がいけないつて言つてゐるんだから。その人の伯父さんが、私達の會社の社長さんで、親類がみんなお金持なんだけれど、會社の人は會社で働いて居る人とどんな交渉を持つてもいけないと言ふ規則があるんですもの。つまり、どんな女工とも交際してはいけないと言ふのよ。だから、その人も、他の女工とは交際もしないのだけれど、私だけは好きだつて言ふし、私もその人が好きなのよ。でも、私はもう直ぐあの會社を止して、他の會社に代らうと思つて居るのだから、さうなればもう少しも差支へはないの。誰に話しても差支へはなくなるんですもの」
しかし、此の頃のクライドの様子を考へ、豫じめ結婚の約束をしないで身を任した自分を考へて居

るロバアタは、此の言葉を本當に信じて居るのではなかつた。彼はどんなことがあつても、二人の關係を他人に話させはしないだらう。無論彼女も、クライドが今後愛し續けて、結婚して呉れないのだとすれば、誰にもそれを知らせたくなかつた。そんな事になれば、彼女の地位はどんな惨めな、恥しいものになるか解らなかつたからである。

一方アルデン夫人は、かうして突然此の秘密な關係を知ると、酷く心配になつて來た。無論ロバアタは、立派な、注意深い、賢い娘ではあるが、それでも、どんな間違ひがあるかも知れない。だが、いや、いや、ロバアタに限つて、そんなに易々と危険な道に落ちる事はないだらう。彼女は餘りに保守的で、善良な娘だから、「社長の親類だ」と言ひだつたね。では、あのサミュエル・グリフィスさんの親戚だね」

「え、あの方の甥ですの」

「矢張りその會社に關係して居る、若い人なんだね」聞き乍ら母親は、そんな地位の高い人が、どうしてロバアタ等に心を惹かれるのだらうと思つてゐた。實際それは、その事自身ですでに厄介な事實であつた。ロバアタが今結んで居らしいさうした關係は、世間の因襲から言つて、怖ろしい事だつたからである。だが、同時に、ロバアタの様な器量と働きのある娘ならば、或る種の危害を加へられな

くとも、さうした人と交りを結ぶに足ると思つてゐた。

「え、」

「どんな人だい？」

「大變綺麗な方よ。それで居て、私にとつても親切なの。その人が立派な人物だからいゝ様なもの、さうでなかつたら、あの人の今の地位は、随分危ない地位だと思ふの。その人は工場の女工達の監督をしてるんだけど、皆な社長の甥だと知つてるものだから、自然、女工さん達がその人を尊敬する様になつて來るんですもの」

「さうかい。それはまあいゝ事だね。立派な人物の下で働くのが何よりだからねエ。トリツベットミルに居る時のお前は、仕事の事などはそんなに考へて居なかつたぢやないかい。その人はちよいとお前の所へ見えるのかい？」

「え、ちよいと」さう答へてロバアタは、多少赤くなつた。母親に對して、すつかり打聞ける事の出來ない自分に、氣付いたからである。

アルデン夫人もそれに氣付いたが、彼女が恥しがつて赤くなつたのだらうと思つて、冷かす様に尋ねた。「お前もその人が好きなんだね。さうなんだらう？」

「え、さう、さう、お母さん」

「その人はどうなんだい？ その人も、お前を好いてるのかい？」

ロバアタは、臺所を横切つて、窓の所へ行つた。見下すと、共同井戸に連るゆるやかな傾斜地の下から、肥沃な畑にかけて、一體に並んで居る腐りかけた小屋の様子には、此の家の陥つた零落が、まぎ／＼と見えて居た。それは此の十年の間に、眼立つて来た事だつた。眺めて居乍ら彼女は、自分の空想とは正反對の今の身の上に、その景色を思ひ比べてゐた。當然にそれは、クライドの事をも思ひ起させた。自分達は幸福になれるのだろうか？ それとも、何時までも此の憂鬱に閉ぢ込められて居なければならぬのだろうか？——此の戀は成功するのか、しないのか？ 本當にクライドが、彼女を愛してゐて、此の憂鬱を取去つて呉れるならば、彼女や彼女の母の零落も、消えてなくなるであらう。しかし、彼が愛して呉れなければ、彼女のあらゆる夢や望みが消えてなくなる計りでなく、他の家族の上にも、殊に母親の上に、悲しみが来るであらう。ロバアタは、母親に何と答へようかと思つたが、とう／＼言つた。「え、自分で私を好いてると言つてるのよ」

「その人は、お前と結婚しようと思つて居るのかい？」

「え、それはね、お母さん……」彼女が未だ言ひ終らない中に、エミリイが玄關から飛込んで來

た。「ギフォウドが來たわよ。自動車に乗つて來たわよ。屹度誰かに乗せて貰つて來たのよ。大きな包みを四つ五つも持つてるんだもの」

直ぐにトムが、新しい外套を着た長兄と一緒に這入つて來た。

「おや、ギフォウド」と母親が叫んだ。「よくまあ、こんな早く來られたねエ。九時までは來られな

いだらうと思つて居たのに」

「え、僕もさう思つてたのですが、シエネクタデイのリイリツクさんの處へ行つたら、自動車で連れて歸つてやらうと言つて下すつたものですからね。トリツベットミルで、ボツブ・マイヤアに合つたですが、あいつ、とう／＼二階を建て増しましたよ」と言つたが、ロバアタの方を向いて、「あいつの事だから、來年にでもならなきや屋根も葺けないだらうと思つたがね」

「え、私もさう思つてたわ」とトリツベットミルの事をよく知つてゐるロバアタも答へた。その間に、彼女は外套を脱がせて、その包みを食堂のテーブルの上に積重ねたが、エミリイはそれを、珍らしさうに眺めてゐた。

「駄目だよ、エミリイ」とギフォウドは小さい妹に言つた。「クリスマス朝までは、誰も手をつけずに置くんだから。未だ誰もクリスマス・ツリーを伐らないのかい？ 去年は僕が伐つたんだつたつけ

「今年も矢張りお前だよ」と母親が言った。「お前が歸つて来るまで待つてると、トムに言つてたんだよ。お前は何時もいゝ木を伐つて来て呉れるからね」

丁度其處へタイタスも、一本の大きな丸太を抱へて、臺所口から這入つて来た。その饗れた顔や骨張つた腕は、若い連中の何處か希望に充ちた様子と、烈しい對照をなしてゐた。それに氣付いたロバアタは、直ぐに父親の處へ行つて、抱きついて「お父さんに好い物を、サンタクロースが持つて来て呉れてますよ」と言つた。彼女は、父親が家の廻りで働く時の爲にと思つて、赤と黒の着盤縞の合羽を買つて来て居るのだつた。

やがて夕飯が近づく、母親を手傳はうと思つて、彼女はエブロンを取りに行つた。その後は、二人きりになる事がなかつたので、クライドの問題に就いては、數時間、全で話せなかつたが、やがて或る一寸した機會があつたので、ロバアタは言つた。「ねえ、でも、未だ誰にも私達の事を話しはしないでせうね。私、誰にも話さない約束をしてるのだから、お母さんも話しては嫌ですよ」

「あゝ、話さないとも。しかし、私には未だ、どうもはつきりしない處があるのだがね。しかし、お前の事はお前が一番よく知つてゐるんだからね。もう御前も子供ではないのだから。自分の事は自分で

氣をつけるだらうよ、ねえ、さうだらう？」

「えゝ、大丈夫よ、お母さん。御心配になる事はないわ」彼女は、母の顔に心配さうな影が浮ぶのを見て、さう言つた。他に色々心配のある彼女だから、此の上心配を掛けない様にと彼女は思つた。

日曜日の朝になると、ガール夫婦が、ホーマーの町の色々な噂を持つてやつて来た。無論彼女の姉は、彼女程器量よしでもなかつたし、その夫のフレッド・ガールも、ロバアタにはとても興味の持てない様な男であつたが、その平凡な夫に仕へて、何の不平もなく、小じんまりと暮して居るらしいアグネスの様子を見ると、クライドの事で惱み抜いてる今のロバアタには、色々な迷ひが起つて来た。クライドの様な男と結婚して、不得要領な地位に身を置くよりも、無能で、面白さはないが、堅實で律義なフレッド・ガールの様な男と結婚する方が、いゝのではないかと思つた。今日も彼は、此の一年間に二人の上に来た、色々な進歩をあらひざらひ話して居たが、彼はホーマーの町で教師を勤める傍ら、小さい書店兼文房具屋を始め、玩具部とソーダ水部で主な収入を擧げてるとの事だつた。彼等の仕事は相當に繁昌して居るらしく、巧く行けば、來年の夏までに、アグネスの爲めにミツシヨン・パーラーシユートを買ふのだと言つて居たし、此のクリスマスには、既に一臺の蓄音器を買つたと言つて居た。アルデン家の人達の爲めに、彼等が持つて来た贈物も、それ／＼相當な物であつた。

かうした來客の爲めに、その日の朝飯は何時になく遅くなつたが、食卓につくとガーベルは、持つて來た一枚の『ライカーガス・スターを』讀み始めた。彼の店の問屋がライカーガスにあるので、彼もその町の新聞を讀んで居るのだつた。

「ロバアタ。あなたの町の此の頃の景氣は大したものらしいね。此の新聞に依ると、グリフィスの會社では、パファローからだけで、十二萬個のカラーの注文があつたさうぢやないか。大變な商賣だなア」

「さうですか。私達には一向何も解りませんが、随分忙しい事は忙しいのよ、屹度繁昌してゐるんでせうよ」

「素晴らしいものらしいよ。噂では、今度またイリオオンに、シャツだけの工場を新しく建ててゐるさうぢやないか。そんな話を聞かなかつたかい？」

「さア、聞きませんでしたわ。他の會社の話ではありませんか」

「それはさうと、あんたが言つてた、あんたの部屋の頭の名は何と言つたつけ？　グリフィスではなかつたかね？」

彼は社説ページを開け乍ら、突然訊ねた。

「え、さう、グリフィス——クライド・グリフィスさんですわ。何故？」

「いや、今鳥渡、その名前を見たやうだつたからさ。その男ではないかと思つて。あ、これだ、此の人だらう？」

彼は指で、その記事をおさへて見せた。それにはかう書いてあつた。

「ヴァンダ・ステイル嬢の主催する非公式舞踏會が、金曜日の夜、グローバースビル市の同嬢邸に於て行はれたが、ライカーガス社交界よりも多數知名の士の出席を得て、盛況を極めた。出席者中にはソンドラ・フィンチユレー、ベルチン・克蘭ストン、ヂル及びガートルード・トランバル、バーレー・ヘーンスの諸嬢、及び、クライド・グリフィス、フランク・ハリエツト、トレシー・トランバル、グラント・克蘭ストン、スコット・ニコルソンの諸氏あり。舞踏會は例の如く深更にまで及び、ライカーガスの諸氏は黎明に及んで自動車で歸つて行つた。此の團は、シエネクタデイのエラーズライス家に於ける除夜會にも出席すべく、既に喧すしく宣傳されて居る」

「あの町では相當な男らしいね」ロバアタが讀んで居る間も、ガーベルはさう言つた。

これを読んで、先づロバアタが思つた事は、此の記事と、クライドが彼女に言つた仲間との間に、多少の相違が見える事であつた。第一に、其處にはグリフィス家のミラやベラの名が擧げてなかつた。だが、他の連中の名前は、クライドが度々話す事なので、彼女も既によく知つてゐた。ソンドラ・フィンチュレー、ベルチン・克蘭ストン、トランバル家の娘達、パーレー・ヘーンズ。彼はそんな會は餘り面白くない様に言つてゐたが、しかし此處には非常に賑やかだつた様に書いてあるし、それに、彼女が當てにして居た除夜の晩も、既に會の約束がしてあるではないか。しかも彼は、此の除夜の約束は嘸氣にも出さなかつた。屹度、今度もあの金曜日の晩と同じやうに、その場になつて、何かの口實を設けるのだらう。まあ！一體これはどうしたと言ふのだらう？

忽ち、彼女の歸郷の喜びは消え失せて了つた。彼女は、クライドが彼女を本當に思つて居るのかどうか疑ひ始めた。彼女の氣持は眞暗であつた。こんな田舎で、彼に見棄てられて、結婚もせず、家庭もなく、子供もない女になつたら、世間は何と言ふだらう？ たとひ今は彼女を愛し續けて居るにしても、こんな事が度重なれば、結局彼女を見棄てるのではないだらうか？ さうなれば、將來他の男と結婚する場合にも影響するし、ことに依ると、結婚を不可能にするかも知れない！

彼女はすつかり黙り込んで了つた。「その男だらう？ ね」とガーベルに訊ねられても、彼女は一言

も答へないで、「一寸御免なさい。私、靴から出して来る物がありますから」と言つて、急いで彼女の二階の部屋に上つて了つた。彼女は寢臺の上に坐つて、かうした時の癖で、兩手を顎に當て、床の上を見詰めてゐた。

クライドは今何處に居るのだらう？

どの娘をステイルの會に連れて行つたのだらう？ 彼はその女を非常に好いてゐるのだらうか？

今日が日まで、彼女はクライドにそんな女があらうとは、考へても見なかつたのであつた。

だが今は——今は！

彼女は立ち上つて、窓の處に行つた。見下すと、其處には、娘時分にあれ程人生の美しさに心を動かされた、あの果樹園があつた。畑は今、慘めに荒んで居た。樹々は今枯れ果てた様に、裸で凍りつてゐた。一面の雪。倒れかゝつた小屋。しかもクライドは、彼女から離れて行かうとして居る。突然、彼女は、一刻もかうしては居られないと思ひ出した。出来るならば、今日の中にも立つて、ライカーガスへ歸らなければならぬ。たとひ普通の愛情に返す事が出来ないにしても、せめて他の女に彼の時間を捧げ盡すのを助ける事だけでも出来るだらう。確かに、かうして彼から離れて居る事はよくない事だ。彼女が居ない爲めに、彼が他の女に見返るとすれば、それは自分の過だ。直ぐに彼女

は、どんな口實で、此の家を出ようかと考へ始めた。しかし、これ程の準備が出来て居るのに、突然歸ると言ひ出す事が全然無理である事に氣付いて、豫定通り、クリスマスの午後まで、此の家に居る事にきめた。

しかし、その間も、彼女の心は只クライドの上に住つて居た。クライドの今の氣持や、將來の結婚に就いての決心を、どうして確かめよう。——それ計り考へてゐた。若し彼が、彼女を欺いてゐるのだとしたら、どうしてそれを改めさせよう？ 二人の間で嘘をつく事は悪い事だと言ふ事を、どうして彼に感じさせよう？ 他の女を夢想させる代りに、彼をすつかり彼女のものにするのには、どうしたらいいだらう？

どうしたらいいだらう？

三十

しかし、ライカーガ스에歸つて來たロバアタには、クライドから何の知らせもなかつたし、何の辯解も言つて來なかつた。と言ふのは、その間にグリフィス家で、クライドに就いて、或る問題が起つてゐるからである。實は、例のステイール家のダンス會があつた後、ロバアタが讀んだと同じ記事が、

ギルバートの眼に入つた。丁度、月曜日の朝、朝飯の後で一杯のコーヒーをすつて居る時、はしなくも彼は此の記事を見たのだ。その瞬間、彼はかちりと齒の音をさせて、茶碗を置いて讀み直し始めた。丁度その時は、母親だけが側に居たが、クライドに關しては誰よりも自分に近い意見を持つて居るのを知つて居るので、彼は直ぐその新聞を母親の方へ廻した。

「どうです。偉い人間が社交界に飛出して來ましたよ」彼は皮肉な調子でさう言つて、險はしい眼の色になつてゐた。「此の調子だと、今度は此の家で招待と言ふ事になりますかな」

「誰だい？」グリフィス夫人も、その新聞を取上げて、靜かにその記事を読んだが、彼の名前を見ると、多少驚いたらしかつた。クライドがソンドラの自動車に乗つた事や、その後トランバル家の晚餐に呼ばれた事などは、既に彼女の耳に入つてゐたが、かうして新聞の社交記事にまで出て見ると、それは別問題になつた。「何だつてあの男が、こんなに招待されたりするのだらう？」何時でも息子と同じ氣持になつて居るグリフィス夫人は、心の中でさう考へた。

「何アに、皆、あのフィンチュレーの鼻垂れ子がするんですよ。あいつの他に、誰がこんな事をするもんですか」とギルバートが罵つた。「あいつ、何處からか——多分ベラだらうと思ふんですが、——僕達があつた男に一向構ひつけない事を聞いて來て、かうすれば僕に復讐が出來ると思つてゐるんです

よ。何の爲めに僕に復讐するのか、そいつは僕にも解らないですが、兎に角、僕があいつを嫌つてると思つてゐるんですよ。尤も、僕があいつを嫌つてゐるのは事實ですがね。その事はベラも知つてゐるし、あのクラランストーンにも傳つて行つたのですね。あいつらと來たら、實際、毎日、ぐるになつて歩き廻つて居るんですからね。しかしあの調子では、今に何か間違ひが起りますよ。それは僕が受合つてもいいです。あの連中と來たら、年が年中遊び廻つて、やれダンスだ、やれ旅行だと、全で他にすることが世の中にないかの様に飛歩いて居るのですからね。僕はあなた方が、何だつてベラに、あんな眞似をさせてお置きになるのか、疑つて居る位ですよ」

だが、これに對しては母親も抗辯した。ベラを此の町の社交界から引離して、他の家庭に近づかせる事は不可能な事だ。彼等は勝手に交際をして居るので、彼女も段々年を取つて來るから、彼女の勝手にさせて置いてもいい、と言ふのだつた。

だが、母親の此の辯解は、クライドの社交界への進出に反對するギルバートの氣持を、少しも弛めはしなかつた。何だつて！ あんな文無し野郎！ 第一に、此の俺に似た顔なぞをしやがつて、その上に、此のライカーガスにやつて來て、此の大富豪の親類面をして居るではないか。俺はもう最初から、あの男が嫌ひなのだ。俺の勝手になるならば、あんな男には一分だつて猶豫はして居ないんだ

が。

「實際、あの男なんぞ、文無しのくせに、只御面相だけで、此の町にぶら下つてゐるんぢやないですか。しかも、それが何になるんです。たとひ皆があんな男を引張り上げたとした處で、あの男には何も出來ないぢやないですか。あの男には、他の連中の眞似が出来る程の金はないのですから、あの男がその眞似を仕やうと思へば、誰かがあの男の分を拂つてやらなきやならないのですからね。何の積りであの男が、あんな事をして居るのか、僕には合點が行かないですよ。あの仲間と來たら、全くしよつちう飛歩いてゐるんですからね」

實際彼はクライドが、今後も彼等の仲間に入れられるのかどうかを考へて、その場合にどうしたものでらうと考へてゐた。若し彼がかうして、彼等に取上げられるとすれば、彼や彼の家族も、クライドに相當な扱ひをしなければならぬが、どうしてそれを逃れたものかと考へてゐた。彼はクライドを此の町から送り返す事を考へたが、彼の父親の様子では、その駄目な事も解つてゐた。

事實、此の會話の後に、夫のサミュエルが朝飯のテーブルに就いた時、グリフィス夫人は此の新聞を見せると一緒に、ギルバートの意見をも話した。しかし、クライドに對する以前の意見を變へないサミュエルは、息子の意見に同意しなかつた。反對に、それに依つて益々、最初のクライド觀が確か

められた事を感じて居るらしく見えた。

「しかし、あの男がさうして色々な家に招かれたつて、一向差支へはないぢやないか。要するに、皆ながあの男や僕に敬意を表して呉れてるんだからね。僕には、ギルがあの男をどう感じて居るかも解つて居るが、僕の眼には、あのクライドは、ギルが考へて居るよりも、少し計り立派に寫つて居るんだよ。何れにしても僕には、その事について何かする氣は無いね。あの男に此の町に來いと言つたのは僕なんだから、あの男が立身する機會だけは與へてやらなきゃならないよ。あの男も、結構仕事をやつてるらしいではないか。それに、吾々としては、世間體も考へなければならぬからね」

その後、ギルバートがまた何か母親に言つたと聞いた時にも、彼はかう言ひ添へた。「あの男がさういふ連中と交際して呉れるのは、他のやくざな連中と交際して呉れるより、餘程いゝではないか。風采も立派だし、態度も丁寧だし、工場の噂でも、仲々巧く仕事をやつてると言ふことだ。此の夏なども、矢張り僕が言つた様に、あの湖水に二三日、あの男を呼んでやつた方がよかつたらうと思ふね。だから今度でも、成可く早く、あの男に何とかしてやつた方がいゝと思ふんだ。さうしないと、吾々があの男を全で認めて居ない事になるからね。何しろ、他の人達は、あの男を現に認めてるんだから。どうだね、此のクリスマスか除夜かに、あの男を招んでやつては。吾々が他の連中よりもあの男を輕

蔑して居ると見られては困るからね」

此の話が母親からギルバートに傳はると、彼は叫んだ。「へエ、しかし、僕は御免を蒙りますよ。あの男に敬意を表するなんて、僕だけは眞ツ平です。しかし、あの男をそんなに働ける人間だと思つていらつしやるお父さんが、何だつてあの男に、本當の地位を作つておやりにならないのでせう。僕にはそれが解りませんね」

此の時若しベラが居なかつたら、此の話は此の儘で消えたかも知れなかつた。丁度此の日、アルバーニから歸つて來たベラは、ソンドラやベルチンと會つて話したり、電話で話したりした結果、最近のクライドの事を聞いたのであつた。ベラも行く豫定にして居るシエネクタデイのエラーズライ家の除夜舞踏會にも、クライドが出る事を聞いたのであつた。

此の噂は、直ぐに母親に傳へられたが、それを聞くと、グリフィス夫婦は、嫌でも應でも、クライドをクリスマスの晩餐に呼ばねばならなくなつた。彼をその晩餐會に呼べば、此の家の人達が、他人が想像するかも知れない程、クライドを無視して居るのでない事が解る筈であつた。それを聞いてギルバートは、自分が身動きも出来なくなつた事を感じて、直ぐに苦い顔をして叫んだ。「あゝ。さうですか。いや、あなたやお父さんがそれがいゝと思ひになるならば、お招びになるがいでせう。僕

は、そんな事をする必要はちつともないと思つてゐるんですが。では、さうお決めになつたらいいでせう。しかし、コンスタンスと僕は、その日にユチカに行く事になつてますから、何れにしても、その會には出られませんか」

彼は、あんなに嫌ひなソンドラの策略の爲めに、こんな事までしなければならぬかと思ふと、癪にさはつて堪らなかつた。しかも、自分は無用な人間だと知りつゝ、そんな處へ顔出しをするあのクライドは、何と言ふ卑しい奴だらうと思つてゐた。一體、あいつは何と言ふ野郎だ？

かうして、月曜日の朝、クライドはグリフィス家からの手紙を受取つた。今度はミラの名前で、クリスマスの日午後二時から、食事に来てと言ふのだつた。その晩八時に、彼はロバアタと會ふ事になつてゐるが、別に時間が衝突しても居ないので、彼は酷く喜んだ。とう／＼彼も、人並みに社交界に扱はれる様になつたのだと思つた。金はなくとも、兎に角、色々の人から招ばれるし、今はまた、グリフィス家から招ばれて居るのだ。しかもソンドラは、まるで戀にでも落ちて居るかのやうに、彼に話したり振舞つたりして居るし、ギルバートはまた、クライドの人氣の爲めに、窮地に陥つてゐるではないか？ どんなものだ！ 要するに、あのグリフィス家でも、彼を忘れては居なかつたのだ。少くとも、彼が近頃、他の人達に持て囃されるのを見て、流石の彼等も、彼に敬意を表する必要に迫

られたのだ——彼の、その得意さは、競技に勝つた子供のそれと同じだつた。彼は其處に何の騒りもなかつたかの様に考へて、非常に喜んだのであつた。

三十一

しかし、不幸にしてグリフィス家のクリスマス宴會には、色々、知名の人達が来て居た。その中には、娘のアラベラを連れしたスターク夫婦や、ウイナント夫婦を始めとして——その娘のコンスタンスは、ギルバートと一緒に此の會を缺席した。——アーノルド家の人達や、アンソニー家の人達やハリエツト家の人達や、テラー家の人達や、その他、ライカーガスの有名な人達が、皆な食卓についてゐた。その威容に壓せられたクライドは、五時になり六時になつても、その席を立てない計りでなく、ロバアタとの約束をはつきり思ひ出す事さへも出来なかつた。六時を少し過ぎると、やつと皆なは立上つて、別れを告げ始めたので、彼も立上らうとしたが、丁度その時、彼に挨拶してゐたバイオレット・テラーが、その晩、アンソニー家で行なはれる、或る會の事を話してゐた。「ねエ、御一緒にいらつしやいませんか？ いらつしやるでせう？」熱心に言はれると、彼も直ぐ黙諾して了つた。無論彼は、ロバアタがもう歸つて来て、彼を待つてゐる事を知つてゐるが、それには未だ時間があると自ら辯解した。

だが、アンソニー家に行つて、色々な令嬢達と喋つたり踊つたりして居る中に、彼の責任感には薄らいで来た。しかし九時になると、彼も多少心配し始めた。その頃には、既に下宿に歸つて居る彼女が、彼がどうしたかと思つて居るに違ひなかつたからである。今夜はクリスマスである上に、彼女は三日間の旅から歸つて来た計りではないか。

彼は内心、いよく落着かなくなつて来たが、表面的には、此の午後中と同じ昂然とした態度を、探つてゐた。幸ひにも、此の一週間、毎晩踊り狂つて来た此の仲間は、すつかり神經的に疲れて了つてゐたので、十一時半になると、誰言ふとなく散會して了つた。そこでクライドは、ベラをグリフィス家の門口まで送ると、急いでエルム街まで行つて見た。若しかすると、ロバアタが起きて居るかも知れないと思つたからだつた。

ギルピンの家に近づくと、立木の間から、彼女の部屋の灯が輝いて居るのが見えた。忽ち彼は、どう言つて此の説明し悪い遅刻を言ひ逃れようかと思ひ始めた。彼は立木の側に立上つて、何と言はうかと考へ始めた。もう一度、グリフィス家に行つてたと言はうかしら。だが、此の前の金曜日にも、グリフィス家へ行つたのではないか。數ヶ月前、彼が未だかうした社交界との接觸がない頃にも、彼はかうした嘘をついたが、それは只自分を偉さうに見せる爲めであつたので、何の良心の苛責も

なく済んだ。さうした嘘は、彼の生活とは實際的に何の交渉もなかつたし、彼女との交渉にも、何の抵觸もなかつた。しかし今、此の現實に面して、此の新しい交渉が、彼の將來の一切を意味する事になつて来ると、彼はそれを躊躇した。彼は早速、二度目の招待が来た事で、此の違約を説明しようとした。彼の物質的幸福は、凡てグリフィス家に懸つて居るから、何を置いてもグリフィス家への義務だけは果さなければならぬのだと、言ひ張らうと決心した。彼は、此の半分の眞實を頭の中に用意して、やがて雪を渡つて靜かに窓を叩いた。

直ぐに灯が消えて、間もなく、窓掛が上つた。やがて悲しく考へ沈んでゐたロバアタが、扉を開けて彼を入れ、直ぐにまた灯を點けた。誰かに見られる事を避ける爲めに、何時でもかうして居るのだつた。

「やア、どうも、此の町の交際の五月蠅いのは驚いたよ」彼は直ぐ囁き始めた。「こんな町つて、僕は見た事がないね。一度何處かへ呼ばれると、次々に、色んな所へ呼ばれるんだからね。皆、しよつちう、飛歩いてるんだよ。此の間の金曜日に行つた時には、もうこれが今年の最後だらうと思つて居たのだが、昨日になると、また突然手紙を寄越して、今日もう一度、宴會に出て来いと言ふんだよ」

「しかも、今日は二時に始まるんだと思つたから」と彼は説明し續けた。「今晚、八時に此處へ来るまでには終るだらうと思つてたのだが、行つて見ると、やつと三時に始まつて、二三分前にお開きになつた計りなんだ。實際、どうにも出来ないぢやないか。で、どうだつた？ 面白かつたかい？ 皆、君の贈物を喜んだかい？」

彼はベラ／＼とこんな事を言つたが、彼女は只、簡単に答へるだけで、クライドの顔を見詰めてゐた。「何だつてあなたは、私をこんなに扱ふのです」と言ひたけな顔色だつた。

しかし、自分の不在證明に没頭して、ロバアタに信じさせる事許りを考へて居る彼は、外套も首巻も手袋も脱ぐ事を忘れて、彼女の顔を見詰めたり、優しさうな顔をしたりして、彼女に會つた事を、出来るだけ嬉しさうに見せ様と努めてゐた。だが、さうして努めるにも拘らず、彼が只自分の辯解計りをして居ると感じて居るらしいロバアタの様子を見ると、彼は少からずまごついて來た。やがて、彼は彼女を抱きしめて、その唇を着けたが、彼女の感じたものは只、その心の一部が結び合つたと言ふだけだつた。それ以外の——金曜日と今晚、彼を彼女から遠ざけたその出来事は、依然として二人の心の中に蟻つてゐた。

彼女は、彼の言ふ事を全く信じはしなかつたが、しかしまた、至で嘘だとも思はなかつた。成程、

彼はグリフィス家に行つて引留められたのかも知れない。だが、さうでなかつたかも知れない。だつて、此の前の金曜日にも、彼はグリフィス家に行つてたと言つてゐるが、新聞にはグローバースビルに行つたと書いてあるではないか。しかし、此の事を今聞き出せば、彼は屹度怒るであらうし、それ以上の嘘をつく様になるかも知れない。今の彼女には、彼の愛より他に、彼に要求すべきものは何もなかつた。しかし、彼の心がこんなに早く變らうとは、彼女には想像する事も出来なかつた。

「だから今晚來られなかつたとおつしやるの？」彼女は何時になくはつきりと訊ねた。「どんな事があつても、今夜だけは間違ひないと、あれだけおつしやつたではありませんか」

「あゝ、さう言つたよ。無論、その手紙が來なければ、そんな積りは無かつたのだよ。伯父さんでなければ、どうにでも出來ただけで、何しろクリスマス招待なんだから、どうにも出來なかつたんだよ。大事な招待だからね。殊に、君は今日の午後は此の町に居なかつたのだから、僕としても、行く積りにならうではないか」

此の言葉の様子は、直ぐに、彼が此の親類關係を、何者にも増して重大視して居るのだとロバアタに思はせた。彼がどんなに熱情がある様に言つても、結局彼女は、彼にとつて價値の少ない物である事を、考へないで居られなかつた。それは彼女のどんな夢も犠牲も無駄である事を意味してゐた。彼

女は驚いた。

「さう、でも、さうだとすれば、手紙ぐらゐる此處へ残して置いて下さつても好いぢやないの。さうすれば、私にも直ぐそれが解つたのに」彼女は、クライドを餘り苛々させない爲めに、優しい調子でかう言つて見た。

「だからさ、僕は、こんなに遅くなる積りではなかつたと言つてゐるではないか。六時までには済むと思つてたんだからね」

「さう——いえ、——兎に角——それで、私にも解りましたけれど——しかし、でも——」

忽ち彼女の顔には、恐怖、悲しみ、不信、憤り、絶望——不思議な困惑の様子が浮んだ。その丸い眼で、ぢつと見詰められると、クライドは、彼女を逆遇したと言ふ思ひで、少からず苦しめられた。彼は多少赤くなつたが、ロバアタはそれに氣付かない顔をして、かう言ひ添へた。「私、グローバースピルの日曜日の會の事を『スター』で見ましたけれど、あなたのお従兄弟さん達の事は何も書いてなかつたわね。皆さん、行つてらしたの？」

彼女は始めて、彼を疑つてる様子を示した。それはクライドが全然豫期して居ない事だつたので、すつかり困惑して了つた。

「無論行つてたさ。しかし、何だつてそんな事を訊ねるんだい？ 僕が行つてたと言へば、行つてるんぢやないか」

「いえ、別にこれと言ふ意味はないのだけど、只知りたかつたの。しかし、あの新聞には、あなたがしよつちう話して居らつしやる、ソンドラ・フィンチュレーだの、ベルチン・クランストンだの、ライカーガスの他の人達も行つてらした様に書いてあつたわね。でも、あなたは、トランバル家の人達の他には、何誰の事もおつしやらなかつたではありませんか」

その調子が、彼を憤然とさせたのを、彼女は見て居た。

「あゝ、その新聞は僕も見したが、あの連中は行つてなかつたよ。行つてゐたとすれば、僕が會はなかつたのだらう。新聞と言ふものは、何時でも本當の事を書くとは決まつて居ないからね」彼は、彼女に一ぱい喰はされた事を感じて、不機嫌になつてゐたが、彼の言葉に自信が籠つて居ない事は、彼自身も氣付いてゐた。しかし、彼女がこんな風に彼に質問する事について、彼は憤りを感じ始めてゐた。何だつてこんな事を聞くのだ？ 彼が此の新しい世界に這入つて行かうとして居る時、何だつてそれを引止める様な態度に出るのだ？

しかし、彼女は、此の上問ひ詰める代りに、只、物足りない様子で、彼の顔を見詰めてゐた。彼女

は今、全で彼を信じないわけでもなかつたが、また全然信じて居るわけでもなかつた。彼の言つた事の幾らかは眞實であらう。だが、何よりも重大な事は、彼が嘘をついたり、かうした扱ひをしたりする必要がないほどに、彼女を愛してゐて呉れることだつた。しかし、彼が若し彼女に眞實でも親切でもなくなつたとすれば、その結果はどうなるだらう？　彼女は二三歩クライドから離れて、やるせない調子で言つた。「ねエ、クライド、私に作り事を言ふのだけは止して頂戴。よくつて？　私は、あなたがちやんと前にさう言つて下すつて、クリスマスの晩をこんなに獨りほつちで過さねばならない様にしないで下されば、あなたが何處に居らつしやらうと、何にも思はない事よ。私に氣持が悪いのは、只それだけなの」

「しかしロバアタ、僕は作り言なんぞは言はないよ。例ひ新聞にどう書いてあらうとも、それは僕の知つた事ではないからね。グリフィス家の連中は、現に其處へ行つてたんだもの。僕には、どんな説明でも擧げられるよ。今日だつて僕は、出来るだけ早く此處へ来たんだからね。しかし何だつて君は、突然こんなに氣狂ひの様になつたんだい？　僕はすつかり、君に話してゐるぢやないか。僕だつて、思ひ通りに此處へ來られるわけではないのだからね。ぎりぐりの時間に招待を寄越されれば、僕だつて仕方がないぢやないか。そんなに氣狂ひの様になつて、どうする積りだい」

挑むやうに彼に見詰められて、こんな風に言はれると、ロバアタにはどう言ひ出していか解らなかつた。除夜會の新聞記事も、彼女の頭に浮んでゐるが、それについては、今は何も言はない方が得策だと思つた。何時になく彼女は、クライドが出入りするあの明るい世界が癪だつた。だが、彼女を苦しめ始めたその嫉妬を、彼に知らせる事は躊躇された。彼等はあの立派な世界で、あんなに楽しい時を過して居るのに、彼女には何も無いのだ。しかも彼は、絶えずソンドラ・フィンチュレーだの、ベルチン・クランストンだの話しをして居るではないか。その中の誰かにでも、彼は興味を持つて居るのだらうか？

「あなた、あのフィンチュレー嬢を非常に好いていらつしやるの？」　突然彼女は、密かに彼を見詰め乍ら言ひ出した。彼女は、何かの手掛りを得て、自分の苦しみに多少の満足を與へたいと思つたのだつた。

忽ちクライドも、此の質問の重大さを感じた。彼女の顔よりも寧ろその聲の中に、それとない興味と、嫉妬と、やるせなさを感じたからだつた。彼女が最も失望して居る時、彼女の聲には、時にひどく優しい、可愛らしい、悲しさうな何かがある事があつた。だが同時に、彼女がソンドラに向けて居るらしい險しい透視術的な態度を感じて、クライドは多少たじくとした。即座にクライドは、それ